麻原彰晃の世界 PART9

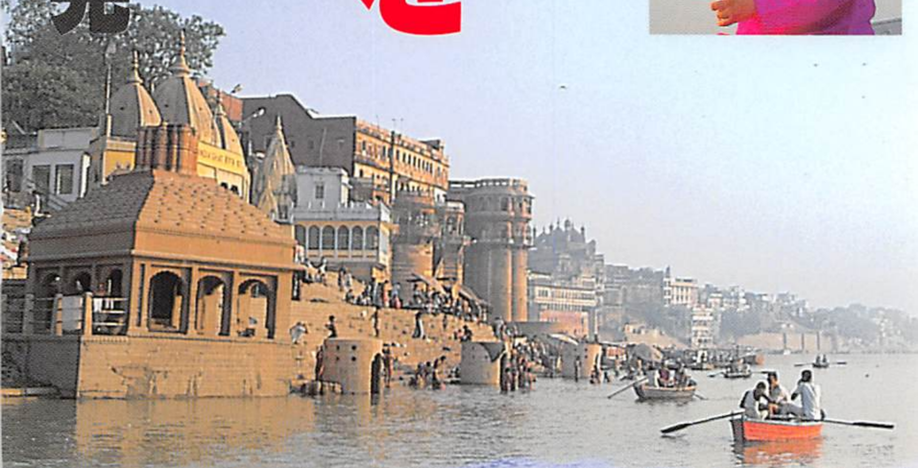
尊師、聖地インドを行く

第一部：信徒と共に、巡礼の旅

第二部：直弟子用奥儀説法集



麻原彰晃



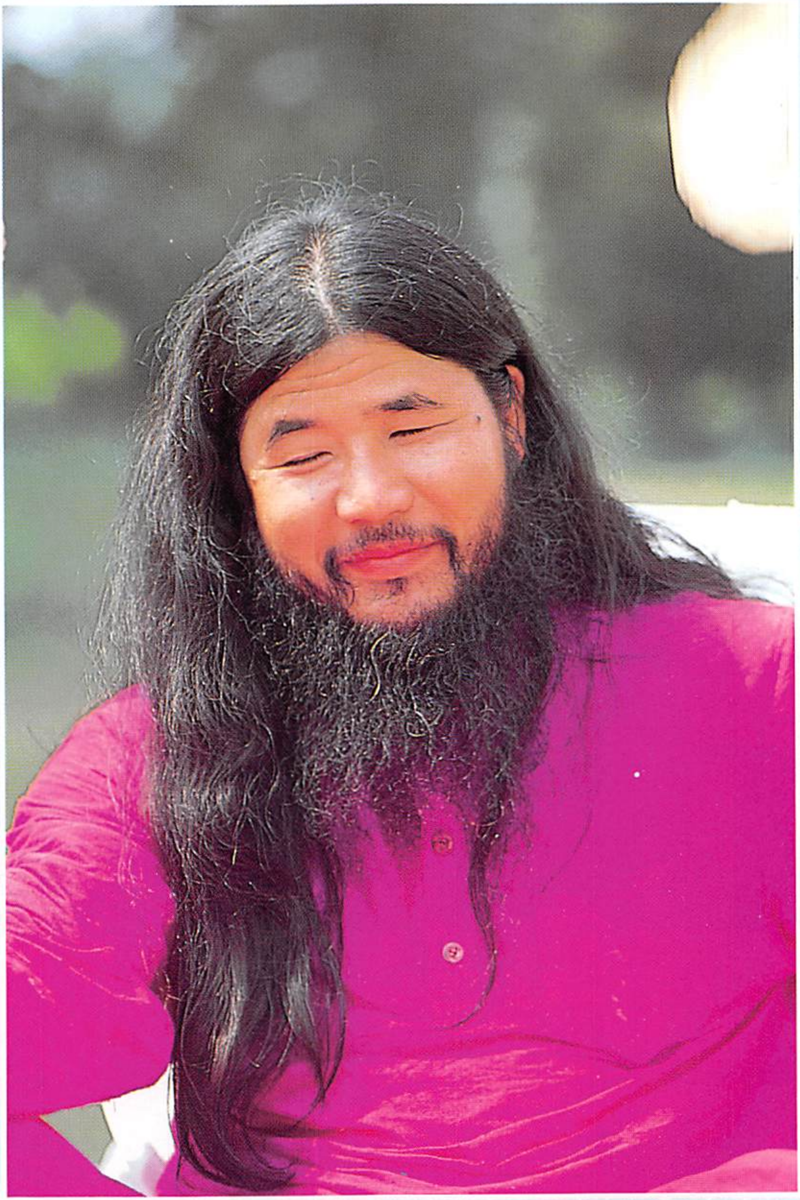
麻原彰晃の世界 PART9

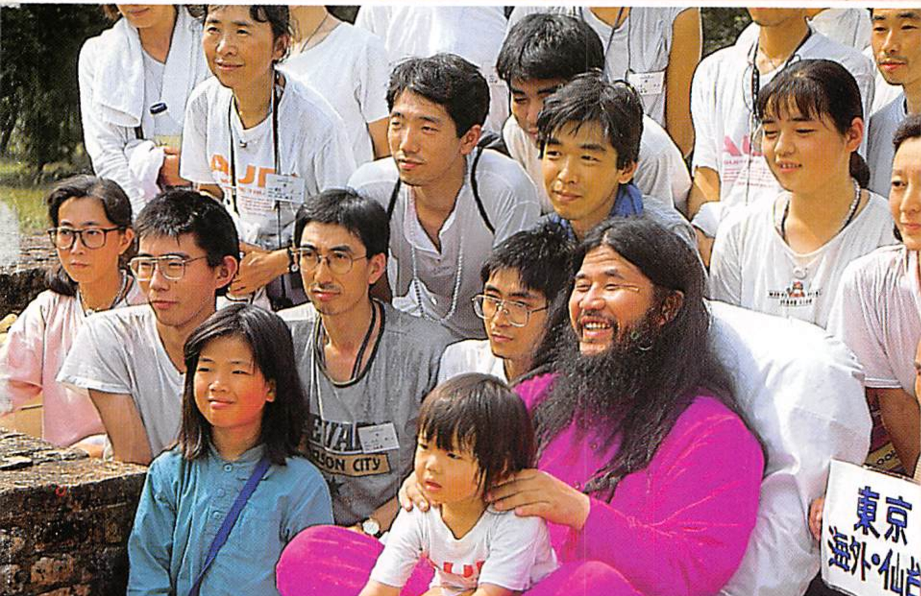
尊師、聖地インドを行く

第一部：信徒と共に、巡礼の旅

第二部：直弟子用奥儀説法集

麻原彰晃




東京

はじめに

覚者サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）をはじめ、いにしえの時代からインドには実に多くの聖者方が登場し、真理の法則について説かれてきました。このインドの、いわゆる聖地、仏教ゆかりの地を麻原彰晃尊師が改めて巡られたのは、今からおよそ半年前の一九九一年五月のことです。

ご多忙極まりない尊師のことですから、以来、数回にわたって寸暇を利用しての渡印でした。が、本書を読み進めていただければわかるとおり、それぞれの地で語られた内容には、瞑想、あるいは修行のいわば奥儀ともいうべきも

のが随所に散りばめられています。これは我々のように尊師にご指導を仰ぐ者たちにとっても高度な教えで、現代にはなかった貴重なものといえるでしょう。

そのような教えを、尊師は行く先々の、その場その場に残されているデータ（例えば、サキャ神賢ならサキャ神賢が残されたデータ）によってお知りになっているのです。もちろん、これは最終解脱者の尊師だからこそ可能な、神通力が可能にした一種の奇跡であることはいうまでもありません。

我々はこの繰り返しを見ながら、この半年間、尊師が寸暇を惜しんで海外のいわゆる聖地を訪れようとしてきた理由がようやく理解できました。また、その記録を後世に残さなければならないと思い、ここにそのとき尊師が語った

全記録をまとめました。

この書を手にされた方々が、真理の道に沿って歩まれんことを心から願います。

一九九一年十一月　オウム真理教広報編集部



麻原彰晃の世界 ❖ PART 9

尊師、聖地インドを行く

――目次――







第一部　信徒と共に、巡礼の旅

◆悟りの地、ブッダガヤーにて――その一

「真我の状態――絶対自由・幸福・歓喜」

（一九九一年十月六日）

◉マハー・ボーディ・ツリーの下で

ボーディサットヴァ、つまり到達真智運命魂の生き方というものは、実験、観察、検証の繰り返しである。実験、観察、検証とは何かというと、例えばサキャ神賢の場合、無所有境、あるいは非認知非非認知境を提唱する聖者のように、そしてその状態、例えば無所有境や、あるいは非認知非非認知境を経験すると。しかし彼は、受想滅、つまり経験の完全なる止滅を経験していたわけだから、これは両方とも最終地点ではないということを悟り、そして苦行の道に入ると。

なぜ苦行の道に入ったかというと、苦しみ、それをより強く認識することによ

り、現象の把握、つまり、この現象界が一切苦であることを認識しようと努めたわけである。しかし、結局その苦しみの修行というものは、心の内側に否定的想念のみを生起させる結果としかならなかったと。例えば空腹であると。それにじっと耐えたとしても、そこから新しい思念が生じるわけではない。つまりこれは、単なるカルマを落とす結果にはつながったが、素晴らしいカルマ、いいカルマを積む結果とはならなかったと。

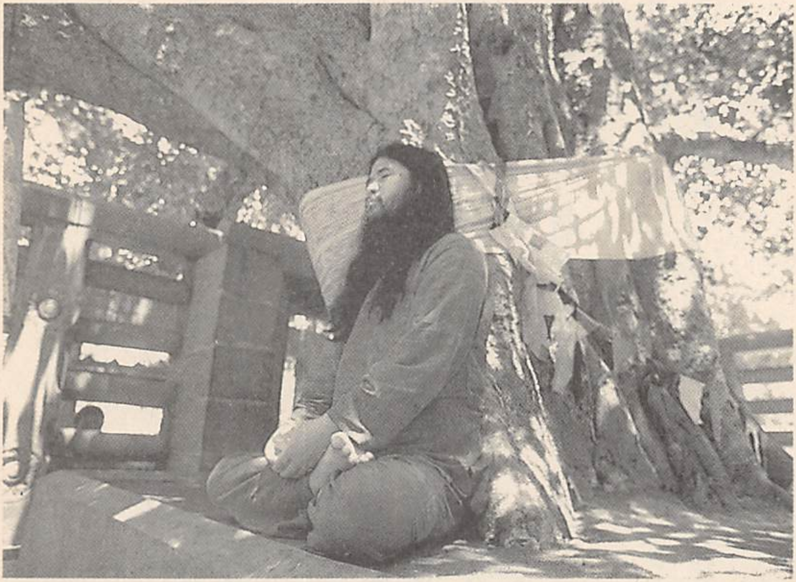
もともとサキャ国の王子として生まれたサキャ神賢は、大変な徳の持ち主であったと。よって一応、この苦しみの経験および苦しみの瞑想を終了した後、そこには当然徳だけの状態となった後、スジャーターの乳粥（ちちがゆ）の供養により肉体のエネルギーを回復させ、そしてサマディに入られたと。君たちと一緒に永代帰依祈願を撮る予定でいる場所、マハー・ボーディは、これは、彼が七回目のサマディのとき、つまり彼は一週間のサマディを七回行なったわけだが、その七回目のサマディのときに、背景として、バックボーンとしてお座りになった樹だといわれています。

もともとこのマハー・ボーディは、いったん完全に枯れ——そのマハー・ボーディの一部がその前にスリランカに移植されていたわけだが——そのスリランカの移植された樹の一部をまたこのインドに植えることにより、今のマハー・ボーディ・ツリーがあるといわれています。ということは、結局は元の樹の分け木であるわけだから、同じ樹ということになる。

◉絶対的な自由・幸福・歓喜の状態

実際にこれは、その人たちがどの程度の瞑想修行を行なったかによって、このマハー・ボーディでの経験は違ってこよう。

では、なぜこの樹によってそういう経験が生じるのかと。それは、すべての物質は経験が内在しているんだというヨーガの理論があります。例えば、わたしの今着ているクルタ、これは着る前の状態とわたしが着た後の状態では、皆さんの五大エレメントに対する影響は違ってくる。まあ、このような理論から、大衆部、マハーヤーナではエンパワーメントに重きを置き、エレメントを浄化・強化する



ということでイニシエーションが発達したわけです。

今回まだ、オウム真理教の教えに接されて新しい方等は、ちょっと戸惑っていらっしゃる部分があるかもしれないけど、要するにオウム真理教の教えというものは、純粋仏教、あるいは絶対的な真理であるというふうにお考えになってよろしい。

で、真理とは何かというと、今その真理の一部を科学は突っついていると。つまり、科学を内在した、この宇宙の法則のすべてを内在している教え、これがオウム真理教の教えであると。それは当然、粗雑世界における科学を含めて、内なる哲学、これも当然内在されている。そして皆さんが、この教えを今生、あるいは今生だけではなく完全なる十力者に到達するまで学び、実践なさることによって、必ずや絶対的な状態、つまり絶対的な自由・幸福・歓喜という真我の状態へと到達するでしょう。

これは実際ね、経典を研究していても、ちゃんとアートマンという言葉が出てくるし、このアートマンは真我というわけだが、この真我が独存位になるための

修行、これが仏教であるとはっきり提示されています。ですから、ヨーガの教え、それから仏教の教えが全く変わらないものであるということを認識し、これからの修行の旅に向かわれたらいいと思います。

ここでの見どころは、サキャ神賢が沐浴なさったといわれているミラクル・ポンド、そして先程言ったマハー・ボーディ、そしてその前の、一週間かける六回、お座りになったという六本のツリーですね、樹、ここらへんが見どころになると思います。そしてあともう一つは、サキャ神賢が経行として使われていた経行廊。ですから、このポイントポイント一つ一つに精神を集中し、グルとの縁、それからグルの背景にあるシヴァ大神およびすべての真理勝者たちとの縁、これをより強く結ぶんだという気持ちをもって、今日このブッダガヤーの経験を培ってください。いいですね。

それから最後に、皆さんの今回の巡礼の旅は、これは「大完全煩悩破壊経」、日本ではまあ「大般涅槃経」といわれてる経典があるわけですが、この中にもはっきりと在家信徒が天界へ至る道の一つとして称えられています。ですから、

皆さんは、よりいっそう今回の旅においてステージを上げるはずです。それを確信をもって記憶修習しましょう。いいですね。

それではこれから瞑想に入りますが、このマハー・ボーディが、少なくとも神聖世界、そしてニルヴァーナに通じている樹であるというふうに認知し、この下で瞑想なさることは大いに利益があると思います。そして、そのエネルギー、あるいは意識、それを日本に持ち帰って、自分の修行の糧としていただきたいと思います。

◉ミラクル・ポンドにて

ここは、サキャ神賢が沐浴なさったといわれている跡に造られた池です。で、確かにわたしが一度、今から七年前にインドへ来たときもそうですし、前回来たときもそうですけども、特別なエネルギー状態にある池であると思います。で、このようなエネルギーの強いところで瞑想する、これは皆さんにとって大変貴重な体験です。

で、ポイントは、このミラクル・ポンドもそうですし、先程のマハー・ボーディ・ツリーもそうですけども、皆さんがどういう意識状態であるか、例えば粗雑な意識か、あるいは微細な意識か、あるいは粗雑、微細を超えて心の本性に近い意識状態であるか、あるいは本性を超えているかによってその経験はおのずと違います。ですから、それぞれ自分のステージを計るためにおいてもね、しっかり座ってください。

◆悟りの地、ブッダガヤーにて——その二　（一九九一年十月六日）

「カルマの返りの早さ」

この現象界と、そしてアルトラル世界、そしてコーザルの世界、この三つの要素を考えた場合、当然コーザルの世界の方が最もカルマの返りが早いといわれると。で、これは皆さんが、まあここでね、簡単に証明することができると。

それはどういうことかというと、例えば光というものは、パッと瞬間的に、まあ一秒間、だいたい地球を七・五周するわけですから、瞬間的にその光を認知することはできると。

しかし、例えば音になると、もう既に、例えばここから五〇メーター、あるいは三〇メーター、あるいは一〇メーターと間隔を置くごとにどんどんズレが出て

くると。つまり、音というものは、それだけカルマの返りが遅いんだと。つまり、アストラルにおいてはもう遅いんだということがいえると。

そして、この粗雑次元においては、もっとカルマの返りが遅いと。で、カルマの返りが遅ければ遅いほど、わたしたちはカルマを認識することができないと。よって、すべての現象をしっかり認識できないがゆえに、誤った見解がそこで生じてくると。わかるかな、言っていることは。だから、カルマの返りが早い方がいいんだと、そう考えなければならない。

なぜかというと、例えばここに病気をしたとして、その病気が初期の段階で発見された場合と、もう末期になって発見された場合とでは結果が違ってくる。そうだね。それと同じように、カルマの法則についても早く知り、そして自分のカルマが早く現象化し、それを早く落とした方がいいんだと、そう考えなさい。いいね。

◆ラージャガハ　その一――竹林精舎にて　（一九九一年十月七日）

「現象を正確に認識する力を」

◉すべては心の現われ

すべての現象は心の現われである。例えばそれは、皆さんがこのインドに来て、まずお感じになったインド人の気質。大変ラジャスであると。つまり、火元素が強いと。これは、この気候と関係があると。気候がこうだから性格がそうなのではなく、性格がそうだから気候がこうなのであると。

では、その反証をどうやってするのかと。同じ熱帯地方に属し、より赤道に近いスリランカは、もっと温暖である。これはもちろん、海洋性気候だという現代の科学的説明もつけられないことはない。しかし、そうではない異常気象現象が

たくさん起きていることからもわかるとおり、今科学で証明されていることは一部であって、その背景にあるものが何であるかということはまだ確定されているわけではない。

ところが、これを仏教やヨーガにおいては、すべてを心の現われとしてとらえている。もちろんそのような見方をすれば、例えば寒い地方に怒りっぽい人が少ない、あるいはまあのんびりした人が多いという現象だとか、あるいは多湿の、つまり雨の多い地方の人は、性格的にどちらかというとねばっこいと、おっとりしているというような気質がある等からもわかるはずである。これはもちろん、医学的な気質、それから気候との関係において裏づけることもできる。

よって、このジャンブ州（人間界にある四つの大陸のうちの一つ）が、これから中間のカルパを過ぎ、そしてハルマゲドンの後、徐々に徐々に寿命が延び、八万歳へ到達するころに、これと同じ気候であると考えない方がよろしい。というよりも、そのころの気候はもっと温暖であると、これはわたしが断言できよう。それは、例えば日本の気候がわたしたちの生きている間に少しずつ少しずつ変化

したのと同じように、このインド大陸の気候も変化するのである。

そして、おそらくそのころ、君たちは同じようにこのジャンブ州で転生するはずである。そして八万歳の寿命を有し、そこで真理を実践し、大いなる空、あるいは大いなる楽、大いなる悦、大いなる喜等を経験し、ある者は煩悩を破壊し、ニルヴァーナに入るだろうし、ある者はそこから菩薩の修行を続けるであろうと。つまり、到達真智運命魂の修行を続けるであろう。

今回わたしが皆さんに対して感じていることは、やはりさすがにオウム真理教の信徒であると。この暑さの中、よく耐えていると。もちろん、日本の暑さとこのインドの暑さ――まあ、今日はね、ちょっとかなり強い暑さを感じるかもしれないが――そんなにまだ差があると感じていないかもしれない。しかし、これから午後、そうだね、一時、二時ぐらいまでは、かなり強い日差しが待ってるはずである。もちろん、前回七月に来たときのギッジャクータ山は、より暑かったことはいうまでもない。

◉竹林精舎にて

ところで、ここは竹林精舎である。この竹林精舎というのは、ビンビサーラ王がサキャ神賢に対してお布施をなさった精舎である。ビンビサーラ王は、パセーナディ王と並び、仏陀の王様としての二大弟子であった。しかし、ビンビサーラ王とパセーナディ王では、ビンビサーラ王の方がより仏陀に対する帰依が強かったと、わたしは記憶している。

で、このビンビサーラ王の役割、彼の役割は何かというと、法を聴き、そして、その法を自分たちの臣下に伝えること、そしてお布施をすること。まさに在家の修行者の鏡であった。パセーナディ王は、若干、まだ自分自身の煩悩というものを完全に切ることができなかったようである。

そして、この後ろにある池、これはサキャ神賢が入浴なさった後のミラクル・ポンドということになっている。もちろん、この池のエネルギーもなかなかいいエネルギーを出している。

ここで、君たちが一つはっきり理解しておかなければならないことは、この場

所——あるいはブッダガヤーもそうだが——あの場所、まあ確かにミラクル・ボンドであったり、あるいはマハー・ボーディ・ツリーであったりするわけだが、それと同じものであったかどうかについては、これは当然疑問の余地がある。というよりも、同じものでないというふうに考えた方がいいだろう。

しかしわたしたちは、この粗雑次元を通してだけではなく、微細次元を通しても当然十力者のエネルギーを受けることができるわけだし、あるいは、そのような形で現象を見る方がより正しく見ることができるわけだから、今目に見えている、例えばミラクル・ボンドについてあまりこだわる必要はないのである。わかるね、言っていることは。

つまり、もう二千五百年経っているわけだから、当然だれかが壊し、またその上に土が盛られ、それを今度は掘り起こして、一層二層と掘り起こして今こういう形があるわけだから、この形そのものがサキャ神賢が直接使われたミラクル・ボンドと考えるより、この場所にあったんだと考えて、それに対して礼拝する、あるいはそれに対して瞑想する方がより効果的であるということなのである。

◉現象を正しく見つめる

仏教というのはもともと、現象を正確につかまえる、現象を正しく見つめることからスタートする。これは事業に対してもそうだし、あるいは国家運営に対してもそうだし、あるいは修行に対してもそうである。なぜならば、現象を正確にとらえたならば、その後当然起こり得る対処というものはより正確になる。より正確になることによって、例えば傷口を少なく済ませることができるし、あるいは早く傷口を治し、そこから大発展させることができるわけである。よって、君たちが何をもって最上のものと考えなければならないかというと、それは、より正確に現象を認識する力をもって最上のものと考えるべきである。

例えば例を挙げるならば、わたしたちは必ず死ぬものである。これはそうだね。これを、だから「いや、わたしは死にたくないんだ」と否定するのではなく、死ぬものであるという点から考えて、そして、じゃあこの短い期間をどう生きるんだと考えると。これが仏教なのである。

あるいは、例えばカルマの理法というものは存在する。そうだね。ということ

は、カルマの理法において自分がどういう生き方をしたらベストな人生を送れるかということを考えるべきなのである。

あるいは、すべての喜びというものは、必ずそれから離別するときには苦しまなければならない。そうだね。だとするならば、その愛着の対象に対してどのように接しなければならないか、それを正確に認識し、対処すべきなのである。わかるね、言っていることは。これが仏教であり、真理なのである。

よって、何も特別に難しいことを唱えているわけでもないし、難しいことを主張しているわけでもない。ただ大切なことは、それをそう思いたくない、こうあってほしいと思う願望こそがわたしたちを苦しめる要因なんだということを理解しなければならない。

じゃあ、仏教そのものは否定的な宗教なのかというとそうではない。例えば、ここに十万円のお金があるとして、その十万円のお金をどう使うかと。ある人はそれを競馬に投資して、一攫千金(いっかくせんきん)、例えば百倍の利益を得るためにその十万円を突っ込んでゼロにするかもしれない。ところが、ある人はその十万円を十一万円

に増やし、そして十三万円に増やし、二十万に増やし、そして、気づいたときに一千万になっているかもしれない。

どちらの方が現実的かというと、当然それは後者の方が現実的なはずである。そうだね。これが仏教と、それから他の宗教というか、他の現世願望成就の違いなのである。よって、仏教は哲学だといわれるのは、その論理があまりにも明確で、しかも学問的だからなのである。しかし、その学問的仏教というものは、実際体験によって裏づけられたものであって、別に学問ではない。つまり、これは君たちが歩いていく地図であり、より正確な地図、しかもそれが段階段階を追って書かれてる地図だからこそ、それが学問的に見えるだけなのである。わかるね、言っていることは。

だから、君たちはそれに確信を持ち、そしてしっかりと修行するようにしなさい。そして、この竹林精舎で多くの弟子たちが修行してきたことは事実だし、この竹林精舎で皆さんがこれから自分の好きなところに座って瞑想し、素晴らしいヴァイブレーションを得るようにしてください。いいね。

◆ラージャガハ　その二――ギッジャクータ山にて　（一九九一年十月七日）

「無常の世界から脱却する第一の法」

◉このカルパの終わりに

ここはギッジャクータ山、皆さんは漢訳の「霊鷲山（りょうじゅせん）」という言葉で何度か読んだり聞いたりしたことがあるはずです。ここでは、サキャ神賢は、『法華経』や、あるいはその他の大乗経を説いたといわれています。しかし、それは真実でないという教えもあります。で、この賛否については大した問題ではない。少なくとも、上座部仏教においては大乗の思想がかなり発達していたことは事実だし、そしてそのテストケースとして、アーナンダがサキャ神賢のテストに遭っていたことも事実であると。

ここでサキャ神賢は、多くの法をお説きになりました。そしてそれは、クンダリニー・ヨーガの成就者に対して法をお説きになり、クンダリニー・ヨーガから煩悩破壊という、つまり阿羅漢（あらはん）、そして阿羅漢から十力者に至る道、これをお説きになったわけです。

ここのヴァイブレーションは、わたしたちが一回目に来たとき、二回目に来たとき、三回目に来たときと、どんどんエネルギーが強められています。そして、今回皆さんがここに実際いらっしゃって、そして供養、それから瞑想をなさって、よりいっそうサキャ神賢をはじめとする真理勝者方と、そして皆さんとの縁は強くなったはずです。

もともと大乗思想の根本にあるものは何かというと、まず個が解脱すると。これは第一前提になります。そして、解脱した魂が、その解脱の状態、つまり自由・幸福・歓喜という三つの状態を捨て、すべての魂に対してその状態を説き明かし、そして多くの魂をその世界へ導き入れるということにあるわけです。

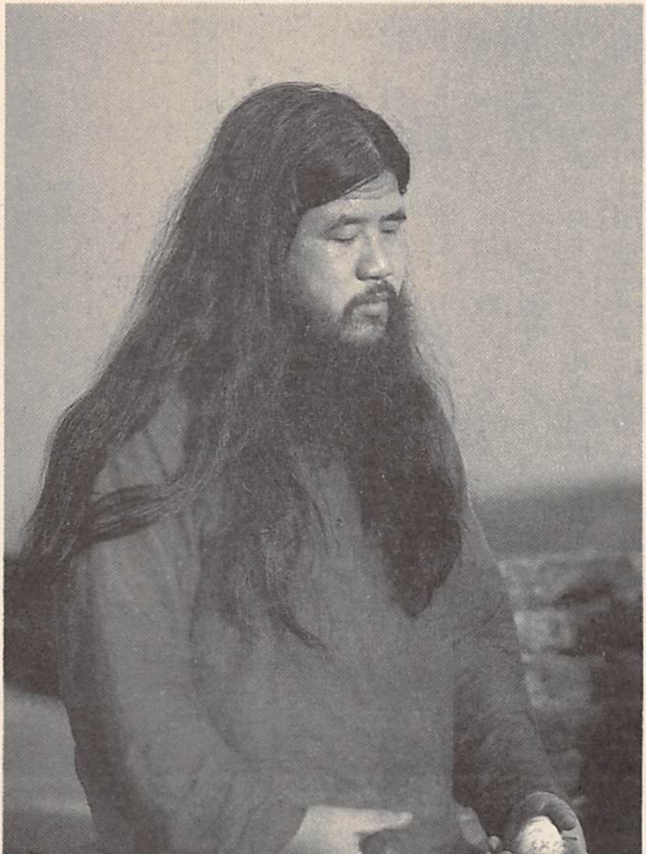
では、なぜそれが必要なのかというと、例えばいくらデーヴァへ生まれ変わっ

たとしても、このカルパの終わりには、この太陽系を含めた宇宙はすべて破壊されます。そして、破壊されたときに何も残りません。そのときには、デーヴァそのものもすべて、そのカルマに応じて、光音天界へ転生するか、あるいは、よほど質の悪い魂については他の宇宙の地獄へと至るわけです。ですから、いかに快楽を求めようとも、いかに楽しみを求めようとも、その快楽や楽しみというものは無常を根本としているわけです。

その無常を根本としているものを超越するためにはどうしたらいいのかと。もちろんそれは、光音天界以上の世界へ生まれ変われば、単純なるカルマにおける死というものは存在しません。しかし、やはりそこにおいても、例えば例を挙げるならば、空無辺の世界においては二万カルパの後、やはりカルマに応じて三悪趣へ転生しなければならないかもしれない。

◉正見解に重きを置く

では、そういうその無常を根本とした世界から脱却するための第一の法は何だ



ろうかと。それは正見解であるといえます。では、正見解とは現代語で訳したら何だと。それは、真理のデータをたくさん知ること、記憶すること、これが正見解です。

で、ここで皆さんは一つ疑問が生じるかもしれない。では正見解と、正念つまり正記憶修習述との二つの違いは何だと。これはね、正見解というのは多くのいろんな法を記憶する、単純に記憶するだけなんだよ。ところが正記憶修習述というのは、一つのことを繰り返し繰り返し唱えて、それを記憶するということなんだね。

例えば、例を挙げるならば、有能神の世界はどういう世界である、有能神の世界はどういう世界である、有能神の世界はどういう世界であると、このような形で唱えるとか。あるいは、例えばわたしたちの身体は、まず骨は、頭蓋骨があって、頚骨があって、そして胸骨があって、肋骨があって云々というふうに、それを何度も何度も繰り返すと。これは記憶修習述と。ところが単純に、頭蓋骨、例えば頚椎、あるいは胸椎云々というふうに記憶していくこと、これは正見解に

属するわけだね。

なぜ、じゃこの正見解が第一の法であり、すべてであるといえるかというと、正見解をもとに思索して初めて正思惟が成立します。もし正見解なくしては、正思惟は成立しません。つまり、根本となる教え、土台は何かというと、正見解であると。その正見解をもとにしてのみ、正思惟ができるわけであり、あるいは正しい反省、例えば慚愧（ざんき）の念に対するザンゲとかね、あるいは外側に対する、例えばグルに対する告白とか、そういうものが成立するわけです。もしこの正見解がなければ、一切そういうものは無意味になるわけです。

ですから皆さんは、まず今生で解脱をしたい、あるいは今生で悟りを開きたい、あるいは今生で少なくとも高い世界へ転生したいんだと、そして来世、より高い世界へ転生したいと考える人は、正見解にまず重きを置く。いいね。そしてその後、正思惟、そして最も実践しやすい正語へと移っていきなさい。いいね。

そして、確かにヨーガ的な技法によってアラハットに到達すること、あるいはマハー・ムドラーを成就することは価値があります。しかし、それも正見解がな

ければ、その自分の状況というものが、逆に理解できないと。確かに、コーザルへ没入するわけですから、二万カルパの長きにわたりその人は楽を得ることができるけども、しかし二万カルパといっても有、つまり有限に属します。有限に属するというものは、必ず終わりが来ると。

つまり、初めと終わり、瞬間瞬間をとらえるならば、二万カルパであろうとも、あるいは十年であろうとも変わらないわけだね。これが仏教の、無常を根本としている理由です。わかるかな、言っていることは。だから、そこをしっかりと理解しましょう。いいね。

◉絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜とは

そして、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜というのは、これはね、ゼロになることじゃないんだよ。絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜というのは、つまり、真我の意志によって自在にこの三界へ自分自身を現わし、そこで生活することができると。そして必要なくなったら、また戻ってこれる、これが絶対自由であると。

で、絶対幸福というのは何かというと、これはすべてのカルマの制約を受けなくなっている状態。だから、悪業も善業もそのときには、もうその人は存在しないわけです。これは絶対幸福の状態であると。

絶対歓喜というのは、その人の善や、あるいは徳が満ちて、何もしなくても本当に快感の状態でいられると。いつでも快感状態になれると。これが絶対歓喜であると。

つまり、これらはすべて論理的なんだね。例えばどういうことかというと、慣性の法則で、静止しているものに対して力を加えなければずっと静止している。そうだね。同じように、例えばエネルギーが循環し続けてそれに漏れがなければどうだ。永遠に減らないと。こういうことを、仏教やヨーガではいっているわけなんだよ。

だから、一般的に日本に伝わってきているような正しくない教えに対して決して耳を傾けない。いいね。君たちは最高の法を持っているわけだから。

そして、この最高の法については、今回スリランカに行ったときも、例えば、

ね、お坊さんたちがわたしに対して、悟りを開いてる人とか、あるいは世界でただ一人仏教の説ける人、あるいは世界でただ一人救済のできる人という、絶賛をしてくれたわけだけど。あるいは、ある大臣が、わたしに対して阿羅漢であるという言葉を使ったりしていたわけだけど、それは、わたしの話している内容が、仏教の内容そのものであるということなんだね。

つまり、最も正確にパーリ語の読めるスリランカ人にとって、わたしの仏教は当たり前の仏教であると。しかも、それは当然の仏教であると。で、ただスリランカにはアラハットになった人は二人しかいなくて、一人はサンフランシスコで今法を説いていると。もう一人は、森で瞑想し続けてるという話だ。

よって、君たちはそういう条件のもとで今真理を実践できるわけだから、それに対して確信を持ってしっかり頑張りましょう。いいね。

◆初転法輪の地、サールナートにて

「苦の超越に至る八段階の道」

（一九九一年十月八日）

◉真理勝者から真理勝者へ――受け継がれる法の輪

これから七十八億年後のこのヴァーラーナシーは、この様相とはまたかなり変わって、もっと近代的、そしてそれでいて華麗、そして寂静といった三つの要素を備えている土地となるであろう。

もともとこの場所は、偉大なる真理勝者であられる、また十力者であられるサキャ神賢が、初転法輪を転じられたところである。その初転法輪の内容とは何かというと、苦、苦の生起、苦の滅尽、苦の超越に至る八段階の道と。それと、十二縁起の法をお説きになったところである。もともとこの地には、偉大なる真理

勝者方がよくいらっしゃり、そして法をお説きになった。例えば、ヴィパッシー真理勝者がそうであり、そしてカッサパ真理勝者がそうであり、先程述べたサキャ神賢真理勝者がそうであると。そして、これから七十八億という未来際に、マイトレーヤ真理勝者が、ここで同じように法輪を転じるであろう。

で、なぜその法輪を転じることができるのであろうかと。それは、ここに一筋のデータ、つまり真理を説き明かすためのデータが存在しているからである。では、なぜそれを、今説き明かしてはいけないのかと。それは、現代のわたしたちが、例えばその法を聴いたとしても、それについて理解することはできたとしても、それを体感する、体得するに至らないからである。

例えば、それはちょうど、絵のかき方をいくら学んでも、それを自在にかくようになるためには時がかかるのと同じように、わたしたちが今ここで法を聴いて、それを記憶修習したとしても、その法が完全に根づくまではそれだけ長きにわたる時が必要なのである。

そして、おそらくここにいらっしゃっているほとんどの人は、前生においても

この地を一度や二度は訪れたことがあるだろうし、それから未来際においても何度となくこの地を訪れ、そしてより真理に対する確信を深め、輪廻転生を続け、七十八億という長きにわたる時の後、ここで初転法輪を聴き、そして煩悩破壊していくであろう。それほど多くの時が必要なのである。

◉苦しみを知り、苦しみの生起を知り、苦しみの滅尽・破壊を知る

まず、ここで説かれる原則的な法とは何かというと、この諸現象、わたしたちが生活している一切の現象は楽しみの裏に必ず苦しみが隠されていると。

それはちょうど、ここにドブがあったとして、そのドブの水をすくうと。確かにこのドブの水の中には、魚の餌となるプランクトンも存在してるだろうが、それと同じように多くの科学物質その他が存在していて、わたしたちの体を害すると。これと同じようなものである。あるいは、例えばわたしたちは食事を取ると。その食事の一部は栄養となるが、一部は糞尿となるというのと同じであると。

つまり、この現象界における楽しみの裏側には必ず苦しみが隠されているので

である。これが、第一の真理における原則である。

第二は、それに対してわたしたちが求めようとすれば、必ずその苦しみ、隠されている苦しみというものが生起するのだということである。

例えば、この世の中に対して淡々ととらわれることなく生きるとするならば、その楽もわたしたちには強くアプローチしてこない代わりに、苦しみもアプローチしてこないと。そして、その楽というものも必ず苦しみに変化するわけだから、結局苦しみから出離することになる。つまり、わたしたちがこの現象の世界に強く縛りつけられれば縛りつけられるほど、苦しみというものは生起する、起き上がるのであるということである。

これは例えば、金を儲けたいと考えたり、事業を成功させたいと考えたりするのも同じである。淡々と自分自身の目の前にある事象に対して集中し続けていれば、勝手に成功するし、勝手に金は集まると。あるいは、例えば偉大な作家になろうと考えるのも同じである。いい作品を書こうとせず、自分のベストの限りを尽くそうと考え、筆を執れば、そこには当然成功というものが生じてくる。

しかし、人間はそう思わない。つまり、例えばいろいろなイメージを膨らませながら、あるいはいろいろな思索をしながら、あれやこれやとやりながら、結局そこでエネルギーをロスし、事業を失敗したり、あるいは経済的損失に陥ったり、あるいはいい文章が書けず、結局作家生命を断念しなければならないというようなことになってくると。

第三番目の苦しみの滅尽、苦しみの破壊と。これは何であろうかと。それについては、まず現象を正確に見つめると。そしてその裏側に、現象の裏側はすべて苦しみであるということを認識すると。そして、この認識した結果というものを正確にとらえ、そしてその原因を探り、その原因を取り除く作業を行なうと。これこそが苦しみを破壊する、滅尽する方法なのである。

例えば、過ちによって結婚したと。その妻や、あるいはご主人が自分にとって不幸をもたらすタイプのものであったとしたら、それはさっさと別れればいい。もちろん、大乗の修行、あるいはヴァジラヤーナの修行によって、その人を変えて真理を実践させようと、そしてその人を幸福にしてあげようという心を持つな

らば、それはもっとより崇高な心の働きとはなるが、それはなかなか大変である。

このように原因をスパッと見つめ、そしてそれに対して対処すると。これが苦しみの破壊、滅尽であると。

◉高い世界へ至るための準備

では、その苦しみを超越するためにはどのような方法があるのかと。それは、聖なる八段階の実践であると。昨日も述べた、まず正見解。これは、教義をできるだけたくさん学び、そしてものを考えるときの土台を固めると。

ヨーガ派と仏教の違いはここにある。ヨーガ派というものは、自分の考えというものを重んじる。よって、ズレることがあるし、魔境に落ちることも多いと。

しかし、仏教というのはもともと過去の仏陀、その過去の過去の仏陀等がお説きになった偉大なる教えというものが存在している。その教えをまずしっかりと記憶すると。その記憶することによって、次の正しい思索、思索ができるようになると。

つまり、どのように考えたらいいのか。これはちょうど、正確な図面をまず記憶し、その図面にのっとって何かを作り上げるというのと似ている。確かに試行錯誤することによって作り上げたものは、その努力というプロセスにおいて価値は存在するかもしれない。しかし、でき上がったものがベストであるかどうかは別問題である。

もし、最高の図面、今まで多くの人たちが練り上げた図面というものがそこに存在するとするならば、それを使って作り上げた方がよりいいものができるはずなのである。よって、正見解を第一とし、そして第二番目に、それに基づいて正思惟すると。

そして、この正思惟においては、愛著・邪悪心・迷妄といった三つの要素をできるだけ減少させることに努め、慈愛・聖哀れみ・聖称賛・聖無頓着といった四つの要素を培うと。これを日々修習しながら、第三段階の正語の実践に入っていくと。

なぜね、この正見解、正思惟、正語といったプロセスに入らなければならない

のかと。これは、高い世界の神々は、綺麗な言葉をお使いになり、綺麗な心をお持ちになっているということを考えたら、わたしたちが綺麗な言葉を使い、綺麗な心を日々修習する瞑想が、あるいは実践が何を意味するか理解できるはずである。つまり、高い世界の神々の心に心を合わせるだけではなくて、自分たちがその世界へ至るための準備をするわけである。

この正語においては、妄語・綺語・悪口・両舌という四つの口のカルマを捨断し、そして先程述べた四つの無量心にのっとった言葉を語ると、ね。

◉エゴから来る行為の捨断

そして、第四番目の正行為へと入っていく。この正行為は、わたしたちがエゴのために行動しているこの行動を捨断するということが狙いとなる。

つまり、生き物に対して哀れみを持ち、殺生しない、痛めつけないと。生き物に対して、その生き物の喜びの対象を盗むのではなく、施すと。生き物に対して、相手の嫌がるような、邪悪な心を持った性的交わりをなさないと。これらの三つ

の、殺生を離れ、偸盗（ちゅうとう）を離れ、邪淫（じゃいん）を離れることからスタートし、そして、本当に親切な、融和的な態度で接すると。これが、第四番目の正行為ということになる。

これは、例えば会社に勤めている人などは、前者と後者が自分にどういう結果を招くかよく理解できるはずである。あるいは家庭生活においても同じである。絶えず優しい態度、親切な態度で接するならば、当然信用というものは増大し、あるいは家庭生活というものは当然柔らかく、そして平和なものになるはずである。

◉一つ一つをクリアして

第五番目の正生活。この正生活は、在家は在家のなさなければならない実践、これをなすと。

一つ気づいたかもしれないが、これは順番である、あくまでも。もう正生活の、第五番目に入るときには、当然四つの段階をクリアしてなければならない。そし

て、生活全体を真理修行に徐々に徐々に傾けていくと。例えば在家の場合、在家の実践である七つの方法とか、出家の場合、例えば七覚支の実践とかいうことが課題になってこよう。

そして正精進、正奮闘精進ということになるが、これは、今自分のできない事柄に対してよりいっそう努力しようとする、奮闘しようとする修行である。例えば、わたしはこういう悪業があって、例えばわたしはタバコをやめられないのよと。これを奮闘する、闘うと。ということは、闘うまでの段階で、少なくとも正見解、正思惟、正語、正行為、正生活という五つは、ある程度できてないと闘うことはできないわけである。

で、六番目によって完全に悪法を断じ、善法を増大させて、そして正記憶修習述と入っていくと。この正記憶修習述は何かというと、より諸現象の実態を正確につかまえるということである。それは先程述べた、例えば四念処がそうであり、あるいは天界に対する思念や、人間界に対する思念や、あるいは解脱に対する思念がそうであると。

◉正サマディから正離解脱へ

これらの天界に対する思念、あるいは解脱に対する思念、あるいはこの身体に対する思念、あるいは感覚に対する思念、心の働きに対する思念、あるいは諸現象における法則に対する思念、これを修習することにより、その世界を経験すると。これが、その次のサマディである。正定である。

で、日本の仏教はこの八正道までしか説かないが、実際はその先は当然存在する。なぜかというと、サマディは結果ではないのである。これは入り口なのである。つまり、サマディによって如実に経験するのである。これはまあ、正精通という言葉を使っているわけだけどね、パーリ語では。ここによって、すべての世界、すべての原則の真の意味を理解し、そしてその原則から離解脱すると。

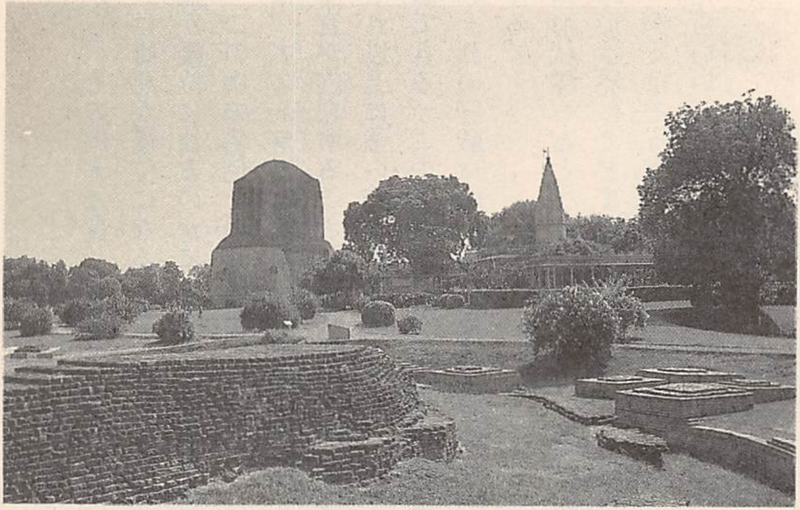
◉無明から始まる苦しみの生

この四諦（したい）八正道（はっしょうどう）をまず、必ず真理勝者はお説きになる。そして、次に縁起の法をお説きになる。

まず、わたしたちがこの生を終えた後、わたしたちは無明へと没入すると。無明とは何かというと、闇である。完全なる暗闇である。なぜここで暗闇が強調されるかというと、もし光が存在していれば、わたしたちはこのような苦しみ多き人間の世界へ転生しないのである。もっともっと楽だけの世界がたくさん存在しているし、そこへ転生した方が当然幸福なのである。しかし、わたしたちは盲目なるがゆえに、暗闇と共存してるがゆえに、この人間の世界へ転生するのである。

では、これはどのような世界へ転生するのかと。それは、次に来る経験の蓄積、これを因として転生するのである。例えば、怒り、あるいは憎しみだけを修習している人は、その憎しみ多き世界へと転生する。例えば、人にものを施さず、貪っている人は貪り多き世界へ転生すると。例えば、性欲の修習だけを行なっている人は、その性欲の世界へと転生すると。もちろん、これは先程述べたドブの川と同じように、そこでは喜びもあるが、苦しみも当然存在していると。これが行なのである。

そして、そのいろいろな経験の中で、次は識別が生じてくると。これは先程述



べたいろいろな経験から、その例えば貪りが優位になるのか、あるいは愛著が優位になるのか、あるいは嫌悪が優位になるのか、邪悪心が優位になるのか、あるいは他の付属的な煩悩が優位になるのかによって、形成される肉体は違ってくるわけである。これは、この次の名色という段階になる。

ここでわたしたちは、アストラル・ボディーを形成する。そして、それには六(りく)処(しょ)という、当然感覚器官が内在する。これは瞑想が進んでくると、この肉体と同じように、あるいはそれ以上に強い感覚器官が、わたしたちの内側に存在してるんだということが認識できる。この六処がそのアストラル世界と接するうちに感覚が生じ、そしてそれぞれの経験に応じて、粗雑な身体をつくる前段階である、世界の移行が生じてくる。

例えば、あるものは形状界へとどまり、あるものは欲界の低位にとどまるわけである。そして、この形状界にとどまるものは、そこで煩悩が少ないがゆえに、例えば何カルパとか、例えばそうだね、六カルパだとしたならば、それは約六百億年ぐらいだと考えたらいいわけだけど、六カルパとか、あるいは十カルパとか

五百カルパとか、長きにわたってそこで生存することになる。
ところが、よりいっそう粗雑なものを経験しようとするならば、そこから渇愛が生じてくる。つまり、この経験できない身体じゃ嫌だと。微細な身体じゃ嫌だと。もっと具体的に経験をしたいと。そして実際に、低位アストラルにおいてその経験が始まる。その経験が始まり出すと、そのときにわたしたちはとらわれが生じ、そして、そこで子宮へと転生するのである。これが、渇愛、取、有なのである。そして生存すると。いいですか。
生存することによって、わたしたちはそこで苦楽を経験し、老死を経験し、そして病を経験し、愁・悲・苦・憂・悩という心の苦しみを経験すると。

◉そして、遠離・離貪・解脱へ

ところが、高い世界の記憶が残っている魂はそこで修行を始める。修行を始めることによって、まずクンダリニーを覚醒すると。クンダリニーを覚醒することによって、悦が生じ、悦が生じることによってこの欲界の快楽より悦の方がいい

んだと思うようになる。そしてその悦は、心に喜びを形成すると。これは実際は、喜びというよりも明るさといった方が正しいとわたしは思います、経験からいうとね。で、明るさが生じてくると、身体が大変軽快になると。

そして、完全なる意識の拡大、楽を経験すると。そのときサマディに入り、先程述べた正精通、つまり如実知見に入り、そしてこの諸現象一切がわたしたちにとっては苦しみなんだということを理解し、遠離し、離貪し、そして解脱するのである。

これらの法則はおそらく、今、在家の皆さんは聞いても、ある人はある程度わかり、ある人は少しわかり、ある人は全くわからないかもしれない。法とはそういうものである。よって、基本的なね、教学、これを徹底的に固めてください。それによって皆さんは、今日の説法の内容がより深く理解できるはずである。いいですか。

◆列車の中でも真理の実践

「高い世界の経験と四無量心の瞑想」

（一九九一年十月八日）

◉今回の巡礼の旅に関して

皆さんの巡礼の旅も、いよいよ三日の予定を終了し、そして四日目に入ろうとしています。初日は、サキャ神賢がお悟りなった、最終解脱をなさったブッダガヤー、そして二日目は、サキャ神賢が大完全煩悩破壊なさる出発点となさったギッジャクータ山。そして今日は、サキャ神賢が初転法輪を転じられたサールナート、イシパタナ・ミガダーヤ。

この一つ一つのポイントで、それぞれの信徒の皆さんは、それぞれの感覚を感じられたはずです。もちろん、この三つの中で特にヴァイブレーションの強かっ

たのは、おそらくギッジャクータ山だったと思います。ま、それは、わたしたちが、今年に入って二回登頂し、そして特に二回目は、四日から五日間にかけてずっと修法し続けたという聖なる地でもあるからです。

もともとこのような巡礼の旅は、日本人にとってはなかなかその機会を得ることは難しい。何が難しいのかといったら、まずポイントに素早く行き、そして最も効果的な供養、および瞑想をみんなで行なうと、あるいは一人で行なうということがなかなか難しいからなのです。

例えば今回のこの巡礼ツアーに関しましても、先駆けとして、今までインドに何回も来た経験のあるわたしをはじめとするオウム真理教の高弟たちが原案を練り、そして、皆さんの出発なさる五日前に、マイトレーヤ、マハーカッチャーヤナの二人がこのインドへ先乗りし、そして最終の固めを行なって帰ってきているという事実があります。これらの条件がそろってこそ初めて、この短い期間にこれだけの聖地を一つ一つ確実に巡礼し、そして確実に供養、瞑想をすることができるわけです。

これもひとえに、オウム真理教のものの考え方が、聖なる八段階の道にのっとって動いてるからの証じゃないかと考えています。つまり、諸現象を正しくまず知り、そして、それに基づいて正しい対応を採ると。

もちろん、今回の旅において、いろいろと食事の面や、あるいはこの列車の設備の面等でご不満のおありの方もいらっしゃるかもしれない。それは、本当に申し訳ないと考えています。まあこれが、オウム真理教がインド政府とかけ合ってできたベストであったと、まあ言い訳がましくなりますが、そう言うしかないと。

そして、今日はいよいよ、サキャ神賢入滅の地へと行くことになります。特に今日の見どころは、夜中にサキャ神賢入滅の地をもう一度探し、そして皆さんと一緒にそこを供養し、歌と踊りによって、真理勝者であられるサキャ神賢に供養するという企画です。

◉大きな利益を得るために

もともと真理勝者が登場するとき、存命中は、布施、例えばこれは金品の授受

が認められていない場合、医薬品、座具、そして食事というまあ三つ、それに衣、この四つ、この四つを供養することを原則とし、真理勝者入滅後は、踊り、歌、お香、そして花によって供養することをよしと経典にうたわれています。

なぜオウム真理教において花の供養をなさないのかというと、やはり、生きている花、この生きている花を摘み取るということは、皆さんにとって若干でもよくないカルマを形成するのではないかという、教団側の配慮からです。

このように一つずつ一つずつ慎重に生きること、これは、わたしたちが真に幸福へ至る道へとつながることになります。なぜなるのかと。確かに大ざっぱにダイナミックな瞑想をし、その瞑想を達成し、そして好きな言葉、それは例えば悪口になったり、あるいは邪悪心を含んでいるような言葉であったり、そういうものを含みながら、ダイナミックな瞑想と布施功徳を積むだけで、輪廻転生はいい方向に向かうのではないかという考え方があります。

もちろん、これは正しいと。確かに輪廻転生はいい方向に向かうでしょう。なぜならば、わたしたちの世界の決定というものは他の魂との対比になるからです。

例えば、今オウム真理教の信徒の皆さんほど真面目に、功徳を積もうとしたり、善行をなそうとしたり、あるいは真理のデータを記憶修習しようとしたり、あるいは真理の流布をしようとしたりしてる方々は、これは、世界の仏教徒を見渡してもあまりいらっしゃらないでしょう。しかし、それはあくまでも他の魂との比較であって、皆さんが絶対的な境地へ到達するためには、より微細な意識状態になり、そして自分自身のけがれというものをしっかりと認識し、そのけがれを捨断する訓練が必要なのです。

特にステージが高くなると、これはわたしたちの火元素や風元素に大きな影響を与えます。例えばわたしの場合、少しでも大きな声を出した後、体の部分、特に喉（のど）の部分から胸にかけて熱感が奪われます。つまり、火元素を消耗するのです。あるいは弟子たちを見ていると、言葉や心において帰依を実践課題としていながら、それが達成できない場合、風の制御が起き、風の流れが悪くなり、頭痛を起こしたり、吐き気を起こしたり、あるいは感情に揺れが生じたりします。

これらはすべて、わたしたちの言葉やあるいは心の働きが、わたしたちの身体

の五大エレメントに対して、あるいはこの現象界に対して、大きな影響を与えていることの表われなのです。したがって、日々の生き方の中において、慎重に言葉を選び、慎重に心の働きを統御し、慎重に行動するということは、わたしたちにとって大きな利益があるわけです。

◉最終的にはマハー・ニルヴァーナへ

そしてこの大きな利益は、わたしたちをまずこの人間の世界から出離を得る前に、三悪趣である地獄・動物・餓鬼といった三つの世界をまず捨断し、その後人間の世界においてまず高い地位や、あるいは高い権力や、あるいは財産や事業の成功といったものをもたらすようになります。

そして、それに対して頓着せず、修行を続けていると、意識堕落天の傾向、つまりまだこの段階では戒律が遵守（じゅんしゅ）されていませんから、しっかりと守られていませんから、意識堕落天の傾向が生じ、意識堕落天の世界を経験し、そして戒律遵守をきちんと行なうようになると、次は戯れ堕落天の経験が始まります。しか

し、このときはまだ、わたしたちは現象界における喜びを求めているのです。
　現象界における喜びが捨断されると、その後神聖世界への経験が始まり、空中を飛来し、食を取らなくなり、そして心の働きにより、プラーナによって生きるようになります。この段階に入ると、完全に代謝が落ち、少ししか食事をしなくても太ったり、あるいは少ししか食べなくても、平気で一日二日三日と活動できるようになってくるのです。
　そして、心において、偉大なる聖慈愛、あるいは聖哀れみ、あるいは聖称賛、聖無頓着の達成が一段階ずつ進んでくると、形状界の神々の、高い世界を一段階ずつ経験し、見るようになり、そして、最終的にはアカニシタ天、つまり超越童子天へと至ります。まあこれは、漢訳仏典が間違いとして有頂天とかいう言葉で伝えられていますが、正確な訳語をいうならば、超越童子天ということになるのです。
　で、この超越童子天を経験し尽くすと、次は空間が無辺である世界へと到達します。この空間が無辺であるとはどういうことかというと、心そのものを我と感

じるようになり、そうすると心の広がりが世界を覆う、あるいは宇宙を覆うような意識状態へ到達します。

この空間が無辺である境地を到達すると、次は識別が無辺であるという境地へ到達します。この識別が無辺であるとは何かというと、諸現象に対して善悪だとか、あるいは美醜といった、つまり相対の世界から離脱したかのような状態に到達するのです。もちろんこのとき、心は同じように広がりを経験します。

そしてその次に、無所有境へと到達します。この無所有境というのは何かというと、完全なる闇、まあ正確な言い方をすれば、完璧なる虚空三昧の状態といってもいいかもしれません。そのとき時間は完全に静止し、空間のみが存在している経験をします。

そしてその後、非認知非非認知境へと到達します。この非認知非非認知境は、自己の存在そのものが認知できない状態へと到達するのです。

そして最終的には、経験そのものが完全に浮いてこない、全くそこには空間、平穏しか存在しない状態である、経験と、そしてイメージと、すべての心の働き

が完全に静止した状態、つまりマハー・ニルヴァーナへと到達するわけです。

◉禅とオウム真理教の違い

この説明を聞いてもおわかりのとおり、わたしたちが日々の生活において、一つずつの言葉に対して、一つずつの心の働きに対して、あるいは一つずつの行動に対して認識すること、これはわたしたちにとって大きな利益が生じます。
ですから皆さんは、この日々の生活において、まず瞑想の土台を固めるんだと。そして座るときには、その瞑想した自分の心の状態がどのような形で夢に表われたり、あるいはイメージに表われたり、あるいは想念に表われたりするのかを認識する、そのような修行へと移行なされば、確実に皆さんの瞑想ステージは上達し、そして間違いなく未来において、十の力を得たもの、十の力に到達したものへとなるでしょう。
ところで、では一体、禅とオウム真理教の教えとはどこが違うんだと。禅においては、例えば功徳、あるいは善行といったプロセスが欠けています。よって彼

らは、歓喜というものを、悦や喜というものを経験することなくニルヴァーナへともっていくわけです。ですから当然これは、徳のある高いニルヴァーナに到達することはできません。

したがって、わたしたちが今生もよく、来世もよく、その上に煩悩破壊し、すべてがよくなるためには、やはり善の修行、徳の修行、寂止の修行、そして法則にかなった修行の実践が必要となります。しっかり頑張っていただきたいものです。

◉慈愛・聖哀れみ・聖称賛の瞑想

それでは、これから四無量心の瞑想、まず「慈愛」の瞑想を行ないましょう。

この慈愛の瞑想は、皆さんの肉親、知人、友人、それぞれ一人一人が早く真理に気づき、そして今生もよく来世もよく、そして煩悩を弱め、永遠に幸せになってほしいなと思う心、これが慈愛です。しっかりやってみてください。

続いて「聖哀れみ」の瞑想に入りましょう。

今まだ真理を知らないで真理の実践ができない人に対する哀れみ、あるいは真

理を否定している人に対する哀れみ、あるいは真理を誹謗する人に対する哀れみ、これらの人が悪趣へ至る道、これから早く離脱してほしいなと思う心、これが聖哀れみです。しっかりと集中して、皆さんの親族、友人、知人を一人一人思い浮かべて、観想してください。

はい、続いて、皆さんがより高い意識状態へ到達するために、皆さんよりもステージの高い人、瞑想修行の進んでいる人、徳のおありになる人、あるいは善の実践をなさっている人等々、皆さんより優れた人に対して、一人一人思い浮かべ、その人に対して心から称賛する訓練をしましょう。「聖称賛」の瞑想です。

これは皆さんを、よりよい方向に、より素晴らしい方向へと導く瞑想の秘儀です。皆さんの親族、知人、友人、法友に対して、一人一人を思い浮かべ、そして、その素晴らしい点を心から称賛するようにしましょう。

◉聖無頓着の瞑想

はい、続いて「聖無頓着」。これはすべての現象において、例えば自分の思っ

たとおりいかないとか、あるいは自分にとって否定的な状態になるだとか、あるいは罵倒されるだとか、あるいは非難されるだとか、いろいろな現象に対して、これは自分自身が人間として持っていた悪業の顕現化にすぎないと。よって、カルマが落ちてることだからそれは素晴らしいことであると。

そう認識し、そういうことに対して心を動かさないで、淡々と今なさなければならない、自分のできるベスト、例えば善を行なうだとか、徳を積むだとか、あるいは心を静めるだとか、ベストの修行を行なうと。これこそが聖無頓着の真義です。ですから、いかなる現象に対しても心を動かすことなく、そして自分のなさなきゃならないことに向かって淡々と邁進する。そしてこれをなすならば、偉大な力が皆さんに宿るはずです。

では、皆さんの親族、友人、知人から受けたいろんな現象に対して、それを無頓着の修行における課題であると考え、一つ一つ今までのことを思い出し、しっかりと観想し、とらわれないようにしてください。

はい、ではこの聖無頓着についてもう少し詳しく説明しましょう。

例えばわたしは、日々経行を四時間、そしてプラーナーヤーマをだいたい三十分から一時間行なうということを修行の目標としています。

しかし、例えば前回のスリランカや、今回のインド、これはまさに、それの実践ができない場であると。わたしはそのときこう考える。今できる修行は何だろうかと。すると例えば、まあこれは、インドに関しては、信徒の皆さんにいかに奉仕し、そして、すべての真理勝者方と強い縁を結んでもらうかということがわたしの課題なわけですから、そこに没頭するしかないと。

あと、電車での時間はかなり長いですから、このときにできるだけ、例えば瞑想すると。例えばまあ、決意如意足を多く記憶修習したり、あるいはツァンダリーだとか、他の瞑想を行なうと。

要するに、今できること、今できることを全力で行なうと。つまり、これがわたしの、例えばカルマなんだと。そしてこれこそが、わたしの、例えば智慧（ちえ）を増大させたり、あるいは徳を増大させるただ一つの道であると、わたしはそう考えるわけです。

ところがもしこれがとらわれてしまうと、ああ、せっかくあそこまで修行が進んでいたのに、今は経行ができないだとか、あるいはプラーナーヤーマができないだとか引っかかってしまいます。

わたしたちは生きています。生きているということは、言い方を換えれば、カルマによって揺れ動いていると。特に大乗の修行の場合、多くの人たちに利益を与えるという、心における背景がありますから、これを根本とした場合、自己の修行というものは、なおざりにしなければならない状況が多々訪れます。

しかし、その場合、何をモットーとするかと。今できること、その場でなければできないこと、あるいはその場でだったら、ここでだったらできるということ、そこに没頭すると。そして、時を無駄にせず、できるだけ多くの時間を真理の実践に当てると。これこそが聖無頓着の修行なのです。

ですから皆さんには、この慈愛、聖哀れみ、聖称賛、そして聖無頓着の瞑想を、まず瞑想から始め、そして具体的に言葉や、あるいは行動へと移すようにしてください。

◉潜在意識のけがれに対して

（質問者A）　修行を進めていくと潜在意識が出てきて、それにとらわれてしまって、何度も何度も、修行があるところまでいってっては失敗しているっていう感じがあるんです。

それで、今日の尊師の説法で思ったのが、要するにとにかく尊師の歌にもあるように、自分の五蘊（ごうん）というものをとにかく高い世界の五蘊に合わせていくというのがポイントであるなというふうに思いました。それで、そういうふうにある程度まで深く入っていって自分の汚いものが出てきたときにそれにとらわれないように注意するということについてアドバイスをお願いいたします。

（尊師）　まずM君の質問を要約すると、修行が進んでくると潜在意識へ到達する。まあ、これは実際正しいわけです。で、潜在意識へ到達してきたときに、それを自分だと考えてとらわれてしまうと。これをどうしたらいいかという質問だと思いますが、これは先程も述べたとおり、M君のエネルギーが、オウム真理教のタントラヤーナとヴァジラヤーナに関する修行、これを並行して行なっているがた

めに潜在意識へ到達するスピードが速いと。で、その潜在意識にあるけがれとぶつかり、そしてそれを自分だと考えてしまう。

で、これについては、もっと土台であるヒナヤーヤ、あるいはマハーヤーナ的な土台を固めていくことによってのみ乗り越えることができると思います。例えばそれはどういうことかというと、まず戒律の遵守、あるいは戒律を毎日唱える。あるいは、先程述べた骨の瞑想、あるいは筋肉の瞑想等の四念処の基本的な瞑想を徹底的に行なうと。

これを土台として行ないながら功徳をひたすら積むうちに勝手にアストラルの低位から上位へと意識が移行されますから、そして気づいたときには今度は上位の素晴らしい意識状態の経験ができるということになるということですね。ですから、基本的な四念処観の瞑想をもっとしっかりやるようにしてください。

（質問者A） はい。どうもありがとうございました。

◉カルマの背負い方

（質問者B）カルマのことなんですけど、カルマは全部自分でしょわなければならないということを聞いたんですけど、また別にシャクティーパットなどでカルマをしょっていただくというようなことも聞いたんですけど、そこのところが曖昧なんですけど。

（尊師）カルマは原則としたら自分でしょわなければなりませんが、例えばグルとのパイプ、あるいは高い成就者とのパイプができている場合データの入れ替えは起きます。ですから、まあよく利得と供養と名声によって阿羅漢まで到達したものが落ちるという話がありますが、これは明らかにけがれたデータをまた内在させたがために光の世界から落ちるわけです。

ですから、一般の凡夫はカルマを自分でしょわなければならないと。しかし、オウム真理教の信徒であって、しかもしっかりと教学、ザンゲ、あるいはイニシエーション等を受けている人は、当然カルマの入れ替え、データの入れ替えは起きるんだと考えていいです。ただし、それはあくまでも阿羅漢に到達した人のみ

がそれを行なうことができるようになっています。つまり、受想滅を経験した者のみがそれを行なうことができます。よろしいでしょうか。

（質問者B）はい。よくわかりました。ありがとうございました。

◉高い世界の音の効果

（質問者C）四無量心の瞑想について、簡単なことなんですけども、四無量心の瞑想をするときにアストラル音楽とか先生の歌を使ってもよろしいでしょうか。効果を高めるために。

（尊師）初めのうちは使ってもいいですが、集中が進んでくると、逆にそういうものが邪魔になります。ですから、ある段階までは使っていいです。で、完全に集中した状態に入ると使わない方がいいと思います。つまりその状態とは何かというと、外側の音、いろんなものが一切気にならなくなった状態と。その状態に到達したら使わないでください。

（質問者C）じゃあ、よろしかったら、何か選曲というか、それに何か適した曲

はありますでしょうか。
（尊師）それは、もちろんわたしの歌であれば何でもいいと思いますし、あるいは、そうですね、特に音楽であれば「アストラルへの旅」なんかは最高だと思いますね。
（質問者C）はい、わかりました。どうもありがとうございました。

◉感覚が幻影であることを悟るプロセス

（質問者D）プラーナーヤーマによって感覚器官が幻影であることを悟るというふうに先程おっしゃられまして、そのことについて、その、幻影であることを悟るまでのプロセスを詳しくお聞かせいただきたいので、よろしくお願いいたします。
（尊師）呼吸の長さによって、徐々に感覚器官が感じなくなってくるんだね。エネルギーは充実しているんだけども、感覚が生じなくなってくるんです。で、それがある段階に入ると、完全に感覚は制止します。止まってしまいます。で、そ

の止まってしまったときは一種のトランス状態なんだよね、全体が止まって見えると。で、これはよく涅槃と間違える人がいるわけだけど、これはまだプラティヤハラの段階です。

で、それをもう少し進めていくと、今度は内側のアストラルへ没入するようになります。もうそのときには内側の感覚器官しか生じない、つまりこの肉体ではなくて、内側の身体がいろんな経験をします。で、それが過ぎてくると、今度は内側の感覚器官も制止して、一切の感覚が消えます。よろしいでしょうか。

(質問者D) はい。ありがとうございました。

◉感覚器官のとらわれを消すプラーナーヤーマ

(質問者E) 先程、感覚器官のとらわれを消すことに対して、プラーナーヤーマによって感覚器官が幻影であることに気づくというお話があったんですが、で、そのプラーナーヤーマなんですが、僕は尊師のおっしゃられた瞬間にアヌローマ・ヴィローマ・プラーナーヤーマとか、スクハプールヴァカ・プラーナーヤーマと

いったものを思い浮かべたんですが、これは実際、例えばヴァヤヴィヤ・クンバカというような激しいプラーナーヤーマでないと、こういった感覚器官から離れることは難しいのでしょうか。

それとも、スクハプールヴァカのような比較的簡単なものでも、長時間続けることで感覚器官からのとらわれは消せるんでしょうか。そのへんをお伺いしたいと思います。

〈尊師〉 すべてクンバカの長さによって決まりますから、例えばスクハプールヴァカでも、一分とか二分とか三分とか、平気で止められるようになったならば、そのときの感覚器官というのはもう既に人間の感覚器官ではありません。これは試してみたらいいと思う。だから、確かに一つずつのプラーナーヤーマにはそれぞれの目的があります。しかし、ただ単に制感に入ると、プラティヤハラに入るためには、どのプラーナーヤーマでもそれを修習すればだいたい達成できます。よろしいでしょうか。

〈質問者E〉 はい、わかりました。ありがとうございました。

◉善業と悪業の量と質

（質問者F）今回インドにあたり、短い期間でこちらに出発することを決めたのですが、いろいろと問題が出て、朝出発するときまでいろいろと迷いました。でもここへ来まして、皆さんがインドにあたり、いろんな個人個人の修行があったことがわかりました。

でも、わたくしは今、輸入の仕事をしています。それにおいてこの一週間、人様に方便とはいえ、違う形で仕事を休んできていることに非常に申し訳ない心がありますが、そのへんの心をどのように処理をしていいのか、今ここへ来ていても判断しかねます。教えてください。

（尊師）今の質問は、オウム真理教と一緒にインドに来るんではなくて他のことで来るんだということを言ってらっしゃるわけですね。

（質問者F）ええ、おばの方に不幸があったということで、師たちにも協力していただきまして来ました。インドに来ているということは言っておりません。

（尊師）うん、それについては、まあ確かにそれは嘘という意味においてのカル

マを積まれたと思いますが、つまりそれは、まあそうですね、瞬間的な言葉におけるカルマになったと思いますが、しかしあなたがインドに来てより多くの功徳、より多くの深い瞑想、あるいはより多くの善行、これを実践なさる、あるいはなさったということは、それはそれでまた利益になるわけですから、つまり、善業の量と悪業の総量を比較したら、悪業の量というのは本当にもう微々たるものです。

それに比べて、善業というのは千倍も一万倍も価値があることであると。あるいは、十万倍も価値があることかもしれない。そう考えた場合、まだ心が完成なさっていらっしゃらないわけですから、その弱い部分は弱い部分として認識しながらね、未来においてそれを捨断しようという気持ちを持ちながら、大いに善業と徳の修行をなさったらいかがでしょうか。

（質問者F）はい、かしこまりました。どうもありがとうございました。

（尊師）はい。ですから積極的に、今回のインドの修行の旅において利益を得られるように頑張ってください。

（質問者F）ありがとうございます。

◆完全煩悩破壊の地、クシナーラーにて——その一（一九九一年十月九日）

「転生と輪廻転生の違い」

◉完全煩悩破壊の要素のよさ

この地はクシナーラーといい、サキャ神賢が完全煩悩破壊なさった地です。この完全煩悩破壊というのは何かというと、まずこの現実の世界、この現実の世界が苦だということを完全に認知した聖者が、まあこの完全に認識し、そして自分の内側にそれを確立した状態を智慧の離解脱というわけですが、この現世が苦であるということを一つ一つその後現実生活の中で確認し、そして肉体を捨てる際に一つ一つの要素を破壊していくと、分解していくと。これが、心の解脱、心解脱といいます。

で、この智慧の解脱の後に心の解脱、あるいは、実際に完全煩悩破壊が行なわれるわけです。

で、この完全煩悩破壊の要素のよさとは何かというと、つまり、いったんそこで完全にゼロとして、自分たちの本性へ帰ると。つまり、真我独存の状態になると。そしてまた降りたければ、新しいものをしっかりと認識しつつ具足し、そして輪廻転生する、転生すると。

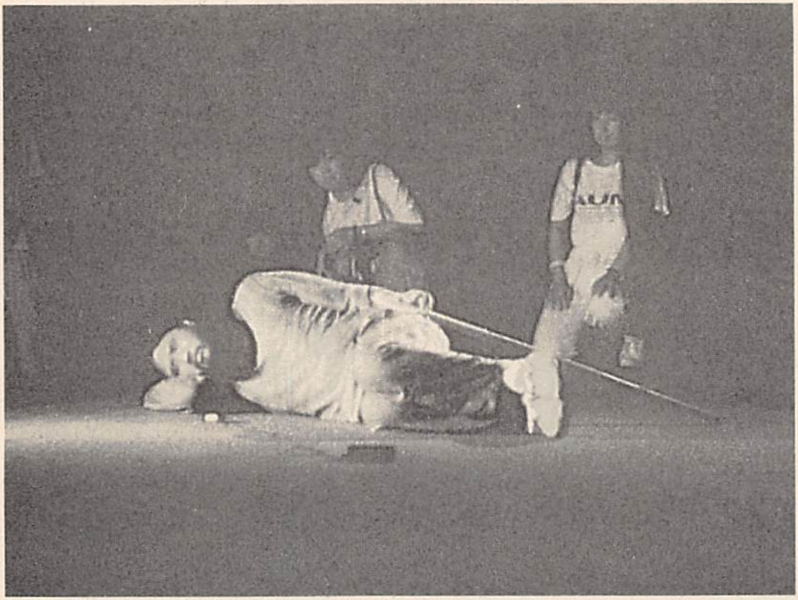
まあここであの、今ちょっとわたし言葉の使い方間違いましたが、「転生」と「輪廻転生」には大きな違いがあります。まず輪廻転生というものは、わたしたちの前生のカルマが次の生へバトンタッチされて、そして次の生が形成されると。つまりそこには、自分自身の意志、あるいは自分自身の決定というものは一切反映しません。

しかし、大完全煩悩破壊した後は、完全に綺麗な状態ですから、自分の意志、あるいは自分の決定によって輪廻転生ができるわけです。つまり、自在となるわけです。ここが解脱をした者としていない者との違いということになります。

よくニルヴァーナ、涅槃はゼロになることである、そしてもうそこから再生しないんだというふうに説かれますが、確かに再生しないことも自由です。しかし、再生することも自由なのです。ですから、今までは自分自身のカルマという悪魔に対して支配されていた魂が、そのカルマから全く制約を受けなくなった状態、これを解脱だと考えてください。ということは、わたしたちが解脱に向かって修行することはマイナスではなく、大きな利益となるわけです。わかりますね。

◉クシナーラーのヴァイブレーション

で、ポイントはこのちょっと左側、ここがサキャ神賢の入滅なさった場所だとわたしたちは考えています。もちろん、後期仏教徒によって、ここだ、あそこだ、そこだといろいろな意見がありました。しかし、それはだれも確証を持っていません。わたしたちは、霊的なインスピレーションによって、つまりクレアボイアンス、神秘的な力によって、この左側がサキャ神賢の入滅の地であると確信を持っています。



まさにここが完全煩悩破壊の場所! その場に頭を北にして横たわられる尊師。

ですから、ここで皆さんに、まず線香の供養とそして舞踏の供養を、今日食事前にしていただきたいと考えました。ですから心を込めて、お香の供養、そして舞踏の供養をしてください。

最後に、このクシナーラーのヴァイブレーションは、大変のんびりした、本当にゆったりしたヴァイブレーションです。これは二千五百年を隔てても、サキャ神賢のつくられた道筋が、まだこの地に残っているのだというふうに確信を持たれていいでしょう。

ですから、この空間にゆったりひたられて、そして自分自身の目的を、最終的には今生終わった後、またゼロにもっていけるように努力なさり、そしてまた来世は皆さんの意志によって、あるいは皆さんの決定によって自在に転生できるということを目的として修行を進めていただきたいものだと。しっかり頑張りましょう。

◆完全煩悩破壊の地、クシナーラーにて——その二（一九九一年十月九日）

「サキャ神賢埋葬にまつわるエピソード」

この地は、サキャ神賢が大完全煩悩破壊なさり、その後、アヌルッダ、アーナンダ等の手によって埋葬されたところです。この埋葬については、「大完全煩悩破壊経」にいくつかのエピソードが載っています。

その重要な部分は、まずサキャ神賢が大完全煩悩破壊なさるとき、既にデーヴァのステージに到達していたアーナンダが、「尊者アヌルッダよ、覚者は完全煩悩破壊なさいました」と言ったことに対して、大聖者アヌルッダがそれを否定なさると。いや今そうではない、こうだと。

そして、アヌルッダ聖者がいかに偉大であったかということを「大完全煩悩破

壊経」では、神々の意思をただ一人、五百人の向煩悩滅尽多学男がいた中でただ一人、正確に認知したビックであったと。つまり、向煩悩滅尽多学男であったというふうにうたわれています。

これはどういうことかといいますと、例えば、サキャ神賢を何重にも巻いて、そして油に漬け、ビャクダンの檀香を薪代わりにし、そして火をつけようとしたわけですが、火がつかないと。これはなぜだといったら、いやそれはマハーカッサパがもうすぐここへ到着するわけだけど、それを神々は待っていらっしゃって、それまで火はつかないんだと。

まあ、実際マハーカッサパがここに到着なさって、そしてサキャ神賢の足元に礼拝したその瞬間に火がついて、そして外側の包んであったきれと、一番内側のきれと、そしてサキャ神賢の肉体だけが焼かれ、きれいに骨が残ったといわれています。これはすべて真実でしょう。

というのは、例えば、これはチベットの成就者なんかによく伝わる話ですが、心臓だけがね、燃えないで残っていたとか、あるいは体が全く燃えなかったとか、

ま、そういう話がよくあります。これは、すべては心の現われである、そして、心が肉体を超えるんだということの一つの証明ではないかと考えています。

まあそれはともかくとして、あれだけ多くの弟子たちがいたサキャ神賢の弟子たちの中で、わずかに四名だけがサキャ神賢の状態を理解できたと。これは、マハーモッガラーナ、そしてサーリプッタ、マハーカッサパ、アヌルッダの四名です。

もちろん、他の人たちはデーヴァの意識状態であったり、あるいは阿修羅の意識状態であったり、あるいは神聖天の意識状態であったわけです。しかし、それよりも崇高な十七形状界をぶち抜き、そして四非形状界をぶち抜いて、マハー・ボーディ・ニルヴァーナ、大到達真智完全煩悩破壊界へ到達するということは、いかに至難な技であるかと。

例えば、アヌルッダに関していうならば、アヌルッダは前生において、第六天界であったというふうにうたわれています。例えば、マハーモッガラーナについていうならば、マハーモッガラーナはその前の生は地獄、その前の生は破滅天、

つまりこの欲界の王であったとうたわれています。それだけの人たちが、やっとその状態を理解できると。

ということは、あなた方が今目指している道がいかに崇高であり、そしてあなた方の目指すものの最終地点が、例えば日本でいわれているいろいろな神々を超え、あなた方自身がその神々を超え、そして神になっていき、そして最終的には十力者に到達するんだと。その道の一歩一歩を確実に一生一生を使って歩いてるんだということを認識するならば、自分自身の徳の高さ、そしてそれだけではなくて、自分がやらなければならないことの、その偉業というものが身にしみて心に伝わってくるはずです。

ここでの供養は、お香、そして舞踏、歌、そして右遶(うにょう)の礼、これを行ないたいと思います。これを行なうことによって、よりいっそう、真理勝者であられるサキャ神賢をはじめとする十力者たちとの縁を深めていただき、そして、その根本であられるシヴァ大神との縁を深めていただきたいと考えています。

◆祇園精舎で知られるサヘートにて――その一

（一九九一年十月十日）

「絶対的幸福を得るための法」

◉生の遺跡は地面の下

ここは、コーサラ国、サーヴァッティーのジェータ林です。皆さんは、この地についてはよく「祇園精舎の鐘の音」、あるいは「鐘の声」といったような句で知っていらっしゃるはず。その祇園精舎がこの地です。この地は、スダッタ尊者、つまりアナータピンディカ後援者が、サキャ神賢にお布施なさった地といわれています。ま、いわれてるというより、事実そうなんだけどね、これは。

この地は、古い信徒であるならば、いろいろな形で記憶しているはずです。例えば、コーサラ国の王はパセーナディ王であると。あるいは、その王妃はマッリ

カーであると。あるいは、少し仏典を研究していくと、そのパセーナディ王の王子であるルリ王がサキャ族を攻め滅ぼしてしまったとかね、例えば。あるいは、デーヴァダッタが謀反を起こしたとか、あるいは、サキャ神賢の子供を宿したという外道の女性が地獄へ落ちた地だとか。

ただ、一つだけここで断っておきたいことがある。それは、この遺跡群は、当時のもの、つまり今から二千五百年以前のものではないということだ。これは実際、今の歴史家の研究では、紀元後一世紀から二世紀に建てられたものだろうと。

では、サキャ神賢の時期の、つまり生の遺跡はどこにあるんだと。それはまだこの地下に潜っているんだと。ただ、その地下を掘るためには、この発見された遺跡群をまたいじらなければならない。ということは、結局、仏教徒にとっての夢が壊されてしまうから、インド政府もいじることができないんだという話が、前回マイトレーヤ、ヤソーダラーの調査ではっきりしました。

とはいえ、この地、この場所がサーヴァッティーのジェータ林であることは間違いない。そして、この地下にサキャ神賢のお住まいになっていらっしゃった石

造りの、そしてレンガ造りの住居や、あるいは弟子たちの住居が存在していたことも間違いありません。

◉十力者の法

サキャ神賢の一体法とは、あるいは十力者の法とは一体どのような法であろうかと考えた場合、それは絶対的幸福を得させるための法であると一言でいうことができるでしょう。では、絶対的幸福とは何かと。これは、今生、来世、来世以降も幸福になれると。ただし、それを得るためには条件があると。それは、しっかり教えを聴き、その教えを実践することであると。

では、どこが違うのかと。例えばね、チベットの経典で、例えば天界へ行った魂は次は地獄であるという話があります。これは、一面正しいといわざるを得ない。それはどういうことかというと、例えば意識堕落天、阿修羅の世界へ転生した場合、まず阿修羅の人たちというのは破戒が好きなんだね。破戒が好きとはどういうことかというと、喜びを求める心が強いと。

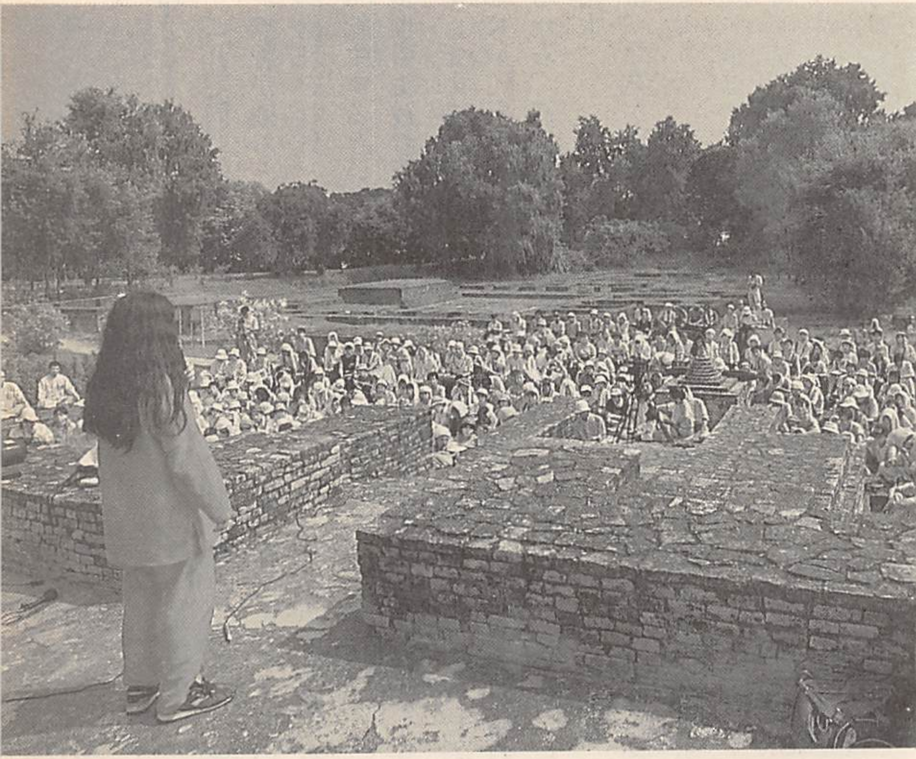
喜びを求める心が強いということは、例えばここに食事がおいしいものとおいしくないものがあったとして、君たちどうかな、どちらを先に食べるタイプだと思うかな。どうですか。

（弟子） おいしい方。

おいしい方を食べるよね。

だから、その心の働きによって、次の生は、つまり徳が優位になって現象化して天界へ至ると。その天界は、当然破戒その他を中心とした世界であるから意識堕落天であると。ではそこで、徳を消耗してしまったら、次はどうなるかな。何が残りますか。おいしくない方が残るよね。ということは、苦しみだけが残って、次の世は地獄であると。ま、これはチベット仏教でいう天界の意味合いが、まあこのような形で証明されるわけです。

では次に、戯れ堕落天はどうかというと、これも喜びを求めるわけだけど、これはまあ教えを聴き、淡々と徳を積み続けると。よって、徳の消耗が少ないから、戯れ堕落の世界、つまり戯忘天の世界へ長く存在することができると。ここまで



はOKだね。

しかし、これも同じように徳が消耗されて、何が残ると思うか。無智が残る。そうだね。無智が残るということは、動物の世界へ転生すると。ということだね。このような論理を背景として、チベット仏教では、天界から地獄、あるいは天界から動物へ転生するというふうにいってるわけです。

では、真理の実践者たちはどうすると思うか。そこに喜びと苦しみ両方があったとしても、それを見ないと。見ないで淡々と自分のなさなければならないことだけをなしていくと。ということは、当然功徳優位、つまり徳を積むこと優位の生活になるから、徳は増大しますか、減少しますか。

（弟子）増大。

で、次に、悪業が現象したときにそれに頓着しないから、新しい悪業を積みますか積みませんか。ということは、その人の蘊、つまり集積、塊、カルマの塊はどちらの方に固まってくるかな。

（弟子）いい方。

だね。
ということは、この魂は、例えば次は天界へ生まれ、天界で没したらどうなると思うか。より高い天界へ至るよね。どうだ。で、そのより高い天界で没したらどうなるか。さらに高い天界へ至るよね。という形で永遠に高い天界へ至り、そして最終的には煩悩破壊して自在になるんだよ。

◉〝二世の願を成ずる〟

だから、君たちが目指しているものがいかに、ある意味でいったら、ね、ハードな修行であるか。わかるよね、言っていることは。つまり、自分で蓄えておいて、利息にすら全く気を使わないで生き続けるわけだ。そして、その利息が元金を超え、ね、その利息だけで生活できるようになったとしても、それに全くまた頓着しないで生き続けると。そうすると、当然それは大金持ちになるよね。どうかな。これが、真理の奥儀であり、仏教の奥儀なんです。
ですから、他の宗教と仏教の違いは、少なくとも二世の願を成ずることが原則

であると。少なくとも二世の願を成ずるとは何かというと、今生もよく、来世もよくぐらいは最低やってほしいと、ね。

では、それは仏典ではどのような形で現われているだろうか。わたしの愛する比丘尼（びくに）がいらっしゃるわけだけど、それはまあケーマー比丘尼だけど、このケーマー比丘尼はこのサーヴァッティーの地で入滅なさいました。

で、このサーヴァッティーで入滅なさったケーマー比丘尼、このケーマー比丘尼が今から九十一カルパ前、カーシー王キキーの娘として生まれたとき、彼女をはじめとする、まあそのうちサキャ神賢の弟子となる比丘尼たちは、結局出家はしなかったけども、そこで精進の実践をしたわけだね。これは六つの極限でいくと四番目。で、ここでは奮闘努力し、悪法を断じ、善法を増大させる修行をひたすら行なったと。いいですか。

そうすると、例えばそのケーマー比丘尼にはどういう習性がつくかというと、悪業については断じ、善業については増大させるという習性がつくよね。どうかな。よって経典には、彼女が第二天界、第三天界、第四天界、第五天界、第六天

界へと転生し、その次の生でサキャ神賢の、ね、弟子として生まれ変わり、大慧第一として転生し、煩悩破壊してニルヴァーナに入ったといわれてるわけだね。わかりますか。そして、君たちの実践課題もそこにあると。

ではだ、そのようなグルが話をしているけども、どれほどの確証が持てるんだと。実は、わたしは以前から、仏典を読む以前からね、ケーマーはサキャ神賢の前生において妻であったという確信を持っていました。で、まあそれは、いくつかの経典で、既にもうジャータカに現われている。

これは何を意味してるかというと、つまり、わたしの直感的に得ている仏教的見解が正しいことを裏づけしているわけだね。これはもう少し経ったら、君たちにその経典をお見せすることになると思う。

で、このような形で、自分自身の見ているものが確かかどうかということは、先程述べたとおり、例えば先に、経典を読む前にその経典の内容を理解し、そしてその経典に当てはめていく。この作業が正確に行なわれるかどうかで確認をするという手が一つある。

もう一つは、いろんな現象に対して直感的な予言をしてみ、その予言の中の何パーセントが確定するかという、そういう実験もあるわけだけど、少なくとも九割ぐらいは間違いなく、皆さんに対して絶対的な法を説いてるんではないかと思います。

◉マイトレーヤの弟子として

そして、この地は大変祝福された地である。この地に、日本で四百名の人たちを連れて来た教団はない。もちろんそれは、四百名の人たちを連れてきて当然といえるわけだけどね。

なぜかというと、君たちはマイトレーヤの弟子であり、そして君たちが未来際において、例えばサーリプッタやマハーモッガラーナやマハーカッサパや、あるいはアヌルッダや、ね、あるいはマハーカッチャーヤナやウパーリやラーフラ等々といった弟子たちとして転生しなければならない。あるいは、ケーマーやウッパラヴァンナーや、ね、キサーゴータミーといった弟子たちとして転生しなければ

ならないと。

とするならば当然、自分たちの先達、君たちの先達というのはサキャ神賢および原始仏教の成就者以外いないわけだから、その先達に対してこのようにしてあいさつに来ると、礼拝に来るということは当然であって、また大量の人たちが来るということもまた当然であると。

よって、この部分をね、特に重要視して考えなければならない。つまり、自分たちこそは、絶対に真理を一つでも二つでも三つでも多く獲得し、その法を自分の内側に根づかせ、そして多くの魂のためにその法を広めるんだということ。わかるね。そして、それだけの偉大な功徳を自分たちは持ち合わせているんだと。わかるね。

今回のインドは、皆さんもご存じのとおり、まずサキャ神賢の悟りの地であるブッダガヤーから始まり、そして雨に降られることなく今日まで終了しました。

はい、では「ヒナヤーナの帰依マントラ」「大乗の発願」「苦の詞章」そして「タントラ・ヴァジラヤーナの帰依マントラ」を唱えて終わりにしましょう。

◆祇園精舎で知られるサヘートにて――その二（一九九一年十月十日）

「五大エレメントの瞑想法」

この地は、サキャ神賢が沐浴なさった場所です。で、この前はサキャ神賢が水元素のイニシエーションをなさったところです。で、ここで一つね、皆さんに簡単な瞑想法のお話をしたいと思います。

これは、ヨーガ的にも、あるいは仏教的にも、初歩的な瞑想の中に五大エレメントの瞑想法というのがあります。

これはどういうことかというと、地元素については大地をじっと見つめると。で、その大地の堅さとか、あるいは土一粒一粒とか、それを瞑想課題として瞑想すると。そしてそれは、結局自分の個体成分、肉体の個体成分を形成しているん

だという方向へもっていくと。
　第二番目の水元素の瞑想については、まあこのようなミラクル・ポンド等をじっと見つめながら、水の柔らかさとか、あるいは波立ちとか、あるいは冷たさとか、そういうものについて瞑想すると。で、それを、結局自分の血液成分にもっていくと。
　で、次に火元素については、ろうそく、ろうそくを立ててそのろうそくをじっと見つめると。そしてその炎、つまり火元素が自分自身の体温を形成しているんだという方向へもっていくと。
　で、この風元素は、次は空中を見つめると。そして、これは訓練が進んでくると、一つ一つのプラーナが見えるわけですが、そのプラーナをじっと見るように訓練すると。そして、そのプラーナの力によって自分の肉体が形成されているんだと、動いているんだということを認識すると。
　そして最終的には空間、これはまあだいたいアージュニァー・チァクラに集中して空間をじっと見つめるわけですが、その空間をじっと見つめると。そして、

自分自身の本性が空であることを認識すると。

まあ、これがインドの伝統的五大エレメントの瞑想法です。

では一体、これは何の利益がわたしたちにあるのかというと、これは要するに、わたしたちを粗雑な次元から微細な次元へ移行していくということが一つと、もう一つは、例えば火元素が弱っている場合、ろうそくを観想するだけで火元素が元に戻り、病が治るとかね。あるいは、水元素が例えば欠乏している場合、その水元素を観想するだけで水元素の欠乏を補うと。例えば、このように暑いときに水を観想することによって、その暑さをしのぐとか。あるいは、逆に風が欲しいとき、風を、風を瞑想することによって風が起こるとかね。まあ、そういう瞑想があります。

で、この場は、もちろんサキャ神賢が自分自身の身体を清められたところであると同時に、弟子たちに水元素のイニシエーションをなさったところです。

ですから、皆さんもまあ現実生活において、例えば風呂場での水とか、あるいは電球の灯とか、あるいは、まあ大地、あるいはコンクリートの地とか、いろん

な瞑想課題があるはずですから、その一つ一つを瞑想課題にして瞑想なさると五大エレメントは強化されます。いいですね。

はい、では終わりにしましょう。



◆デリーでの大説法祭――その一

「オウム真理教だからこそ……」

（一九九一年十月十一日）

◉天へ至る種子

この短い期間に、まずサキャ神賢がお悟りになられたブッダガヤー、そして初転法輪の地であるヴァーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤ、これはサールナートですね、今の。そして、初めに出家教団の修行場として設けられたアナータピンディカの園、サヘート・マヘート、そして、サキャ神賢が晩年お過ごしになられた竹林精舎およびギッジャクータ山、そして最後に、大完全煩悩破壊なさったクシナーラーと。これらの地、つまり聖地といわれているすべてのポイントを回ることができました。

もちろん、ルンビニーはどうだという話がありますが、これは皆さんにも説明したとおり、あのルンビニーのヴァイブレーションから考えると、サキャ神賢があそこでお生まれになり、沐浴なさったとはどうしても考えられませんので、まあ教団として外して正解だったんじゃないかと考えています。

ところで、これらの聖地巡礼という旅は、在家の修行者にとってどのような利益があるのかと。これは、大完全煩悩破壊経の中にしっかりと、在家のものがもし、例えば覚者のストゥーパを礼拝したり——ストゥーパというのは、これは仏舎利のことです——あるいは、覚者のお悟りの土地、初転法輪の地、涅槃の地、あるいは出生の地を礼拝することは、天に至る道であると説かれています。

そして、その供養についても、舞踏、お香、そして花によって供養すると。まあ、花は直接の殺生になりますから、今回は、果物、舞踏、音楽、そしてお香によって皆さんと共に供養したわけです。ですから、これは皆さんが、そのフィーリング、エナジー、これを感じようと感じまいと、皆さんのデータの中に、必ずや素晴らしい種子として、天へ至る種子として根づくことは間違いないでしょう。

◉オウム真理教の素晴らしいカルマ

日本には多くの仏教団体があります。しかし、今までこのインドの地に、総勢四百名が一同に、サキャ神賢の足跡をたどって聖地を巡礼したという例はありません。これもひとえに、オウム真理教がこれからしょわなければならない十字架、つまり絶対的な真理、だれも否定することのできない真理、これを広めていかなければならない素晴らしいカルマをしょったのだとわたしは考えています。

この旅をスタートする前に、わたしをはじめとする、例えばマイトレーヤ、あるいはヴァジラロカ、あるいはマハーカッチャーヤナ、あるいはマンジュシュリー等、多くの弟子たちが、この計画のために一生懸命尽くしました。

例えば、初めはいくつかの旅行代理店を回り、そしてバスの旅でなければ無理だという話でした。しかし、わたしが直感によってTCIのみがそれを可能とするだろうと考え、そして交渉にあたっていました。ところが案の定、やはりそれは達成されました。

もし今回、列車の旅ができなければ、これだけ短期間の間に、これだけの場所

を回ることは不可能だったでしょう。なぜならば、皆さんもご存じのとおり、インドの交通事情、特に道路事情は良くありません。列車ですら、例えば十二時間十三時間に対して、四時間五時間の遅れが平気で起きる国です。ですから今回、まあいろいろと問題はありましたが、わたしはＴＣＩに対しても感謝したいと考えています。

それから、行き帰りのエアーインディアについても、初めはチャーターということは不可能であるといわれていました。しかし一応、これはメッタジ、マイトレーヤ等の交渉によって達成することができました。これにより、皆さんの行き、そして列車の車中、そして帰り、このすべてにおいて、できるだけ多くの真理のデータをインプットしていただき、そして正見解を身につけていただき、正なる八段階の実践をしていただく準備ができつつあるなと確信を持っています。

わたしは、皆さんのために存在しています。それはどういうことかというと、わたしの今生の喜びは、皆さんができるだけ功徳をお積みになり、善行をなさり、そして心に平安を得られ、できるだけ高い天界へ、あるいは煩悩破壊なさり、で

きるだけ高いニルヴァーナへと到達していただくと。それだけが今、わたしの楽しみです。

そして、わたしは今回、オウム真理教の信徒はさすがだなと感じました。それは、この聖地も、一般の日本人の感覚から見たら頭陀の修行に近いような状況でありながら、それを平然と耐え、そして、一日一日とエネルギーをアップする姿を見、あるいはいろいろなコンディションによって、カルマが解放されたら、それをカルマの解放として見ることのできたオウム真理教の信徒の方というのは、やはり他の教団と違い、徳によって、あるいは善によって、あるいはカルマにおいて優れてる方々の集団なんだなということを認識しました。

そして、これだけの悪条件で、これだけのことができた皆さんです。ですから、これから日本に帰り、そしてよりいっそう日々の生活において集中し、そして修行においても集中し、この二世の、つまり、現実的な生活と瞑想による生活の両方をしっかりと大地に足を付け、歩いていただきたいと思います。

◆デリーでの大説法祭——その二　（一九九一年十月十一日）

「煩悩破壊による好転」

◉相対的真理から絶対的真理へ

オウム真理教の教えというものは、相対的真理と、そして絶対的真理の二つに分けることができます。そして、在家修行においては、その相対的真理の中に絶対的真理を見いだすという修行のプロセスをたどることになります。これはどういうことかというと、絶対的真理とは、まずわたしたちが自己の本性、本質的な部分、つまりこれは、空ともあるいは真我ともいえる、まあパーリ語を使うならばアートマンの状態へ返ると。これが絶対的真理であり、これ以外の絶対的真理は存在せず、これ以上の絶対的真理も存在しません。しかし、在家においては、

その途上での教えを学び、そして功徳を積み、そして他の真理を実践すると。これが結果的には、わたしたちを現象界における幸福へと導くわけです。

例えば、例を挙げるならば、まあここにいるK君、あるいはサマナのU、その他の人たちを見て感じることですが、まず、例えば修行を進めていくと異性に対して大変もてるようになります。それは今回、例えば、わたしがシークレット・ヨーガを受けた中にもいくつかありました。で、これは人間の欲望の中の愛欲、特にかわいい人や素敵な人、美しい人と一緒にいたいとか、あるいは結婚したいとか、お付き合いしたいとかいう願望の現象化です。ところが、例えば現実生活においては、これすらできずに苦しんでいる方々がいらっしゃいます。

これはどういうことかというと、ムーラダーラ・チァクラからエネルギーが蓄えられ、スヴァディスターナまで蓄えられたエネルギーが、スヴァディスターナから漏れると、このような現象、もてるという現象が起きてきます。

次に例えば、学問によって成功したいという人は、それよりエネルギーを蓄え、功徳を積み、善行をなすことにより、次はマニプーラ・チァクラから漏れるよう

になります。この人は、学問において大変な才能を発揮し、学者として、一代、有名な名を残す人となるでしょう。

そして次に、それよりもっとエネルギーが蓄えられてくると、アナハタ・チァクラにまでエネルギーが蓄えられ、そして、この人は権力や地位こそないが、あるいはお金こそないが、名誉を得るようになります。これが第四番目のアナハタ・チァクラです。

そして、それよりもエネルギーが蓄えられると、次はヴィシュッダ・チァクラで漏れるようになり、このとき地位、権力といったものが備わります。

そして、最終的にアージュニァー・チァクラまでエネルギーが蓄えられると、ある程度の神通力と、そしてこの現象を、現象界において思いのままに生きていける力が蓄えられてくるのです。

そして、これらを超越し、別の道、絶対の真理の道をたどった場合、それはサハスラーラから解脱としてエネルギーが漏れ、そして、わたしたちは神聖世界をぶち抜き、完全煩悩破壊をするのです。

ですから、言い方を換えるならば、修行を行なっていて結果の出ない修行は過ちであるということがいえるでしょう。

◉日本人に対する八正道の順番

では、どのようにしたら結果が出るのかと。それは先程も述べたとおり、まず正見解から始めればよろしい。日本人は貪りの多い国です。例えば、Kという宗教団体がありますが、ここの背景に使われている色は黄色と黒です。これは餓鬼と地獄を表わします。つまり、この会員は餓鬼と地獄の世界へ転生することを表わします。しかし、それは今の日本人にとって最も好ましい色であり、そして転生しやすい場所ともいうことができます。

で、このような貪りの強い日本人に対して、まず何を実践させたらいいのかと。それは、まず教学であると。というのは、日本人は知識を吸収することは大変好きです。ですから、教えをまず記憶させると。そして、お金のかからない正語の実践から伝授すると。つまり、妄語・綺語・悪口・両舌をやめなさいよと。これ

ぐらいだれだってできると。だから、まずそのアプローチから始めることにより、皆さんの肉親、あるいは友人、知人は、少しずつ徳を積むこととなるでしょう。次の段階で、心において、愛著・迷妄・邪悪心といったものに対するアプローチをさせると。それにより煩悩が弱められ、そして行為における殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れるといった方向へと導きます。

これらの戒を具足させた後、次の段階で布施の実践へと入っていくわけです。その布施の実践もまず初めは安心施、つまり多くの人が苦しんでるとき、その人の苦しみをとってあげるという安心施から法を説く。そしてその後、財施、真理施の順番で法の実践に入っていくならば、スムーズに真理の実践ができるようになるでしょう。

ではなぜ、この順番でいけばスムーズに実践ができるようになるのか。それは、例えば言葉の統御をする段階において、わたしたちはアストラルが浄化され、そしてその恩恵を受けます。そして、心の浄化をすることにより、コーザルの浄化が起き、その恩恵を受けます。そして、行為の浄化を行なうことにより、身・口・

意、三つの恩恵を受けることになる。それにより、より心は柔軟となり、真理のデータが入りやすい状態となるのです。

ところが初めから、例えばオウム真理教の最も難しい法である解脱や、あるいは悟りや、あるいは出離といったような法を展開をしてしまうと、その人は何が何だかわからなくなります。というのは、その人には真理の法がまだ根づいていないわけですから、ちょうどそれは、ここに卵があったとして、その卵を孵化する際、熱い温度であればいいわということで、百度や二百度の熱を加えるのと同じです。あくまでも適当な温度によって孵化することこそが卵のかえる条件であり、それと同じように迷妄に悩んでいる魂を済度する場合は、法における順番というのがあります。

ですから、今の日本においては、間違いなく、言葉の統御、心の統御、行為の統御、そして布施の実践という順番で法を説きます。もちろん、その前に教学をさせることはいうまでもありません。これらの法の順番で丈夫調御された魂が、少しずつ少しずつ魂が浄化され、そして煩悩を弱められ、現象として素晴らしい

現象が生じてきます。

◉現象を正確に知る恩恵

もともとオウム真理教と他の宗教団体の違いは何かというと、それは煩悩を破壊することによってすべての現象を好転させようとしているのか、あるいは煩悩を強めることによってすべての現象を好転させようとしてるかの違いです。ここで一つ考えていただきたいことがある。ある現象があった場合、その現象に対して証智、つまり正確に知る、この正確に知ることができるかどうかということは、未来においてどのような恩恵があるだろうかと。

例えばここに一枚の地図があるとし、その地図を見ないで目的地に走ろうとする人と、しっかりとその地図を確認して目的地に着こうとする人とでは、当然、地図を見る時間、これは確かにマイナスかもしれません。それよりも目的地に至るまでのロスタイムというのは大幅に省かれ、そして目的地により早く達成することができるはずです。これが、煩悩破壊における、あるいは煩悩を弱めること

における現象を正しく見つめる力なんです。
例えば、事業について話をするならば、自分自身の会社運営におけるいろいろな動きに対してまず正確に知り、そしてその一つ一つに対して正確に処置していくと。これをなすならば、その事業家はどの国へ転生しようとも偉大なる事業家となるでしょう。
例えば、恋愛において、まず結婚する前に対象に対してしっかりと認識し、この人の長所はこうである、欠点はこうであるということを認識し、そしてお付き合いを進めていくならば、その欠点においての苦しみというのは生ぜず、長所における喜びだけが生じるようになるはずです。例えば学問において、ある学問を達成したいとする場合、その学問の周辺の学問をいくらやっても結果は出ません。目的とする学問にひたすら集中することによってのみ、結果が出るはずです。
このように真理、仏教というものは明らかに科学なのです。そして、その仏教の根本はどこにあるのかというと、それは原始ヨーガにその原本を見ることができます。現に、サキャ神賢の前生談の中でも、多くの生においてヒマラヤへ行か

れ、そしてそこで神聖行をなし、そして煩悩破壊なさり、そして神聖天へ転生なさったという話が出てきます。

これは、サキャ神賢の系譜が、原始ヨーガから真理をお説きになっていらっしゃったんだということの証明であると思います。そして今、オウム真理教も同じように、原始ヨーガ、仏教のラインを採っています。これは、真理勝者に到達する魂は、必ず原始ヨーガ、仏教の道をたどるんだということの一つの証明でもあるでしょう。そして、ここにいる四百名の皆さんも、同じように原始ヨーガから真理、仏教の道を歩いています。

ですから、このカルパの終わり、確かにわたしはこの地球において真理を説き明かすでしょう。しかし、その後は皆さんが、同じように真理勝者として、供養値魂、最上正覚者として、あるいは無上の士として、最上善逝としてこの地球へ転生し、あるいは他の惑星へ転生し、真理を説き明かし、そしてすべての魂を済度する、そういうカルマを必ずしょうはずです。そしてそのための、今回は偉大な皆さんの功徳になったことは間違いありません。

このインドツアーも既に終わりました。これからは日本での救済活動。そして、日本でまた精一杯救済活動を行ない、より高い意識次元へと到達し、すべての魂を絶対的な至福の状態へ皆さんと一緒に導いていきましょう。

◉エネルギーのロスについて

（質問者A） 今回のこのような本当に素晴らしい旅のチャンスを与えてくださり、尊師本当にありがとうございました。

で、今回の旅は、本当に今生だけじゃなく、未来際においてもずっと永遠に記憶に残る重要な何か旅であったような、そんな気がします。そして、今回本当に毎日、何度にもわたって、尊師のエネルギーの入ったお供物をくださり、我々はものすごくエネルギーがアップして、すごくいいヴァイブレーションになったような気がします。

それとともに、各聖地を回ってサキャ神賢のエネルギーにも触れて多くのヴァイブレーションを受けたんですが、日本に帰ってから、我々は在家ですから、世

の中のまた多くの人に接していってエネルギーをロスするという可能性がありま す。それをできるだけないように、よりいっそう修行を進めるように、何かでき ることがありましたらアドバイスをいただきたい。

それともう一つ、カルマの解放がもし遅れて起こった場合、その対処の仕方も お教え願いたいんです。よろしくお願いいたします。

(尊師) はい。まず、エネルギーのロスについては、ロスをするものだとお考え ください。で、逆にそれは言い方を換えれば、綺麗な水、清水をもらってきて、 それを多くの人に分け与えているんだという気持ちと同じ気持ちになってほしい。

つまり、神聖なものを独り占めするのではなくて、それを分け与えると。それ を分け与えることにより、より崇高な祝福、より崇高なエネルギーがまた満ちて くるはずです。ですから、それについてはこだわらないで。

で、じゃあ、どのような形で分け与えるのが最も理想的なのかというと、やは り単にエネルギーだけを分け与えるのではなくて、しっかりした、例えば、苦し んでいる方がいらっしゃたら、その苦しんでいらっしゃる方に対して真理にかなっ

た法を説いてあげるのか、あるいは迷妄に迷っていらっしゃる方がいらっしゃったら、その迷妄を取り払うために真理にかなった法を説いてあげるとか、そういう形でしっかりと法を説いてあげる。

あるいは、その他の布施・奉仕・持戒の実践を行なうことによって、よりエネルギーの受け皿として大きく、そして深く、そして広く、清らかな受け皿をつくると。これをなさってエネルギーをばらまかれると、よりいっそう多くの、そしてよりいっそう清らかなエネルギーが満ちてくると思います。ですから、そのように実践してください。

それから第二番目のカルマの解放についてですが、カルマの解放が起きましたら、とにかくできるだけ早く担当の師を通じて教団の方に連絡するようにしてください。というのは、カルマの解放というのは、例えば来世地獄のカルマがあった人の場合、その地獄のカルマが現象化する、その現象化というのは大変ある意味では恐い部分が伴っていまして、それについて適切なやはり指導が必要ですので、決して自分でそれを対処しようとしないようにしてほしい。よろしいでしょ

うか。
（質問者A）はい。ありがとうございました。
（尊師）はい、しっかり頑張りましょう。

◉サキャ神賢当時の真理施・奉仕活動

（質問者B）サキャ神賢当時の、真理施の方法と、どのような奉仕活動を行なっていたのか教えてください。
（尊師）まずサキャ神賢の当時の真理施というのは、これはよく仏典に多聞とあるわけですが、多くの説法を聴いて、そしてその説法を自分の中で咀嚼（そしゃく）し、咀嚼してまた元の形に戻し、そのとおりに伝えるということを繰り返していました。
これが真理施の方法です。
例えば例を挙げるならば、「無明ありて行あり、行ありて識あり、識ありて名色あり」、これでは何をいっているかわからない。しかしその例えば、「無明」というものが全く光のない状態で闇であるとか、例えば「行」というものが経験の

データの集積であるとか、そういうものをしっかり理解した上でそれをまた元に戻し、「無明ありて行あり、行ありて識あり」というふうに説明するわけです。で、その意味合いとはこうであるという説明をするわけですね。これが真理施の方法です。

で、できるだけ多くの人に、例えば特に行なわれていたのが外道と凡夫に対しての真理施です。これは、真理を実践していらっしゃる方々というのは、どの宗派に例えばまみえたとしても染まることはありません。なぜならば、真理以上のものはこの世に存在しないし、あるいは真理より絶対のものはこの世に存在しません。

ですから、わざと外道や凡夫のところに行き、外道や凡夫の法の話を聴いてその問題点を指摘してあげ、そして正しい法はこうなんだよと説いてあげる。そのような形で救済活動は進められました。これが真理施の方法です。

それから第二番目の在家の奉仕の活動についてですが、これは前期と後期では違いまして、前期は、托鉢（たくはつ）に必ず僧が来るわけですが、その前に必ず食事の用意

をして、托鉢僧が来るとその人に対して必ず食の供養をする。
あるいは衣服、あるいは座具、あるいは雨安居、つまり雨のときなど外を歩くと、例えば、水に濡れる、体が濡れるということがありますし、あるいは多くの虫たちを殺生するということもありますし、いろんな悪条件によって雨安居のときには家の中で瞑想するわけですが、その瞑想の空間を貸し与えるとか、あるいは医薬品を提供するとか、そういうことが前期に行なわれています。
後期においては、まずできるだけ多くの人を道場へ連れてくる。これが第一です。それから第二は、食事についても在家の方々が道場へ持っていき、そしてそこで、修行者に対して食の供養をするという形を採っています。あと、衣服、あるいは座具、あるいは雨安居のときの瞑想空間、生活空間、あるいは医薬品とかは変わりません。これが在家の奉仕行です。よろしいでしょうか。
（質問者B） はい。日本に帰りましたら、信徒一同真理施を頑張りますので、どうか加護ください。
（尊師） はい。頑張りましょう。

◉グルと一緒に転生するために

(質問者C) まず初めに、このインドに尊師と共に来れたことを大変うれしく思います。ありがとうございました。

今まで、単に感じていた無常という言葉が、この地に来て強く心に響きました。物乞いに来た貧しい人たち、しかし無智だった自分の前生において、永遠(とわ)の愛を誓った恋人もいたことでしょう。すべては無常ですね。

来世、別に地獄でも悪趣でも構わないのですが、尊師がこのカルパの終わり、マイトレーヤとして降誕なさるとき、今生は失敗してしまったのですが、そのときこそ優秀な弟子として転生したいのですが、連続して転生していく過程において、いろんな転生、例えばグルがいない転生とか、あと宗教とかけ離れた転生、もちろん三悪趣もあるわけですが。

これは自分の見解なのですが、いろんな弟子の人を見て単に徳があるとか、カルマがよかっただけじゃないような気がするのですが、どうすれば優秀な弟子として転生できるか、また初めから大いなる長い菩薩としての封印を尊師からされ

るのか、どうすればよいかアドバイスをお願いします。

（尊師）まず、「来世は」という考え方は修行者向きではありません。この瞬間から素晴らしい弟子に変わると。そして、S君は大変優秀な修行者としての素質、あるいはタントリストとしての素質を持っているわけですから、それをもっと自覚なさったらどうかと思います。

それから、S君のいうとおり、確かに徳があるからグルと一緒に転生するわけではありません。これは仏典にも書かれているとおり、一つの法一つの法を実践するとしたら何をなすんだと。これは覚者に対する記憶修習であると。で、この覚者に対するというのは大変わかりづらい言葉で、今のオウム真理教の言葉を使うならばグルに対する記憶修習であると。つまりグルグルグルと、グルに対する記憶修習を行なっている人は、必ずグルと一緒に転生することになります。

ただし問題は、カルマがよければ人間として転生しますが、例えば悪ければ、まあわたしの前生の息子であった、これは猫のマースというのがいるわけですけども、その猫のような転生をすることもあります。この猫は、結局死ぬまでわた

しが面倒を見ることになり、そして第一天界へと転生していきましたが……。
　次に、より効果的な方法は、皆さんの功徳とか善行とかをそちらの方向へ思念して向ける、要するに一切の功徳が、一切の善行が、あるいは一切の寂止の行が、未来際においてわたしの転生に大きな影響を与え、そしてグルと共に転生できますように等の詞章をなすならば、例えば皆さんが地獄へ落ちた場合、その縁のある魂が落ちた場合、例えばグルが天界へ転生できるカルマがあったとしても、それは自然と地獄へ行きます。
　ですから、そのような形の発願、祈念というものをもっともっとS君が取り入れられたら、間違いなく転生を間違わずに修行者としての道を歩き続けることができると思います。よろしいでしょうか。
（質問者C）どうもありがとうございました。

◉サールナートで初転法輪する理由

（質問者D）サールナートは、多くの真理勝者の方が法を説かれ、尊師もここで



このカルパの終わり初転法輪をなさるとおっしゃっていましたが、その土地で初転法輪をなさる理由、つまり条件をお教えください。といいますのは、ご説法中で機根なども心の現われとのことでしたので、このことも含めて詳しくお願いいたします。

（尊師）まず、今ジャンブ州はどんどん暑くなっていると。これはジャンブ州だけではなくて、地球全体が暑くなってきていることは皆さんもご存じでしょう。で、この中間のカルパの終わり、大きな争いが起きます。これはおそらく第三次世界大戦と考えたらよろしい。そこで核兵器その他、多くのいろいろな兵器がぶち込まれる可能性が高いと。もちろん、今の世界情勢から見るとそれはあり得ないという見方の方が強いです。しかし、わたしはそう考えていません。

まあそれはいいとして、この中間のカルパは、あくまでも瞬間的なものであり、その後生き残った魂が『創世期』にも書かれているとおり、あるいは『人類滅亡の真実』（ともにオウム出版）にも書かれているとおり、そこから少しずつ戒律の遵守、あるいは功徳を積むことを始め、そして徐々に徐々に寿命が延びていき、

寿命が延びていく段階で気候はいったん温暖化します。

そして、このカルパの終わりに近づくころに、このジャンブ州を中心として文明は今と違った形で栄えます。その段階で、まあサールナートに真理勝者が登場すると。まあそれはマイトレーヤという名前で登場します。

で、じゃあなぜマイトレーヤはサールナートでなければならないんだと。これは、こうお考えになったらよろしい。ここに一枚の壁があるとして、その壁の薄いところと厚いところがあるとして、当然薄いところの方が破れやすいと。つまり、エゴが少ない空間であるというふうに考えてたらよろしい。

で、そのエゴが少ないサールナートの空間において、より高い次元の、というよりも、大到達真智完全煩悩破壊界から祝福があり、そこで初転法輪を説くこととなるわけです。

で、心の現われと気候が関係あるというのはどういうことかというと、例えばインドと、それからスリランカは同じ仏教国です。もちろん、今ヒンドゥー教というのがありますが、これはヒンドゥー教というのはあくまでも仏教における形

状界の神々を崇拝する宗教がヒンドゥー教であって、根本をなしているものはカルマの理論であり、それはヒンドゥーイズムもあるいはブッディズムも同じなわけです。で、このヒンドゥーイズムとブッディズムの違いは何かというと、インドは大変ラジャス、怒り、熱エネルギーが強いと。よって大変暑いと。スリランカは、赤道に近いわけですが、より気温は低く、そして多湿であると。これはスリランカ仏教の方が柔らかい宗教、柔らかい仏教であることを気候が物語るんだと思います。よろしいでしょうか。

（質問者D）ありがとうございました。

◉神聖天に行く資格

（質問者E）神聖天に行く資格についてお尋ねいたします。『えんじょい・はぴねす』（オウム真理教発行の雑誌）では、性欲を滅していて若干の食欲は残っていてもいいということですが、他の説法では貪りを完全になくした場合と言われていましたが、神聖天に行くにはどうすればいいんでしょうか。

（尊師）食欲が若干残っているというのは、貪りの状態ではないんだよ。欲と貪りとは違うんだね。例えばここに食べ物があって、これが食べられるということは、これは欲望なんです。貪りというのは、例えばおなかがいっぱいの状態でそれでもまだ食べたいといって放り込むと。これが貪りなんですね。わかりますか。ですから、貪りは否定しなきゃならない。しかし、若干の食欲は残っていても、性欲が完全に滅されていて、そして慈愛の心が、すべての衆生のために生きようとする心が存在してれば、その魂は必ず神聖天へ転生します。

（質問者E）ありがとうございました。

◉いい思索をするために

（質問者F）四つの預流支の三番目の思索についてお伺いしたいのですが、どのようにすればいい思索ができるのでしょうか。お願いします。

（尊師）四つの預流支の中の、まず第一番目の三法に対する帰依、そして第二番目の教えを学ぶ、そして第三番目のその教えに対する思索、この教えに対する思

索のポイントは、まず第二番目を確定させることから始めなければならない。

つまりどういうことかというと、教えに対する思索が正確に行なわれるかどうかということは、その前の正見解がしっかりできているかどうかということになる。で、正見解がしっかりできていれば、おのずと第三番目の教えに対する思索というものは成功します。

で、それはどういうことかというと、まず自分自身の身の動き、心の働き、言葉遣い、これを日々チェックすると。そして、それをメモしといてもいいし、あるいは記憶しといてもよろしいけども、それをもとに一日一回ないし二回、その教えに基づいて反省をしてみると。

例えば、今日は言葉遣いにおいて妄語がどうであっただろうかと、綺語はどうであっただろうかと、あるいは、行為において今日は殺生はしなかっただろうかと、あるいは偸盗の心は浮いてこなかっただろうかと、このような形で思索を繰り返し繰り返し行なっていけば、間違いなく、その次の正しい身・口・意の行為がなされるようになります。

で、ポイントはね、教学がしっかりできていないと、それを行なうことによって消極的人生になります。しかし教学を行なうことによって、例えばその一つ一つの捨断が自分にとってプラスのエネルギーに働き、そして自分自身を救済することが進歩しているなということが認識できるようになる。わかりますか。だから、ポイントは第二番目の正見解を培う。これに集中しなさい。いいね。

（質問者F）はい。ありがとうございました。

◉救済者の転生

（質問者G）サールナートでの説法に関してですけども、人間の寿命が八万歳になるときに、ここに集まっている魂がですね、インドにすべて降誕して救済活動を一緒に展開していきたいと。そういう場合ですね、わたしたちは今、何をしたらいいかということを具体的にお聞きしたいということと、もう一点はですね、尊師はそれ以前にこの地球に降誕される機会はないかということをお聞きしたいんですが。

（尊師）わたしは、地球にはしょちゅう降誕しています。それは、言えない生もあった場合言っていませんけども、いくつかの大きな生が存在していることは事実です。で、なぜ言えないのかというと、わたしは宗教戦争が嫌いなんだよね。で、それを言い出すと宗教戦争になってしまうんで言えないと。だから今後も、当然それは人間の世界、あるいは天の世界を行き来することになると思います。

で、一つ言っておきたいことは、救済者というのは、例えば兜率天にずっと存在しているとか、つまりオウムの言葉でいうならば除冷淡天に存在してるとかいうことはないんだね。なぜかというと、弟子たちがあちこちに散らばっているから、できるだけコンパクトに移動しなければならない。だからまあ、わたしがこの地球に転生する回数はかなり多いと考えていいです。まずよろしいかな、それは。

それから第二段階として、あなたの言っている、その、それまで何をやったらいいのかというと、もうこれは、まず三法に対する帰依、そして真理の実践と。これをひたすら繰り返したならば、必ずその生においてわたしと一緒にサールナー

トで、また救済活動をやらなければならなくなると思います。よろしいでしょうか。
（質問者G）はい。どうもありがとうございました。

◉死にゆく魂に対して

（質問者H）今回はインド巡礼の旅、本当にありがとうございました。今回旅をさせていただいたのですけども、そのときに駅の近くで子供がずいぶん大きな声で泣いているんで、何かなと思って見ましたら、母親が行き倒れて死んでいるようなんですね。
で、非常に戸惑いまして、何かしてあげたいと思うんですけど何もできなかったんで、そういう人だけではなくてすべての魂の死というものに、我々オウム真理教の在家信徒が出くわした場合にどういうふうにしたらいいのか教えていただきたいのですが。
（尊師）まずそれは、そこで四無量心の瞑想をしてあげるのが一番よろしい。い

いかな。これは瞑想においてです。

で、皆さんにあまり話をしていないけども、オウム真理教はそういう人たちのための、例えば経済的バックアップその他を相当に行なっています。で、これは結局、国家を通してなさなければできないわけだけれど、それはそれで教団の使命だと考えてやっています。で、個人的には今言ったとおり、四無量心の瞑想、その他を行なうことによって高い世界へ転生してもらうというようにしたいと思うね。よろしいでしょうか。

（質問者H）はい。ありがとうございました。

◉最高の供養

（質問者I）供養について質問します。尊師が供養されている姿を目の前にして、自分も歌や踊りと香の供養ができて、サキャ神賢、シヴァ大神、神々への感謝の気持ちや帰依の心が通じるように感じました。このようなわたしたちの供養を、サキャ神賢、シヴァ大神、真理勝者、神々はどのように受け取るのでしょうか。

また今後、家においても、わたしたちが尊師や神々に供養することができるのでしょうか。そして、それはどのような方法によるのでしょうか。また、尊師に受け取ってもらえるのでしょうか。

（尊師） サキャ神賢にしろ、シヴァ大神にしろ、大変喜ばれておりました。というのは、まあここに集まっていらっしゃる方のかなりの人たちは本当に一生懸命今まで真理の実践をなさってきていらっしゃる方々であると。で、その心が現象化した状態であると。その踊りとか、あるいはお香の供養というのはね。

で、グルに対する供養、神々に対する供養、これはグルが最も望んでいるものを供養することが理想です。ということは、わたしの望んでいるもの、あるいはシヴァ大神、あるいは真理勝者方が望んでいらっしゃるものは真理の伝播、真理の布教です。ですから、最も最高の供養は真理の布教だと考えてください。よろしいでしょうか。

（質問者I） はい、わかりました。それは、具体的に信徒が増えるっていうことでなくても心を込めているだけで通じるものなんですか。

（尊師）ですから、具体的に信徒は増えなくても、例えばここに外道がいてその外道に対して法を説いたと。これは事実です。わかりますか。

（質問者I）はい。

（尊師）つまり、それも功徳になります。供養になります。

（質問者I）通じるんですか。

（尊師）それは通じます。

（質問者）はい、わかりました。ありがとうございました。

第二部

直弟子用奥儀説法集

◆ダラムサラーにて――その一

「欲六界のバルドーと転生、三管の浄化」

（一九九一年五月二十九日）

◉究竟の瞑想について

まず、もし質問とかあれば受けたいけど。

（質問者A）究竟の瞑想と、要するに空の体験になるんでしょうか、それと、前生のカルマを切るということの関連性みたいなものを、もしよろしければ。

（尊師）まず究竟の瞑想というのは、君たちも知っているとおり、自分の内側に何が根づいてるかを見るための瞑想だよね。生起の瞑想というのは、自分たちの内側に根づかせるための瞑想だよね。例を挙げるならば、どういうことかというと、観察する瞑想イコール究竟の瞑想と。そして、データの入れ替えの瞑想イコー

ル生起の瞑想というふうに分類することができる。ここまでいいかな、まず。
で、究竟の瞑想イコール自分の内側に何が存在しているかだから、それイコール、カルマを切る切らないとは関係がない。しかし、カルマを見極める材料にはなるよね。というか、それ以外にカルマを見極める道はないと。究竟のとき現われてくるものが、今自分自身に生起しているもの、自分自身の中に内在しているものを現わしているわけだから、当然来世の第一要因として登場すると。
だから究竟で、しっかりと経験したものを土台として、それに見合った瞑想を続けていくならば、来世も変えることができるということがいえると思います。
じゃあ、究竟と空に関してはどういうことかというと、その究竟の瞑想において、一切、思念、思考が生起しなくなった状態、これが空だよね。ということです。いいかな、そこは。

◉地獄・動物・餓鬼の色

君たちも知ってのとおり、このサムサーラは六つの世界で構成されている。そ

れは、地獄、動物、餓鬼、人間、そして憤怒天、それから戯忘天の世界である。まあ、これにもう一つのサムサーラを加えるとするならば、神聖天を加えることができよう。しかし、この欲六界の創造に関係しているといわれている天界が神聖天であるから、一応これは加えないことにするべきであると考える。

まず、地獄のバルドーというものは、どういうバルドーかというと、これは、経典では煙色というふうに表現されているが、明らかにこれは黒である。そして、その黒の思念の集積、これが地獄の世界へといざなう結果となる。

では、その黒の思念とは何かと。それは、一言でいうならば嫌悪であると。では、なぜ嫌悪が黒なのかと。これは、嫌悪によって自己を防御すると。嫌悪によって、自分自身の世界を狭めていくという結果、結局、地獄イコール黒ということになる。つまり、要するに壁をつくるわけだね。つまり、思念の力によって壁をつくり、その思念の壁によって自分自身の自制力を失った状態、あるいは自分自身の行動の範囲を完全に制限されてしまった状態、これが地獄であると。

では、動物とはどういう世界であろうかと。これは、バルドーの色は緑である。

そして、このバルドーの色が緑であるということは何を表わしているかというと、これは、調和、いい意味ではね。悪い意味では妥協を表わしている。

では、何に対する調和であり、何のための妥協なのかというと、これは自己保全を目的とする調和であり、自己保全を目的とする妥協である。そして、この自己保全を目的とする調和、自己保全を目的とする妥協は、心の中に曖昧さをどんどん生み出し、実体の認識、これができなくなってしまうと。そして、強いものに巻かれ、弱いものを食らうという習性が生起してくる。これが動物界への転生の因であり、そしてバルドーの光の意味合いである。

次は、餓鬼の世界である。餓鬼の世界は黄色である。黄色といっても、これはくすんだ黄色である。そして、このくすんだ黄色、これは何を意味しているかというと、完全に自己の物質的欲求、あるいは自己の何らかに対する欲求、貪り(むさぼ)りを表わしている。

そして、この集積の結果、結局いろんな現象において貪りのデータだけを修(しゅ)習(じゅう)するがゆえに、最も満足のできない状態が心に生起してくる。そして、その満

足できない状態の心の現われとして餓鬼の世界が登場するわけである。よって、この餓鬼の世界には物質がないわけではない。ただ、その物質で、その生命体が満足できないことを表わしている。

◉様々な種の人間の色

次は、人間の世界である。人間の世界には、例えば青緑、あるいは例えば、青黄色、例えば、そうだね、まあだいたいこの二つを中心として考えたらいいかもしれない。たまには純粋な青があるけどね。で、この青緑、あるいは青黄色というのは、その人間転生に際して純粋に愛著(あいじゃく)だけではなくて、貪りや、あるいは無智を含んでいることを表わしている。よって、人間の種というものは、一種類でないということを認識しなければならない。

そして、このもともとのブルーの意味合いというのは、愛著である。愛著とは何かというと、まず対象に対して喜びを生起させ、その喜びを記憶修習することによって離れられなくなった状態。というよりも、瞬間的に選択なしにそれを取っ

てしまう状態。これが愛著である。

これは、こういうふうにたとえることができる。初めは、何か好感の持てるようなことが対象に対してね、起きると。で、その対象に対して起きる好感の持てるような状態が、次は好感が持てないようなことについても好感の持てるような状態であると錯覚認識するようになってくる。これは何かというと、心が愛著をしたがゆえに対象に対して認識を誤るというか、というよりも、その対象の認識を根本とするよりも対象そのものに対して愛著するという結果である。

それはちょうどどういうことかというと、例えばここにラーメン屋があると。で、そのラーメンが大変おいしいとしようと。そうすると、例えばそのラーメン屋の丼まで好きになってしまうというのと同じである。そして、その象徴がブルーであると。

で、このブルーに例えば緑が加わったり、あるいは黄色が加わった場合、意味合いが変わってくる。例えば、ブルーが、ブルーに黄色が加わった場合は、その愛著に利益が絡んでいる。

つまり、その恋愛は、例えばその人の物質欲を満足させたり、名誉を満足させたり、あるいは権力欲を満足させたりする場合、必ずブルーに黄色が交じると考えた方がよろしい。次に、その愛著が、その人の心の逃げによって生起する場合、必ずブルーに緑が絡んでくる。よって、そのブルーの要素はそのままにしていても、例えば緑の要素が消えた段階で、対象の変化が生じるわけである。

◉憤怒、デーヴァの光

次は、憤怒世界である。憤怒世界の光は、これは赤紫である。で、これは赤紫であるといいながらも多様の要素を含んでいる。だいたいにおいて、この憤怒世界へ転生する魂は、赤紫と、それから黄緑のバルドーを持っている。つまり、この憤怒世界が、純粋な赤、つまり嫉妬心（しっとしん）や、あるいは知性を現わしているのではなく、そこには貪りや無智が含まれているということである。

もっと、深く突っ込んで、この憤怒世界の説明をするならば、真の憤怒世界の主、あるいは憤怒世界の上級の魂というものは、黄緑のバルドーがない。黄緑の

バルドーがないとはどういうことかというと、純粋に知謀、力、あるいは徳を備えていると。これが憤怒世界の形である。ところが、憤怒世界へ転生するもう一つの魂は、そこに餓鬼のカルマや、あるいは動物のカルマを含んでいる。以前、オウム真理教で、黄緑イコール憤怒世界だといってたのはそういう意味が込められているわけだね。つまり、憤怒世界には二つのタイプがいて、支配される側と支配する側がはっきりしているんだということ。そして、支配する側は完全に純粋に赤紫であり、支配される側は黄緑のパターンが多いということです。

次は、デーヴァである。デーヴァの本質は白である。そして、この世界は意図的無智を現わしていると一般的に経典にはいわれている。この意図的無智とはどういうことかというと、例えば、この世の中は無常であると。無常であることは理解していても、その無常の中でできるだけ多く、長く楽しみたいと。あるいは、できるだけ多く、長く満足したいという心の働き。これが、デーヴァである。よって、これは、明らかに自己保全の心を背景としているから、大変冷たい世

界といわざるを得ない。これは、仏典によくうたわれていることだが、例えば、デーヴァというものは、デーヴァ世界の一週間前に自己の死を悟る。典型的なデーヴァ世界というのは、当然忉利天であるから、それは七百年を表わすと。つまり、七百年間、自分の死について考え、苦しまなければならない。

そして、デーヴァの世界から死滅するわけだから、絶対にデーヴァ世界以上には転生しないと。つまり、他の五つのサムサーラへ転生するわけである。よって、そこには次に受ける生の苦しみ、これを記憶修習し続けなければならないということになる。

よって、このサムサーラの六つの世界、どの世界へ転生したとしても、わたしたちを幸福にしないわけである。いいかな。まず、ここまで質問を取りましょう。

◉憤怒天の赤紫

（質問者A）憤怒天の赤紫というのは、純粋な赤が知性だとすると、紫というのは人間の青が入っているんでしょうか。

（尊師）というよりは、執着だね。
（質問者Ａ）執着の青が入っている。
（尊師）はい、そうです。
（質問者Ａ）はい、わかりました。

◉憤怒天の黄緑

（質問者Ｂ）憤怒天のところで黄緑と言われたと思うんですけども、黄緑をちょっと考えてみたんですけども、青と緑かなと思ったんですけども。
（尊師）黄緑という場合は、黄色と緑です。
（質問者Ｂ）あ、すみません。黄色と緑、黄色と緑となったら。
（尊師）動物と餓鬼だね。
（質問者Ｂ）動物と餓鬼の魂も、その要素を持っている魂も、上に上がるということですか。
（尊師）上がるというよりも、その要素を持っている魂がジャンプする世界とい

うことだね。だから、だいたい落ちる場合は、まず赤紫から青緑になって、黄緑になって、緑になって、黒になって落ちます。憤怒世界の魂はね。

（質問者B）もう一度お願いします。

（尊師）まず、赤紫から青緑が出てきて、そして黄緑が出てきます。そして緑になります。そして黒になります。で、落ちます。

（質問者B）ありがとうございました。

◉デーヴァの意図的無智

（質問者C）デーヴァなんですけれども、デーヴァには六つの世界があるんですけども、この意図的無智というのは、どの世界にも当てはまるんでしょうか。

（尊師）はい、そうです。当てはまります。

（質問者C）第四天界も、そうなんでしょうか。

（尊師）当てはまります。もしね、第四天界で、まあある程度の慈悲の修行をしていながらだよ、愛欲というものを欲さなかったなら、第四天界へ転生しません。

つまり、徳の還元の仕方が、まだ欲望なんです。いいかな。

はい次に、他にないですか。よし、なければ次に行きましょう。

◉バルドーのコントロール

君たちがスムーズに転生するために。君たちがスムーズに転生するためには、次の修行を行なうべきである。それは、精神集中、そして、自在に入り、自在に出るという修行である。この自在に入り、自在に出るとはどういうことかと。

例えば、瞑想中によく寝ると、あるいは瞑想テープを聴きながら寝るというパターンがあるわけだけども、もしこういう現象が起きるとするならば、その人の輪廻転生（りんねてんしょう）は不確定なものとなる。つまり、それは外的要因によって変化させられるからである。

ところが、もし精神集中をし続けられるだけし、あるいは教学だったら教学をし続けるだけし続け、決して変化がないと。そして、逆に眠りに入ろうと思ったら眠りに入れると。あるいは、究竟に入ろうと思ったら究竟に入れると。こうい

う状態をなすならば、その人は自分の心によってすべてを支配したことになる。支配するということは、バルドーもそれによってコントロールできるということである。

よって、ポイントとなるのは、生起の瞑想、自分がなさなければならない瞑想のときにいかに集中し続けるかである。そして、その集中も、決して他の要因に影響を受けないで集中し続けるかであると。

そして、集中し続けるだけ集中し続け、究竟に入るだけ入り、広がるだけ広がり、ね、自在になるならば、死後気絶は存在しません。

質問はないかな、ここまでは。

◉生起と究竟の瞑想の得意な人

（質問者D） 生起の瞑想が得意な人と、例えば究竟の瞑想が得意な人の違いみたいなものは、特に存在するんですか。

（尊師） 緊張させることの得意な人、あるいは意識がはっきりしていれば、生起

の瞑想が得意といえる。次は、そうだね、意識の広がり、つまり心の広がりの大きい人は究竟が得意といえると思います。
それはどういうことかというと、スペシャリストタイプは、生起の瞑想が得意であると。それから、パブリッシャータイプは、究竟の瞑想が得意であると。つまり、スペシャリストというのは、ある専門について徹底的に研究し続ける、そういう機根の持ち主は生起の瞑想が得意であると。究竟の瞑想というのは、いろんなことを一気にワーッと行なうことのできる人ね。こういう人は究竟の瞑想が得意であるといえます。
他にないか。なければ次にいくぞ。

◉三つの気道

次は、身体のナーディーについて少し話をしましょう。まず、背中には三つの管がある。これは、イダー、ピンガラ、スシュムナーである。これは、ＯＫだね。そして、この三つの気道のだいたいは、右の気道か左の気道に入っている、プラー

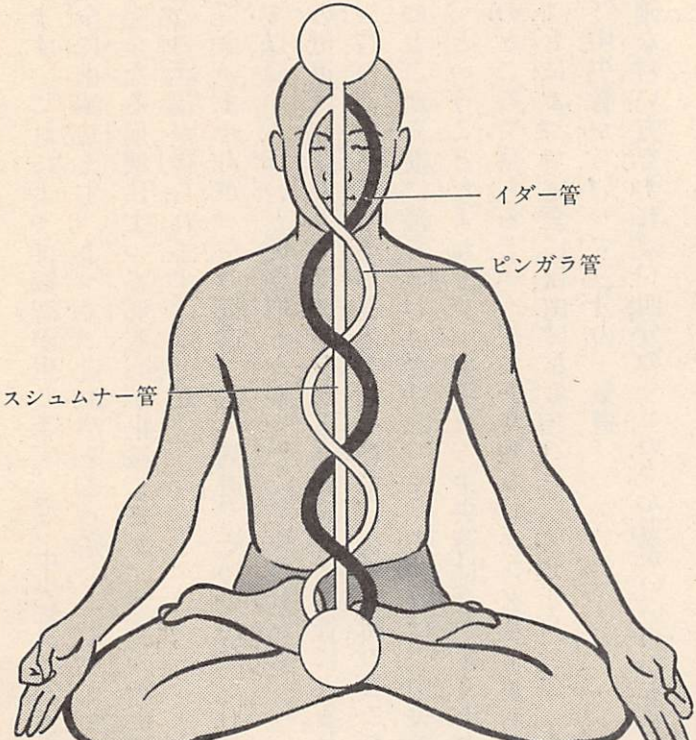
ナは。で、このときには無智になったり、あるいは邪悪な心を生起させたりしています。それが中央管に入ると、執着、つまり精神集中のできる状態が生起してきます。

そして、精神集中ができる状態が生起し、スシュムナーをエネルギーがどんどん上がるようになり、サハスラーラ・チァクラの崩壊が始まると、そこから三つの管の浄化が始まります。それは、前面の気道、それから前面から三分の二の所の気道、それから真ん中の気道です。

それと同時に、次は左の気道の浄化が始まります。左の気道は、左のムーラダーラからスタートして、左の気道を上がり、そして中央の管に入ります。

そして、右の気道は、右のムーラダーラからスタートして、垂直に上昇し、そして、この耳のところを通過して、この目線から、アージュニァー・チァクラから前面の気道へ落ちます。で、そのサハスラーラの崩壊と同時に、中央管がどんどん浄化されるということになるわけだね。

で、この三つの管の意味合いというのは、左の気道は完全に無智、無明、迷妄



主な三つの気道

を崩壊させます。これによって叡智が生じます。で、中央管の完全なる崩壊によって愛著が完全に止滅します。よって、自由がそこで完全に生じます。それから、右の気道の完全なる崩壊によって邪悪心が止滅します。邪悪心が止滅することによって完全なる至福が得られます。以上だ。

(質問者E) すいませんが、左の気道、右の気道、それぞれがムーラダーラからスタートして以降がちょっと聞き取れなかったんですけれども。

(尊師) 左の気道は、左のムーラダーラから上昇して中央管に入るわけだね。で、右の気道は、右のムーラダーラからスタートして、この眉間のとこを通ってアージュニァーのとこから前に落ちるわけだけど、で、中央管は、中央の気道を真っすぐ上がり、ということだよね。で、実際は、中央管は真っすぐ上がり、この三分の二気道のところで落ちるという、まあ特殊なツァンダリーがあるんだけど、それをなすことによって完全に自由になると。

(質問者E) 中央管からいって三分の一気道。

(尊師) 正確な言い方をすれば、四分の一といった方がいいのかもしれない。アー

ジュニァーと中央管の真ん中だから。ここに一つ気道があるんです。で、これをチベット密教的な表現を使うならば、三分の一の気道をブラフマンの気道といっています。そして、この中央管をマハー・ムドラーの気道といっています。だから、絶対自由、あるいは絶対幸福、あるいは絶対的な叡智というのは、この三管の象徴なんですね。

はい、ここまで質問を受けましょう。

◉最終のステージの話

わたしは君たちに〝猫に小判〟の説法をしているかもしれない。それはどういうことかというと、今わたしがこうやって法を説いているのは、君たちに法を説いているだけではなくて、ビデオに法を説いているんだね。というのは、法を残しとかないとまずいから。だから、君たちの中で理解できない人がほとんどだろうけど、それはあまり気にする必要はない。これは、最終のステージの話をしているんです。

（質問者F） 前面の気道には、名前は特にないんでしょうか。
（尊師） 前面の気道はチャクラでしょ。
（質問者F） チャクラの気道。
（尊師） 違う違う。つまり、完全にチャクラの解放が起きるわけだよね。邪悪心の解放によってチャクラの解放が起きるんです、完全な。
（質問者E） ツァンダリーをやっていて、観想では中央を通っても、その人のカルマによって感覚は中央を通らない場合は、それは要するに、自分は前なんだと思ってその経験と観想を合わせる……。
（尊師） そうだね。というよりも、そういうときは観想よりも経験の方が優位です。だから、君の言うとおり、前なんだと考えるべきです。
（質問者E） わかりました。

◉右の気道と邪悪心

よって、君たちは行というものを大切に考えているかもしれないけど、心のプ

ロセスが大切になってくるんだね。例えば、先程言ったとおり、もし完全に愛著を止滅するならば、その気道というものは完全に解放されます。もし完全に迷妄を止滅するならば、迷妄の気道は解放されます。もし完全に邪悪な心を止滅するならば、邪悪の気道は完全に解放されます。

じゃあ、例えば例を挙げましょう。ムーラダーラの邪悪な心、これは何ですか。これは嫌悪であり、殺生だね。でしょ。

じゃあ、スヴァディスターナの邪悪な心は？　これは異性を取られる取られないという、これは嫉妬心でしょ。

じゃあ、マニプーラの邪悪な心は何ですか。何ですか。さあ、頑張って。そうだね、まあ独占、そういう食物とかいろんなものに対する独占。それだけじゃなくて、やっぱりそれにおける排斥、こういうものが加わってくるわけね。あるいは、学問・才能に対して、それをその他のために使うんではなくて、自分の邪悪な心を完成させるために使うとか、こういうものがマニプーラの引っかかりになるでしょう。

じゃあ、次はアナハタは何ですか。それは、純粋に愛著ではなくて、ね、いろんな利益と絡んでいる愛著、あるいは純粋に愛著ではなくて、そうだね、利益とまではいかないけども下心が完全にある愛著。こういうものが右の気道のアナハタだよね。

じゃあ、ヴィシュッダはどうかな。もう、これは簡単だよね。悪口がそうでしょ。両舌がそうでしょ。

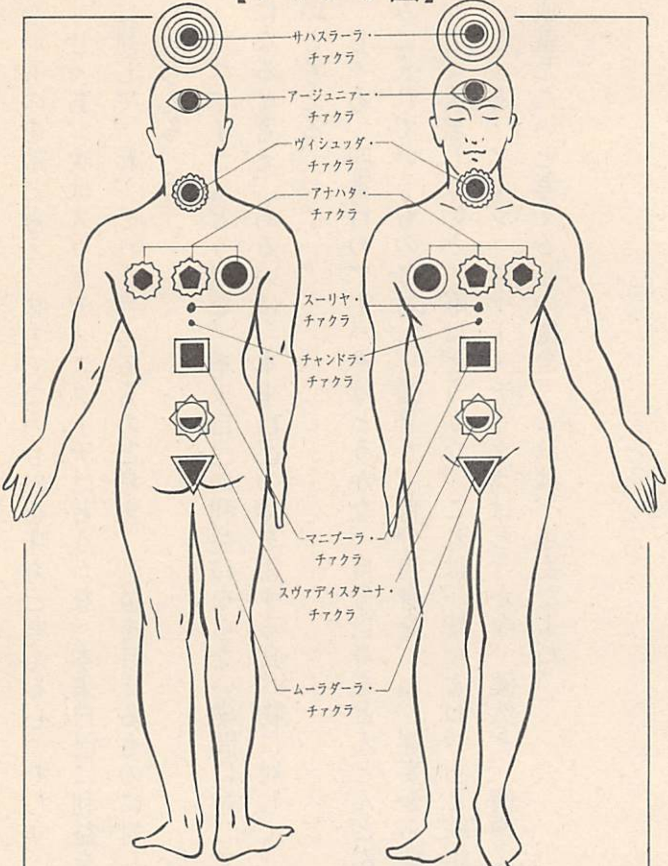
じゃあ、アージュニァーはどうかな。現世の願望が衆生を利さない願望、衆生を害する願望、これは愛著だよね。ＯＫだね。

こういう心の生起、心の感情の生起を放棄する。ね。とらわれないと、この右の気道は浄化されるんです。ところが、一生懸命修行やってても、こういう感情を絶えず記憶修習していたら決して解放されません。いいかな。

◉左の気道と迷妄

じゃあ次は、左の気道のムーラダーラは何かな。迷妄なるがゆえに、本来敵で

【チァクラ図】



—チァクラ—

チァクラとは、人間の身体にある霊的なセンターで、主なものは七種である。しかし、普通の人はそれが眠った状態で働いていない。訓練によって開発されるのである。

また、チァクラは、身体の下部に位置するものに比べ、上部へいくほど次元が高くなっていく。

超能力もこのチァクラが司っているのだ。

ないものを敵と考え、味方でないものを味方と考える心。でしょ。
じゃあ、次はスヴァディスターナはどうかな。本来自己に利益を与えないものに対して、ね、それを与えるものと考え、利益を与えるものに対して与えないものと考える、ね。
マニプーラはどうかな。本来自己の利益にならない学問に対して、それを利益になると考え、あるいは、本来自己の体を害する食べ物に対して、それを害さないと考える、ね。
じゃあ、四番目のアナハタはどうかな。自分自身をどんどんどんどん迷妄の深みに入れていくものに対して愛著し、自分自身を、ね、迷妄から解放するものに対して愛著しないと。喉はどうかな。これは、嘘だよね。あと綺語だよね。
じゃあ、アージュニァー・チァクラはどうかな。漠然と、情報によって願望を成就したいと考える心の働き。これは、迷妄だよね。

◉中央の気道と愛著

では、次は愛著。ムーラダーラの愛著は何だ。もう、本来カルマが完全に終わりに近づいている、あるいは終わっているにかかわらず、それを記憶修習し続けると。嫌悪を記憶修習し続けると。これがムーラダーラの愛著だよね。

では、次はスヴァディスターナの愛著は。性的快楽を貪り続けると。これが、スヴァディスターナの愛著だよね。

マニプーラの愛著は。これは、学問を貪り、あるいは食い物をもう体を害するまで貪ってしまうと。だよね。

じゃあ、アナハタの愛著は。対象の認識をしっかりしないで、愛著し続けると。それによって、心がその対象と一致した状態になると。

では、喉の愛著はどうだ。これは、おべっかなどがその典型だよね。相手によく思われたいと考える心の働きからである。

じゃあ、アージュニァーの愛著は。願望の成就が、ね、無常である、無常であるにかかわらず、それを無常と見ないところから生起する状態。これがアージュ

ニァーの愛著です。

はい、ではここまで質問を受けましょう。

◉記憶修習と本人の努力

(質問者G) 最後の心のプロセスが大切という項目なんですが、まあ以上の感情をなくしていけば、あらゆる、いろいろな気道が浄化されるという中で、具体的にこの記憶修習以外に、実際にこういう感情が出てきた場合に、それに行動が左右されないような行動を、その本人が努力して取っていくことによって浄化されると考えてよろしいんでしょうか。

(尊師) それはされます。はい。それだけじゃなくて、逆の言い方をすれば、行動を放っておいてね、初めつらいから、その部分の経典を探して記憶修習すると。そしてしっかりと考えると。それだけでも落ちていきます。そのうちに静まります、それは。

(質問者G) はい、わかりました。

◉ブラフマンの気道の浄化

（質問者H）ちょっと一つ前なんですが、三分の一ブラフマンの気道、これを浄化するルートというのはどこにあるんでしょうか。

（尊師）そのブラフマンの気道を浄化するのは、二つの道があるんだね。一つは、アージュニァーから上がっていって、ブラフマンに入っていく道と。だから、これは邪悪心の完全な浄化の後、上がっていく道です。それからもう一つは、中央管が完全に浄化された後に浄化される道があります。つまり、ツァンダリーで、この三分の一の気道が浄化される場合があるんですよ。いいかな。

◉スペシャリストからパブリッシャーへ

（質問者I）先程、生起が得意な人はスペシャリストタイプで、究竟が得意な人はパブリッシャータイプと言われましたが、各々自分がどういうタイプであるというのは、自分でまあ知ってるかもしれないんですけども。

（尊師）これは、原則としてね、必ずスペシャリストからパブリッシャーへ移行

します。わたしの言っている道は、そういうことです。つまり、スペシャリストになれなくてパブリッシャーになれないということだ。つまり、一点から広がっていくわけだから、その一点に対して集中もできないで全体に広がりはできないでしょ。

（質問者I） 初め、生起は一点集中ということで、まあスペシャリストを完成した場合に、それからパブリッシャーの方へ移っていくということでしょうか。

（尊師） そうです。そのとおりだ。

（質問者I） 深く広くなるということですね。

（尊師） そうです。浅く広くは瞑想にはなりません、それは。

◉愛著の恐さ

（質問者J） 愛著のところでラーメン屋の例を出されたんですけど、ラーメンがいいだけにもかかわらず、丼まで食べてしまうと……。

（尊師） ああ、愛著しちゃうと。うん。

（質問者J） その比喩からだと、少し、わたしラーメンが好きだったことがありましたけど、丼まで食べようとしたことはないですけど。女性なんかの例から見て感じることは、例えばいい部分と悪い部分があったとき、悪い部分も好きになってしまうようなところがあるみたいなんですね。例えば、悪い部分が主題になっているときも、いい部分の記憶が一緒に連動してパーッと出てきてしまうからこうなってしまうのか、もしくは他の原因があるのか。要するに、分別がついていないというか、分別されていない理由というのは何でしょうか。

（尊師） それは、例えば愛著というのはね、自分がこう思いたいという方向があるんだよ。で、そのこう思いたいという方向があるから、確定していない要素に対して丸を付けていくわけだ。つまり完全に確定されていたら、こう思いたくとも思えないよね。

例えば例を挙げるならば、この人は、まあその異性に対して英語ができることをお付き合いする条件にしていたとしようじゃないか、例えば。すると、その人が英語ができないとしたらその人は除外されるでしょ、例えば他の要素がいいと

しても。ところが、英語ができるできないを検討材料に入れていないとするならば、他の要素の付加的な要素としてそれはクリアされるわけだよね。愛著というのはそういう性質があるんです。

だから、例えば今Mがラーメン屋の例で理解できないと言ったけど、わたしはいろんな人たちを指導してきて、特にOLが、これはTとか経験があるかもしれないけど、例えば素敵な店に行くと。で、そこの店のお皿をもらってくるとか、あるいは灰皿をもらってくるとか、何か商品をもらってくるとかして喜ぶというのがあると思うんだけどね。

(質問者J) それはあると思います。

(尊師) それは結局、女性の例でいうよりもラーメンの例の方がわかりやすいから言わせてもらうけど、例えば丼も好みの丼があったとしよう。だとしたら絶対に、ラーメン屋のその丼が好みと合わなかったら、それを取ろうとしないと思うんだよ。好みであるというふうに認識しないと思うんだね。ところが、その丼に対してあんまり頓着していなかったら、やっぱり、ラーメンがおいしい、イコー



ルそこの丼もなんかよく見えるということになるわけだよね。
だから、女性の場合も同じで、要するに確定している要素が多ければ多いほど、愛著はしづらい。ただ、はまってしまえば深くなるけどね。確定している要素が少なければ少ないほど、その変化は激しいね。例えば例を挙げるならば、ただ寂しささえ紛らわせてくれればいいやという印象があったとしよう、ね。そうすると、その異性に対してその部分だけを求める。そうすると、他の要素はどうでもいいから、すべてをよく見ようと努力しているからよく見えてくると、系統的に。
ところがそうではなくて、一生の例えば伴侶として、しかもこうこうこういう条件を備えていなければならないと百項目くらいの条件があったとして、それを満たさなければ嫌なんだといって絶えず記憶修習して考えていたら、その百項目を押さえた上で、その他の曖昧な部分については流されていくという形になるはずだね、それは。いいかな。
(質問者J) はい。最初の質問と部分的に重なるかもしれないですが、自分が求めていた条件を満たした場合、それ以外の部分に関しては肯定的に見ようとする

心の働きが愛著だと言われていましたけど、それ以外の部分を肯定的に見ようとする心の働きの原因は何なんでしょう。

（尊師）それは、幸福になりたいと考えているからだよ。で、自分の外側に幸福があるんだと錯覚を起こしているからそのように見ようとするんです。

（質問者J）なんかそういう部分、いい部分はたくさんあった方がいい……。

（尊師）というよりも、そう思い込んだ方が幸福になれると錯覚を起こしているわけです。

（質問者J）早く幸福になりたいというか。

（尊師）早く幸福になりたいというよりも、いや、本当はその方が苦なんです。楽だと思い込んでしまっているんです。で、その場合の難しさは、一回そこまではまってしまうとあとは底なし沼だから、本当にそこでもがき苦しむまでは気づかない、一般には。だから、わたしは迷妄、それから邪悪心、それから愛著の中で一番恐いのはやっぱり愛著だと思うね。愛著を止滅したら、かなりの部分がクリアになっていくと思います。

他にないか、質問は。

◉他の要因による迷妄

（質問者K）今日の話とちょっと違うかもしれないんですけども、ちょっとお聞きしておきたい点があったんでお願いします。まあラーメンの例にたとえたとしたならば、以前ラーメンを食べたことがない人が全然おいしいと思わなかったとしてですね、突然好きになったというときが……。

（尊師）ありません、それは。それは、ありません、決してありません、それは。それは、絶対に起こり得ないことです。つまり、君の言いたいのは、経験が全く根づいてなくて、一回目ラーメン食べて、そのラーメンがおいしくないと考えてたと。

（質問者K）あ、すいません。ちょっとわたしの言い方が間違って……。

（尊師）今の言い方だとそうだよね。

（質問者K）ええ、すいません。もう一度言い直します。あの、一回も食べたこ

とのない人がラーメンを食べておいしいと思ったとしたときに、どうしてそう思うのかがちょっとよくわからないんですけども。

(尊師) それは過去世の経験ですよ。

(質問者K) 過去世の経験なんですか。

(尊師) はい。あるいは、今生での記憶修習です。それについて、わたしはコカコーラの例を挙げたことがあるんだけどね。実は、わたしはコカコーラというのは宣伝では聞いてたけど、実際に一回目飲んだとき、何ていうかな、炭酸が強すぎて、何でこんなの飲むんだろうと思ったんだよ。ところが、コカコーラがどんどん宣伝されていて二回目飲んだとき、ちょっとおいしいなと。三回目飲んだときおいしいなと。四回目、五回目、六回目と、もう一リットルボトルね、一気に飲んでしまうというか、そう徐々になっていったわけだよね。

これはまさに、そのコマーシャルの効果、記憶修習によって、その味覚の対象と味覚とがあって、その対象は変化しないのに味覚がどんどん迷妄に入っていったプロセスです。これは、明らかに他の要因によって記憶修習させられたことに

よって迷妄が起きたんだと思います。

(質問者K) わかりました。ありがとうございました。

◉同じような要素を持つ場合

(質問者L) 今の過去世の経験というか、例えば、ラーメンとは名づけられてなくても同じような要素を持った食べ物の場合もあるはずじゃないかと。例えば、同じようなメンの舌ざわりだとか。

(導師) それはあるだろうね。当然、あると思う。あるいは、視覚的なものもあるかもしれないし。例えば、ラーメンという言葉ってすごく曖昧だと思うんだよね。例えば、百件店に入って、百件とも違う味出すわけだし。

(質問者L) 塩が好きな人は塩からいものがだいたい好きになってしまうとか。

(導師) そういう原則的なものもあるだろうね、当然。ないか他に。よし、じゃあ、終わりにしましょう。

◆ダラムサラーにて――その二

「三つの修行の形態と形状界のステージ」

（一九九一年五月三十日）

◉マハー・ムドラーで浄化される気道

はい、時間があるから、今のうち、まだ昨日までの内容で質問があったら受けるけど。ないか。

（質問者A）三分の一の気道がブラフマンの気道で、中央管はマハー・ムドラーの気道と言われましたけども、マハー・ムドラーの成就の際に浄化される気道というのは、どこらへんまででしょうか。

（尊師）成就の際に浄化される気道か。それはステージによって違うな、マハー・ムドラーの成就の。なぜかというと、マハー・ムドラーの成就というのは――心

が現象に現われるということをオウム真理教では、それをもってマハー・ムドラーの成就といってるから——まあつまり、仏教的見地からいくならば、アラハットの状態を指しているわけだよね。

よって、マハー・ムドラーの成就イコール、心の現われが現象化している段階というふうにとらえていいんじゃないかと思うね。だからそれは、例えばその人のけがれとか、あるいは前生までの経験とか、いろんな条件があるわけだけど、それによって違ってくるということになるよね。

(質問者A) はい、はいありがとうございました。

◉三つのボーディサットヴァ

君たちがなさなければならない、三つの修行の形態がある。そして、この三つの修行の形態を達成するならば、君たちは三つのボーディサットヴァとして生まれ変わり、最終的には如来に到達するだろう。

では、その三つとは何であろうか。まず第一は、無智の修行である。第二は、

熱エネルギーを完全に昇華する修行である。第三は、すべてのとらわれを取り払う修行である。

では、この第一の無智の修行とは何であろうか。これは、グルに対して絶対の浄心を持ち、グルに心を合わせ、そして自己の考えを一切捨断し、グルの意思どおりに自分自身の心を合わせていくという修行である。

これはなぜかというと、わたしたちが過去世から培ってきた迷妄、この迷妄によって、わたしたちの行動というものは規定されているわけだが、その迷妄を捨断するためには、完全に最上の智慧に到達しているグルに心を合わせ、グルと同じ、グルの意思に沿った行動を行なうことこそが、左の気道を浄化するただ一つの道だからである。よって、グルの存在なしには、この左の気道は浄化されないといわれている。

第二の道は、右の気道である。この右の気道は、本質的には熱エネルギーである。そして、これはもう昨日も述べたとおり、邪悪な心を表わしている。よって、例えば経行の修行、あるいはプラーナーヤーマの修行、あるいはムドラーの修行

等、エネルギーをとにかく使い、そのエネルギーを昇華する方法の修行に徹するならば、この右の気道は浄化される。そして、左の気道が浄化されたならば、最高の叡智に到達することができる。右の気道が浄化されたならば、最高のパワーを得ることができる。

では、中央の気道を浄化するにはどのような方法があるであろうか。これは、記憶修習、記憶実践である。そして、自分たちが日ごろ培っている愛情、あるいは楽しみ、その他が幻影であることをしっかりと記憶修習、記憶実践によって気づき、まず愛の実践に入る。愛の実践が自分のものになりつつあるとき、その人の意識は神聖天へと移行する。

次に、哀れみの実践に入る。哀れみの実践が、その人のものになりつつあるときには、光音天へと意識は移行する。次に、称賛の実践に入る。称賛の実践がその人のものになろうとしているとき、その人の意識は総美天へと移行する。最後に、そういう一切のものを、完全に頓着しない記憶修習、記憶実践に入る。そのとき、その人の意識は広果天へと移行し、広果天から色究竟天(しきくぎょうてん)へと移行する。

そして、これらの三つの気道を完全に浄化した後、その人の意識は、心の本性へと到達し、そして、マハー・ムドラーの門が開ける。

◉マハー・ムドラーの四つの段階

では次に、マハー・ムドラーには、どういう段階があるのであろうかと。これは、四つの段階がある。第一の段階は、空無辺の境地である。空無辺の境地とは、その人の心の広がりが無辺であると。これは、左、右、前、後ろ、上、下、すべてにおいて無辺であるという心の状態が現われてくる。これが、第一のマハー・ムドラーの成就の境地である。

第二番目のマハー・ムドラーの成就の境地は、識別無辺の状態である。この識別無辺とはどういう状態かというと、その多くの心の広がりに対して、一切を知る智慧が生じてくる。要するに、これは他心通の流れに属しているわけだけども、例えば、対象となるものがアメリカにいようと、あるいはこの世界にいまいと、この心の状態を瞬時に識別することができる。これが、識別無辺の境地である。

マハー・ムドラーの第三段階の境地は、無所有の境地である。これは、肉体を含めて感覚を含めて、一切自分たちの所有しているものが、自己のものではないという経験を始める。

その次の第四番目のステージは、非認知非非認知のステージである。この非認知非非認知のステージはどういうことかというと、実体がないととらえるのではなく、あるいはあるととらえるのではなく、すべては自然にそこに存在していると。そして、そのすべての事象が、自然に存在しているものと自己との間に、区別があるでもない、ないでもない状態が生じると。これが、非認知非非認知のマハー・ムドラーの第四番目の境地である。

そして、最後の境地、これはマハー・ムドラーではない。マハー・ムドラーの完成、いや、すべての完成ということができるが、経験の止滅が生じてくる。これは、過去になしたいろいろな苦と楽の経験が、完全に止滅する状態である。これが修行の初めであり、すべてである。

では、これに至るための、まず人間界の修行について簡単に触れよう。これは、

君たちもよく知ってのとおり、七科三十七道品である。では、天の修行とは何であろうかと。これは、何をもって善法を増大させ、何をもって悪法を減少させるか。この一つのポイントに限られている。なぜならば、天というものは、功徳の消耗の激しい空間だからである。

つまり、天は欲楽の世界である。この欲楽の世界で、その天より上に上がっていくためには、善法を増大させ、悪法を減少させる以外にない。よって、すべての現象に対して、これは善法を増大させるのか、あるいはこれは悪法を増大させるのかの認識をしっかり持ち、善法を増大させるものをよしとし、悪法を増大させるものを悪しとすると。

◉天の修行

例えば、例を挙げよう。ここに、ある人が空腹でいたと。この人は、一日一食の戒を守っていた。しかし、その日は本当に少ししか托鉢することができず、食べられなかったと。その人のおなかは大変空腹になったと、ね。そして、しかし、

わたしは一日一食と決めたんだから、これを実践しようと考えたと。
そして、街をふらふら歩いたと、ね。そこで、法友に会ったと。
「いや、友よ」。
「どうしたんだ」と。
「いや、実は今日、一日一食しか、一日一食の戒を守ってつらい思いをしているんだよ」と。
「なぜだ」と。
「実は、今日の托鉢で、わたしは少しの食しか得ることができなかったんだ」と。
「そうかと。じゃあ、わたしは今日たくさん食を得たから、分けてあげよう」と。
「いや、わたしは一日一食の、今修行を徹底しようとしてるからこれに耐えることにしているんだ」と、ね。
そして、彼は耐えたと。
そして、歩き続けたと。そして、空腹の度合は、もっともっと増大したと。一軒の店屋の前にふと通りかかったと。そこに、ちょうどブドウが置いてあったと。

人はだれもいないと。彼はそれを取って食べてしまったと。

もし、彼が友の誘いに乗って食を食べていたならば、そのブドウは食べなかっただろう。つまり、どちらの方が悪業であったかという問題である。要するに天のポイントは、いかにその欲望を満足させながら、あるいは欲望を捨断しながら善法を増大させ、悪法を減少させるかである。これが、天の修行である。

そして、実は、この善法増大、悪法減少の真の意味、ここにタントラの奥儀が隠されているんだということを、ね、今日のまず、第一回目の講話として質問を取りたいと思う。

（質問者B） 広果天から色究竟天へというのは、広果天の次が色究竟天と考えていいんですか。それとも何段階かまだあるんですか。

（尊師） あります。

（質問者B） わかりました。

（質問者C）マハー・ムドラーの四つの段階というのは、一つ一つクリアしていくんですか。それとも、同時という場合もあるんですか。
（尊師）それは不可能です。
（質問者C）不可能ですか。
（尊師）はい。最初は、空無辺境から入ります。
（質問者C）で、いったん入って、それから器を広げてというふうになるんでしょうか。
（尊師）はい、そうです。
（質問者D）マハー・ムドラーには四つの段階があるというふうにお聞きしましたが、オウムのマハー・ムドラーの成就によって、この一、二、三、四の段階のいずれかが経験できるということでしょうか。
（尊師）まず、空の中に没入した段階をマハー・ムドラーの成就といっているよね。

（質問者D）　はい。

◉四無量心の順番

（質問者E）　四無量心は、「愛」「哀れみ」「称賛」「無頓着」の順番でなければ完成できないということなんでしょうか。

（尊師）　というか、例えばね、愛とはどういうことかというと、すべての魂の幸福を願う心ということができるわけだよね。それとだよ、例えば、自分自身に苦しみがあるのに、相手に対して哀れみを生じさせる心とは、どちらが楽だと思うか。

（質問者E）　すべての魂の幸福を願う方が楽です。

（尊師）　だよね。だから、愛が先にきているんです。

（質問者E）　やはり順々じゃないと。

（尊師）　順々の方が瞑想はしやすいと。

（質問者E）　要するに、難易度の順に並んでいるという。

（尊師）わたしはそう考えています。
（質問者E）はい、了解しました。
（尊師）例えばね、哀れみというのはどういうことかというと、自分自身は高い世界へ行けるんだけど、ね、わざわざ低い世界に存在して、そしてすべての衆生を利してあげようと。これは哀れみです。わかるかな。例えば、君たちが修行を進めてくると三つの性質に到達する。三つの性質とは何かというと、一つは卑屈、一つは闘争、つまり同じであると考える心、もう一つはわたしは優れているんだと考える三つの性質がある。これはOKだね。じゃあ、その三つの性質に到達した者がだよ、称賛しやすいと思うか、しづらいと思うか。
（サマナ）しづらい。
（尊師）でしょ。だから、第三番目の称賛は、哀れみの上にきているんです。つまり、修行を進めてくれば進めてくるほど、その世界においてリーダーになっていくよね、智性は向上し、でしょ。そこで、他を称賛するということはどういうことかというと、その三つの性質を克服したことになるわけだよね。あるいは、

克服する修行を達成しつつあることになるわけだよね。

また、もっと別な言い方をすれば、人間というのはね、自分より劣った者に対して哀れみを垂れることは簡単なんだよ。特に女性の場合、その性質が強い。だから、女性の場合ステージを上げて落ちるのは、だいたいその哀れみによって落ちます。もちろん、これは煩悩の絡んでいる哀れみだけどね。支配欲求が出てくるわけだ。これも、一種の哀れみです。

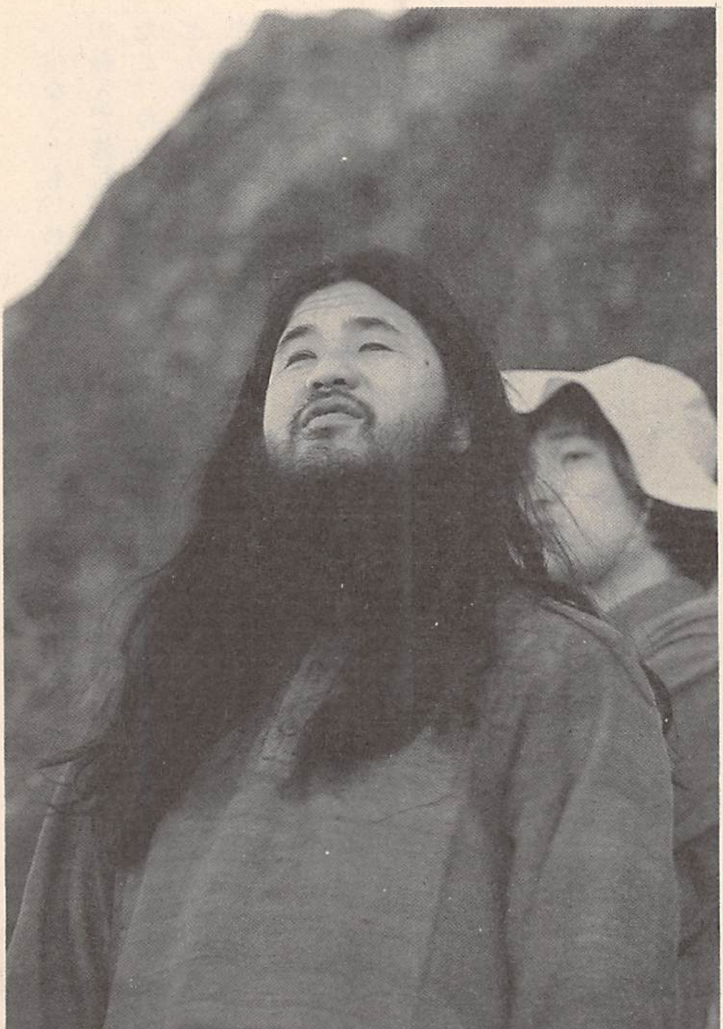
つまり、何かの目的があって、その目的のために、例えば奉仕をするということはできるよね。どうかな。例えば、お金のために奉仕をするということはできるよね。どうかな。例えば、異性を縛りつけるために奉仕をするということはできるよね。どうかな。例えば、名誉を得るために奉仕をするということはできるよね。どうかな。あるいは、地位をキープするために奉仕をするということはできるよね。どうかな。わかるよね、言っていることは。あるいは、食い物をもらうために奉仕をするということはできるよね。どうかな。

しかし、自分自身のステージがどんどん上がってきてね、他の人より抜きん出

たと。その段階で果たして奉仕ができるだろうか。どうだ、君たち。慢が出た段階で奉仕ができると思うか。じゃあ、例えば、その人が絶えず称賛の瞑想を行なっていたら、奉仕はできると思うか。どうだ。ということなんだよ。この称賛というのは、ただひたすら器を広げる道の一つなんだね。

じゃあ、次にだ、第四段階の無頓着はどうだ。これは、もっと難しいよね。例えば、称賛をする、愛の実践を行なう、哀れみの実践を行なう、これはすべて自分自身が幸福になりたいからだろ。どうだ。ところが、カルマというのは、無始の過去からの蓄積によって、ポッポッと例えば、ね、遠い過去のカルマが現象化したり、あるいは近い、あの生のカルマが現象化したりするよね。どうかな。そこで、例えば、その今現われている現象に対して無頓着でいるということは、どれほど大変なことだかわかるんじゃないか。どうだ。

例えば、例を挙げるならば、自分の培ったもの、これをぶっ壊して、ね、例えばシャクティーパットを行なうと。これは、無頓着の修行でもあるんだね。その人がとらえ、その人がどうとらえるかによって違ってくるわけだけど。



少なくとも、わたしのなした修行は、愛、哀れみ、そして無頓着と。この三つの絡んだ修行がシャクティーパットであったと。あるいはイニシエーションであったと。わかるかな。だれだって、修行したらいい状態で安定したいと思うよね。どうかな。例えば、こうやって君たちに法を説くということは、わたしのエネルギー状態は劣化すると思うか、それとも上等になると思うか。

(サマナ) 劣化します。

(尊師) 劣化するよね、瞬間的には。しかし、それは無頓着という点から考えたら劣化に当たらないんだよ。つまり、どういうことかというと、エネルギーからも、最後は解放されなければならないわけだから。でしょ。だから、言い方を換えれば、エネルギーから解放される状態、これが無頓着であると、ね。

◉どの修行をなすべきか

じゃあ、もっと別の言い方をしましょう。これは大変複雑、大変崇高だから、君たちは理解しづらいかもしれない。まず、わたしたちの性欲、愛情というもの

を司っているのは何ですか、元素は。

（サマナ）水元素。

（尊師）水元素、そうだね。じゃあ、水元素から解放された段階で何が生じますか。愛情を超越した状態は何が生じますか。愛が生じるよね。そのとおりだ。

では、次に、闘争。闘争を司っているのは、元素は何ですか。どうかな。ん、闘争だよ。例えば、走るときに何のエネルギーが使われると思いますか、君たちは。競争するときに。例えば、嫉妬のときに何の元素が使われると思うか。火元素だね。じゃあ、そういうものから超越をして、ね、つまり自己の優位性から超越をして、哀れみの状態に入るというのは、何元素からの解放になるかな。火元素だね。

じゃあ、次は神変を現わすことを含めて、慢の状態を形成しているのは何かな。至福の状態を形成しているのは何か、何かな。どうですか。風元素だよね。じゃあ、その状態から解放されるということはどういうことかな。つまり、自己の慢の状態から解放されるということは。もう、これはひたすら称賛の瞑想だよね。

つまり、風元素からの解放、イコール称賛の成就だということになるよね。じゃあ、絶対的な自由とか幸福とか歓喜というのは、何によって生起するのかな。空に没入した状態だよね、これは。どうかな。わかりますか。じゃあ、その状態を放棄するということは。空間の制約からの解放になるよね、ということだ。いいかな。結局そうすると、自分自身がどこで引っかかっているかよく認識しなさい。そして、何の修行をなしたらいいか、よく考えなさい。いいね。他に質問はないか。

◉チベット仏教との比較

ウッタマー（チベット経典を翻訳している師）は、わたしの説法というのはチベット仏教の塗り替えだと思うか。

（ウッタマー） 思いません。

（尊師） どうだ、訳をしていて。翻訳と。

（ウッタマー） チベット仏教の、例えば空の非常に詳しい説明があるんですけど、

全体像というのがよく見えない。それが、こう尊師の説法によって、もっと別の大きな角度から、いろんな方向からそれが見れる。

（尊師）でも、近ごろ思うんじゃないか。チベット仏教が大乗だといっているけど、大乗も小乗もないって。

（ウッタマー）ええ、そうはもう。チベット仏教自体の中に、大乗といってても いろんなことが混ざって入っているから、果たしてどれを彼らは小乗、大乗といっているのか難しいです。

（尊師）そう思うだろ。すごく大乗の定義も曖昧でしょ。それから、タントラの定義も曖昧だし、ヴァジラヤーナの定義も曖昧だと思わないか。というか、わたしは、全体像つかまえている人間はいないんじゃないかと近ごろ思うんだけど、どう思うか。しかも、批判をしないという見地に立っているから、どんどん並列でいろんな経典が出てきて、膨大になりすぎているんじゃないかね。

◉出離・非邪悪心・非残酷の思惟

（質問者F）尊師、八つの聖なる道に関して、ちょっとわからなくなったんで教えていただきたいんですが、出離の思惟、非邪悪心の思惟、非残酷の思惟と書いてあるんですけれども、出離の思惟というのは、おそらく貪りを脱出すること？

（尊師）ではないです。出離というのは愛著からの脱出です。

（質問者F）愛著からの脱出。

（尊師）はい、そうです。

（質問者F）非邪悪心の思惟とは。

（尊師）だから、非邪悪心の思惟というのは、右の気道からの脱出です。

（質問者F）非残酷の思惟というのは。

（尊師）非残酷の思惟というのは邪悪心が現象化した状態からの思惟です。

（質問者F）邪悪心が現象化した状態。

（尊師）した状態を脱出する思惟です。例えばどういうことかというと、邪悪心というのは、あの人を傷つけたいという心の現われ。それをなさない瞑想と。わ

かるね。残酷というのは、それを実際に行為として行なう、あるいはイメージとして行なう。

（質問者F） つまり、心の働きか、あと口、あるいは身の働きかの違いっていう。

（尊師） ではない。例えば、邪悪心というのは、あの人嫌い。これが邪悪心だよ。あの人大っ嫌い。これは邪悪心だ。いいか。ところが、それが今度は現象化して、アストラルでも何でもいいから殴ったり、蹴ったりするとか、殺してしまうとか、そういうのが結局、残酷の思惟になるわけだね。それをなさない思惟ということだ。

（質問者F） わかりました。ありがとうございました。

申し訳ございません、あと二点あります。以前、北伝の段階というのは、七科三十七道品の段階というのはお聞きしたんですけれども、南伝の段階というのは、「四つの記憶修習述が修習され円満になり、二正勤二正断が修習され円満になり、四つの如意の基礎が修習され円満になり」というふうになっているんですけれども、北伝では、確か四つの如意の基礎は最後に来るんですけど、南伝はここの位

置に来ている……。

（尊師）いや、だから、それはあくまでも単にそういう羅列をしてあるだけで、意味がない、それは。

（質問者F）意味がないですね。はい、わかりました。で、もう一つ最後なんですけれども、非神秘力と生存渇愛のところがあるんですけれども、非神秘力は何となくわかるんですが、生存渇愛に関して少し……。

（尊師）それは簡単だよ。生きたい生きたい、死にたくない。形をとどめたいと。そういうことに対する欲求が生存渇愛です。

（質問者F）はい、わかりました。ありがとうございました。

◆デリーにて

「七科三十七道品の段階的修行」

（一九九一年五月三十一日）

◎人間界に生まれた理由

露と落ち、露と消えゆく我が身かな。なにわのことも夢のまた夢。

この詩句を唱えたのは――若干ちょっとね、違うかもしれないけれど――太閤秀吉である。彼は、五十数年間の人生の中で、晩年、栄耀栄華を極め、そして煩悩を満足させ死んでいった。その当時の者にとって、彼のなした栄耀栄華というものは、最高のものであっただろう。しかし、その生も、露と同じようにあっさりと落ち消えていく。

では、現代人の生活はどうであろうか。現代人は、生まれ、そして保育園、幼

稚園と管理教育をさせられ、そして小学校、中学校、高校、大学とただひたすら教育を受ける。そして、その教育のほとんどは無益なものである。そして、卒業し、次は社会の中の、会社という枠組みのもとに生き、そして結婚し、子供ができ、気づいたときには、おじいさんおばあさんと。そして、病院へ入院させられ、自分で死のコントロールをすることもなく、死んでしまわなければならない。当然、そのときのデータというものは、悪趣へ至るデータである。

　では、君たちのように煩悩に向かい、その煩悩を滅尽しようとしている人たちは、どのような自由が存在するのだろうか。例えば、これは以前、わたしがキサーゴータミー正悟師や、あるいはマハー・ケイマ正大師、プンナ正悟師等と、このインドへ第一回目に来たときの話だが、彼らはわずか一週間の休みもやっとの思いで会社へお願いし、そして休むことができたと。

　君たちは、例えば今回のこのインドの修行の旅は、ある意味で本当に有暇、つまり自由な時間を楽しみ、その中で、経行、あるいは説法を聴き、あるいはインドの街を散策し、いろんなことをそこで学ぶと。当然、実践的な知識、あるいは

人とはどうあるべきか、あるいはどのような生き方をしたらいいか、どのような生き方をしたら幸福になるか等々の検討、これがしっかりと行なわれているはずである。

そして、これが一般のサマナ生活についてもいうことができる。例えば、ここにいる、S師のようにね、経理の専門家となるとちょっと話は違うが、一般の場合、師というものは記憶修習し、そしてあとは人間の分析、そして生の分析、あるいは死の分析、これを一生の課題として検討し、思索することができる。当然、この検討し、思索し、経験するという三つの段階において多くの利益を得るはずである。

それは、わたしたちがこの人間界に生まれ、そして生活するということは、結局死を理解し、そして真実の世界のすべてを理解し、修行し、その最も高い世界へと到達し、その高い世界からもっと高い世界へと到達するためのジャンプ台として、この人間の生を生きることがベストであると認識できるはずだからである。そして、今ここにいる人たちは、タントラヤーナのものの考え方やあるいはマハーヤー

ナのものの考え方について、多くの今回示唆を受けたはずである。

修行の第一歩、それは人とは何かと、そして自分に与えられた時間をどのように考え、どのように使うのかということである。

今日はね、ちょっと総論的な話から始まったが、まずここまでにして質問を受けましょう。

質問ないかな。じゃあ、なければ次にいこう。

◉五つの集まりの苦しみ〈五蘊無我〉

わたしたちを構成しているものは、五つの集まりがある。その五つの集まりとは、まず形状-容姿であると。この形状-容姿とは何かというと、わたしたちの身体、あるいは顔立ち等を含む、外的なものである。第二番目は感覚である。第三番目は表象、つまりイメージである。第四番目は意志である。それで、第五番目は識別である。この形状-容姿、感覚、表象、意志、識別、この五つを五蘊(ごうん)と呼んでいる。

そして、この五蘊の働きによって、わたしたちは苦楽を経験させせられている。別な言い方をするならば、この五蘊の中に、苦楽の源が存在しなければ、いかなる状況であろうとも、わたしたちに苦しみというものは存在しない。

では、それはどういうことだろうかと。例えば、生まれながらにして不具を経験すると。これは、形状-容姿の第一の苦である。いいかな。次に、身体が健康であったにかかわらず、その身体が、例えば老いや、病や、あるいは事故によって不具になる。これが第二の苦しみである。

次は感覚である。小さいときからもともとカルマが悪く、貧しい家に育ち、そしてものが食べられない。あるいは衣服にしても、あまりないがゆえに、寒さ暑さを経験しなければならない。これが感覚における第一の苦しみである。

第二の苦しみは、例えばいきなり殴りつけられることによって痛みを経験させられたり、あるいはいきなり冷たい場所に移動しなければならないことによって寒さを経験したり、あるいは今回のインドのように、暑い場所に移動しなければならないがゆえに暑さを経験するといった、そのものの苦しみである。

そして、第三番目の苦しみは、もともと備わっていた感覚が、例えば病気によってなくなる、例えば視覚がなくなったり、あるいは聴覚がなくなったり、あるいは嗅覚がなくなったりすると。これが、第三の苦しみである。

では、表象についてはどうだろうかと。これは、もともと、例えば暗い家に生存した場合、父母のケンカ、争い、あるいは父母ではなくても、兄弟の争いや、親族の争い等にいつも耳を傾けるがゆえに、イメージとしてそういう暗いイメージしか存在ない。これは、第一の苦しみである。

第二の苦しみは、もともと見たくないものや、聴きたくないもの、それを聴いたがために生起するイメージの苦しみである。

第三の苦しみは、今まで対象に対して、こうあってほしい、あるいはこうだろうなと思っていたものが、壊れ去るときの苦しみである。

では、意志についてはどうであろうか。意志については、まず前生からの引き継ぎによって挫折、挫折することによって卑屈を修習する苦しみが挙げられる。第二は、目標を設定し、その目標が達成できなかったときの苦しみである。そし


AUM

て第三の苦しみは、目標を達成した後もそれを維持しなければならない場合、それを維持することができなくなったときの苦しみである。

では、第五の識別はどうであろうかと。この識別については、例えば美しい醜い、例えば綺麗な声、あるいは綺麗な音、醜い声、醜い音と。あるいは、好きなにおい、嫌いなにおいと。あるいは、好きな味覚、嫌いな味覚と。あるいは、好きなフィーリング、好きな感覚、あるいは嫌いな感覚と。あるいはその法則が、あるいはそこのしきたりがね、好きである、嫌いであると。つまり、この識別の苦しみというのは、もともと二極化しているわけだから、必ず半分は苦しみであるということになる。

これが、わたしたちの五蘊である。ということは、よく検討してみるならば、この五蘊というものは、総じて苦であると。

◉四つの記憶修習述＜四念処＞

では、一体修行者は、この五蘊をどのようにしようとしてるのかと。まず、身

体に対して、しっかりと記憶修習すると。そして、この肉体が無常を根本としてできているものであると。この形状-容姿が無常を根本としてできているものであるから、それにとらわれるべきではないと記憶修習すると。これが第一番目に来るわたしたちの課題である。

次は、第二番目の苦しみ。これは、感覚そのものは苦、楽、不苦不楽という三つの要素があるわけだが、このどれにとらわれたとしても、わたしたちの苦しみというものは増大する。なぜならば、楽という感情の生起が強ければ強いほど、苦という感情の生起は強いんだと。楽という感情の生起が強ければ強いほど、苦という感情の生起は強いんだということがいえる。よって、第二番目の検討は、この一切の感覚、感覚というものに対してしっかりと検討し、この感覚から離れるということが第二番目の課題になってくる。

第三番目のわたしたちの心を構成しているもの、それはイメージや、あるいは意志といったようなものだがね、このようなイメージや意志といったようなものは、これは無常を根本としている。先程も述べたとおり、例えば特定の対象に対

して、こうあってほしい、あるいはこうあるべきだ、あるいはこうだというふうに断定的にとらえたとしても、相手の心は無常であるから、当然そこには変化が生じる。

よって、三番目の記憶修習述は、心は変化するものである、よってそこには依処は存在しないと。これが、第三番目の記憶修習述である。

次は、第四番目であると。第四番目は、わたしたちが識別をしっかりなさなければならない対象である、法則である。この宇宙の法則そのものは、すべては苦しみを生起させるための法則である。

例えば、例を挙げよう。この地球にしろ、宇宙にしろ、必ず破壊される。よって、この地球や宇宙に執着していることは、いずれ破壊を招くわけだから苦であると。あるいは、それは戯忘の天界にしろ、憤怒の天界にしろ、神聖天界にしろ、同じように破壊される。よって、そこにとらわれることは、やはり苦しみである。

あるいは、妻や子供に対して愛着すること、ね、まあ一般的には、道徳的には、倫理の観点からいくと、それは素晴らしいことになっているが、しかしそれも、

例えば子供は巣立ち、例えば妻の心というものは、必ず変化する。これは夫も同じだと。よって、その法則も苦しみであると。あるいは、父母はどうであろうかと。父母も同じように愛着すればするほど、父母が亡くなったとき大きな苦しみを受けなければならないと。

このような形で、社会的な一つ一つの法則に対して検討を加える。検討を加えることによって、それが苦であり、自己本来のものではないことを理解すると。

◉二正勤二正断＜四正断＞

ここまで修行が進んでくると、では一体、そういう世界ではない世界へ生まれ変わるためには何を実践したらいいんだということになる。

そうかと。今少なくとも人間の世界より、憤怒天や、あるいは戯忘天の世界の方が、幸せは多いはずであると。憤怒天や戯忘天よりも、もう少し高い、例えば神聖天の方が幸福は多いはずである。例えば、神聖天の世界より、光音天の世界の方がもっと幸せは多いはずであると。光音天の世界より、総美天の世界の方が

もっと幸福は多いはずであると。あるいは、それよりも、広果天や無熱天や色究竟天の方がもっと幸福は多いはずであると。

じゃあ、そのためには何をなすんだと。それは、善法を増大させ、悪法を減少させることである。

では、善法を増大させるとは何かと。これは、今まだなすことのできない功徳に対して、一生懸命その功徳がなせますようにと思念し続けると。第二番目は、それによって得た結果、しっかりと功徳の実践を行なう、あるいは今なせる功徳の実践を行なうと。

今、断ずることのできない不善の法に対して、それを捨断しようと心に思念すると。それが捨断できなくても、捨断しようと心に思念すると。そして、今できる悪法に対してはしっかりと捨断すると。

これを行なうことによって、先程述べた五つの蘊、五蘊の要素が少しずつ変化し、そして善法は増大し、悪法は減少し、その五蘊はどんどんピュリファイな状態になるわけだね。

◉五つのポテンシャルと力〈五根五力〉

では、これでいいのかという問題が次は出てくる。いや、これは、確かに高い世界へ次の生導いてくれるだろうと。しかし、これはあくまでも次の生高い世界へ導いてくれるのであって、その次の保証はないぞ。そこからジャンプするためにはどうしたらいいのかと。いや、それは、やはり広大な真理の体系、そして絶対的な自由・幸福・歓喜を与えてくれる真理の体系に対して、しっかりと縁をつくることであると。

では、しっかりと縁をつくるとはどういうことかと。それは、まず第一に信の土台、ポテンシャルをつくることであると。そして、次の生も、その次の生から次の生へ転生するときも、そのポテンシャルの力によって、しっかり転生できるぐらいの土台固めをしようじゃないかと、ね。

次は、その得た信、この信を帰依に変え、そして、その教えをできるだけ実践すると、努力すると、ね。そして、その教えを学び、検討し、努力するだけではなくて、教えを繰り返し繰り返し記憶修習すると。そして、記憶修習した後に記

憶実践すると、ね。おそらく今生では、その中の一部しか表現することはできないであろう。しかし、一部しか表現することはできないとしても、そこに培われている土台というものは莫大なものであるから、次の生も当然、その土台によってまた真理と巡り合い、真理の記憶修習、記憶実践ができ、そして、自分の道を誤らないはずであると。ね。

そして次には、その記憶修習、記憶実践したものを土台として毎日しっかり思索し、そして最終的にはその思索のない状態でいろんな世界を経験し、あるいはいろんな考え方を経験し、自分の視野を広めようじゃないかと。

では、例えばわたしたちは日本からインドへ来たとしても、それはわずかに人間界と動物界を検討することしかできない。しかし、サマディに入ることによって、わたしたちは、例えば地獄、動物、餓鬼、それから憤怒天、戯忘天、神聖天、あるいは神聖天以上の世界を検討することができるはずである。

そこで生じたいろいろな智慧を土台として、自分の人生をはっきりと決定しようじゃないかと、ね。この段階では、ある程度の神秘的な力が備わり出します。

それは帰依による力であるか、あるいは精進による力であるか、あるいは記憶修習による力であるか、あるいはサマディによる力であるか、あるいは智慧による力であるかは、ね、それは諸君の努力次第である。

◉七つの覚醒部分〈七覚支〉

そして、次の段階で覚支の実践に入っていく。この七つの覚醒部分の実践とは何かというと、これはよりいっそう自分たちの目覚めつつある覚醒状態をはっきりと確定させていくための修行である。例えば、それはどういうことかというと、ちょうどこの前に行なっている、五つのポテンシャルおよび五つの力というものは、覚醒のドアをちょっと開いた段階に相当する。

よって、これを完全な形で開くためには、七つの覚醒部分の修行に入らなければならない。それは、その覚醒そのものが自分自身を駄目にする、あるいは自分自身をなくすのではなく、自分の本質的な部分に到達するんだということをしっかりと認識した上で行なわなければならない。

では、まず何を行なうのかと、ね。それは、まず、しっかりと覚醒に対する記憶修習の徹底であると。今まで行なってきたのは、智慧に到達するための記憶修習であったと。

しかし、次に行なうのはそうではなく、完全なる覚醒に至るための記憶修習であると。そして、その場、その時間、あるいは条件に合わせて、どのダンマを実践するのかと。どの法則によって、どのダンマを実践するのかということをしっかりと理解しなければならない。

例えば、例を挙げるならばリトリート修行、つまり独房修行のときには、それに合ったダルマを実践しなければならないし、あるいはこのような外的なものを分析する旅に至ったときには、それに合ったダルマを実践しなければならない。あるいは、在家の場合は在家に合ったダルマを実践し、出家の場合、出家に合ったダルマを実践しなければならない。あるいは、ステージに応じてもダルマを変化させなければならない。

よって、ダルマというものは多く知ってなければならないし、それから多く定

着させておかなければならない。これが二番目の覚醒部分の要素である。
そして第三番目の覚醒部分は、その決めたダルマに対して徹底的に努力すると。
いかなることがあっても努力すると思い、それを実践することである。
そして第四番目は、それを実践するとき、必ず実践する前に大いに喜び、実践しながら喜び、実践が終わった後も、またやるぞと喜ぶと。特に、この四番目は大切なわけだね。なぜ大切かというと、その覚醒しかかっているドアを完全に開くのか、あるいは閉じてしまうのかは、この四番目、五番目で決まってしまうからである。そこにもし喜びの修行というものがなければ、当然それを恐怖のあまり閉めてしまうだろう。しかし、この喜びの修行がしっかり定着していれば、それをしっかり開くはずである。
そして、ここまで来ると、次はわたしたちのナーディーのしっかりした浄化、そして覚醒を安定させるという修行に入っていく。
そして、このナーディーの浄化、覚醒を安定させる修行に入ると、おのずと第四のサマディに入り、そして空無辺、識別無辺、無所有境、そして非認知非非認

知境、そして経験の滅尽境へと心は向かうはずである。
そこでなされているサマディにおいて、一切頓着してはいけないし、それから恐怖をしてもならない。これは、自然と経験させられていくプロセスだからである。

◉八つの聖なる段階〈八正道〉

この実践を行ないながら、この実践がある程度形がはまってくると、日々の生活は八つの聖なる段階、あるいは十の聖なる段階へという道へ入っていく。
これはどういうことかというと、一切の諸現象をまず教学によって検討すると。まず教学し、教学によって検討し、それ以外の会話、行動、あるいは心の働きを完全に止滅しようと努力すると。
そして、言葉については、妄語、綺語、悪口、両舌を完全に離れ、人に対して四つの無量心を背景とした言葉を話す訓練が始まってくる。言い方を換えるなら、最後の聖なる八支の実践段階というのは何かというと、仏陀としてのフォームを

形づくると。あるいは、供養値魂としてのフォームを形づくる段階である。だれが見ても、あの人の言葉は素晴らしいと、そういうような実践に入っていく。そして、次には、だれが見ても、あの人の行為は素晴らしいという段階へ入っていく。もちろん、このときには、すべての魂に対する哀れみ、殺生を離れると。盗みをしないと。盗みをしないだけではなくて、要するに与えられたもので満足すると。そして、よこしまな性的な交わりをしないと。

この四つ目の段階が達成した後、一日中すべて仏陀としてのフォームを形成する形になってくる。あるいは、供養値魂としてのフォームを形成する形になってくる。だれが見ても立派であると。だれが見ても素晴らしいと。そういう形を形成していくわけである。これが、第五番目の段階である。

そして、涅槃（ねはん）しがちになる自己の意識を叩きながら、よりいっそう努力をし、すべての衆生のために自己がここに存在し、そしてすべての衆生のために真理の実践を行なうんだということを心に思念し続けながら、第六番目が始まる。

そして、第七番目は、よりいっそう高い記憶修習の段階である。つまり、サマ

ディとは何か、あるいは世界とは何か、あるいは止滅とは何かといったようなね、最後の最も高い記憶修習の段階に入り、そしてそれに基づいてサマディに入ると。当然、それに基づいてサマディに入ることによって、正しい精通が生じてくる。つまり、一般的にいわれている仏典の中に、ね、サキャ神賢のお説きにならなかった仏典がたくさんある。そのならなかった仏典というものは、わたしたちに害を与えるものであると。サキャ神賢のお説きになった仏典は、わたしたちに利益を与えるものであると。

そして、例えば、やれ仏教だ、やれヒンドゥー教だ、やれヨーガだといっているけども、その本質的な部分は変わらないと。しかし、その本質をとらえている人は皆無に等しいと。こういう精通が生じてくるはずである。

そして、その精通によって、離解脱すると。

ここまで完全に離解脱したならば、次は自分自身がどのようなタイプの仏陀として、本格的な救済を始めるかのフォームが形成されてくる。これが四つの如意である。

まずそのためには、自分自身はこのような救済者となろうという形の決意が生じてくる。決意の如意が生じてくる。そして次は、それに基づいて努力を始めると。つまり精進の如意である。そして、それを日々集中し続け、完全に確定させると。これが、心の如意であると。そして最終的には、自己の今の状態と目的とのギャップを検討しながら、しっかりと思索し、観慧（かんえ）によって完成させると。これは、第四番目の観慧の如意である。

そして、これをもって三十七菩提道品（さんじゅうしちぼだいどうほん）という。

そしてね、最後にちょっと付け加えておきたいのは、消極的実践イコール四つの記憶修習述。そして、中程度の積極的実践、イコール二正勤二正断（にしょうごんにしょうだん）と。それから、積極的確立、これが五つのポテンシャルと五つの力と。それから、覚醒への確定、これが七つの覚醒部分と。衆生と交わり、成就者としてのフォームを形成する、これが聖なる八支の段階、あるいは聖なる十の段階と。完璧なるタントラ、あるいはマハーヤーナの仏陀としてのフォームの完成、イコール四つの如意である。

質問があったら受けよう。

◉失敗のない順番

（質問者A）ということは、三十七道品はこの順番で行なうというのが正しいんでしょうか。

（尊師）そう、ただ前生からの経験があるから、一概にその順番で行なわなければならないとはいえないけども、一応はその順番で行なえば失敗はないと。

（質問者A）ああ、そうですか。じゃあ、自分がどれから行なうかというのも、それはグルの判断しかない……。

（尊師）そうだね、ただ今生のけがれがあるから、やはりまあ四念処から行なった方が、四つの記憶修習述から行なった方が無難は無難だと思うけどね。

（質問者A）そうですか。はいわかりました。ありがとうございます。

◉記憶修習述の四番目

（質問者Ｂ）　四つの記憶修習といいますか、いわゆる四念処の四番目で、識別の対象となる法則というお言葉から入っていかれて、地球、宇宙、まあ子供に執着することなどの例を挙げて、それは苦であるという話があったんですが、これは尊師のご著書にある「法は無我なり」のことを違った表現でいわれているのか……。

（尊師）　そうです。それを深く突っ込んでいるわけだね。

（質問者Ｂ）　四念処を全体的に見ると、まず自分の体、そして感覚、そして心と入っていって、で、外的な、例えば存在、妻、子供、そういうものの体、感覚、そして心とか、またそれに対しての自分との関係みたいなものも、全部四番目で考えるわけでしょうか。

（尊師）　いや、そうではない。一番目は一番目。外的条件については四番目で考えたらいいと思います。そうだね、外的条件については四番目で検討したらいいと思います。ただ、心の問題については三番目でも検討できると思うけどね。

（質問者Ｂ）　わたしが四番目で、ずっとイメージしていたものは、尊師から昔教

えられたイメージというものは、諸々の観念は我のものではなく、すなわち、例えば社会通念とか法規とかそういうものが人間を縛りつけているけども、それは正しい道に導かないものであるというような、イメージにすごく……。

(尊師) いや、それもそうです。それもその中に入ります。

(質問者B) 例えば、妻や子供に執着することはいいことなんだというか、その愛情家族とかいっているようなことが社会通念であるということを尊師はイメージされているわけですか。

(尊師) そうです。

(質問者B) わかりました。

(尊師) 例えばね、四番目を記憶修習述で、法則は無我であると。しかし、もし法則が自分に楽を与えてくれるものだったら、それは無我ではなくて我の方がいいわけでしょ。

(質問者B) あれは、確か法則というか、諸々の観念は真我の所有物ではないというような……。



（尊師）そのとおりです。

（質問者B）諸々の観念は真我の所有物ではないというような表現でしたら、その真我に到達するための法則であるということが真我の所有物である、そういうふうに考えられないんじゃないかと。

（尊師）まあそれは、結局欲をもって、まあ決意をもって、つまり心の働きを利用して解脱に到達するということと同じ方便だと思うわけだけど。

（質問者B）はい。

（尊師）もう、それのみが許されるということだよね。

（質問者B）はい、それはそれでいいと思います。

（尊師）でも、その法則というのは、今度は宇宙の法則、その他の法則から外れるわけだよね。

（質問者B）宇宙の法則といわれているのは。

（尊師）解脱していく場合の法則と、それからこの宇宙を形成している法則とは、逆向きのベクトルだと思う……。

（質問者B）ああ、それはわかります。つまり、あの十二縁起の下に落ちる法則と、逆に戻る法則と……。

（尊師）そうです。

◉記憶修習の二つの段階

（質問者C）今までわたしは、七科三十七道品というものは、まあ例えば同じ記憶修習とかいくつか出てきまして、以前の先生の説法とかから考えますと、それぞれがこうダブっていて、そして、まあ釈迦牟尼の仏典でも、例えばある者には七覚支だけを説き、ある者には五根五力だけを説きと、そういうことがあって、順番に並んでいるものというとらえ方をしていなかったんですけれども、その点はどのように考えたらいいでしょうか。

（尊師）まず、ある者には五根五力を説き、ある者には四念処を説き、ある者には七覚支を説きは正しいです。というのはどういうことかというと、例えば、一生でどこまでいくかという問題があるわけだよね。わかるよね、それは。

だから、例えばある人は四念処でその生終わるかもしれない。ある人は、例えば五つのポテンシャルと五つの力で終わるかもしれないよね。

それからもう一つは、そういう記憶修習の段階というのは、同じものを繰り返しなす場合と、それから逆にジャンプさせる場合と二通りあるから、その記憶修習、まあ各段階で記憶修習というのが載っているからということによって、すべてが別だと考えるべきではないね。同じ部分もあるし、別の部分もあると。

それは、例えば経典の内容なんか見ていけばよくわかるはずである。例えば、五根のときに出てくる内容と、例えば四念処のときに出てくる内容と、共通性があるとかね。そこのところは、連続した修行体系だから、角度を変えて修行をとらえているということもできるし、あるいは段階的な修行であるということもできるわけだよね。

で、わたしとしては、君たちに対してできるだけ夢を失わせないように、ちょっと引っ張っているわけだよ。例えばそれはどういうことかというと、最後の修行

はこうだよという話をしたら、おそらくみんなうんざりするというか、何だ全然終わんないじゃないかと。

君たちはインスタントラーメンに慣れているから、三分間でできるはずなのに、それが例えば三日もかかってやっとスープしかできないのかというのと同じでね、俺たちそんなに待ってられないよと。これが日本人だと思うんだよ。

だから、その場合はまあ方便によって、例えば氷というものを表現する場合、氷は透明なんだよと、綺麗なんだよという話だけしておくと。で、ある段階でついてきた人たちに対して、実は氷は冷たいんだという話をするというテクニックは使わせてもらっているよね。今からも使っていくだろう、これは。だから、Sの今の質問は、まさにその状態に引っかかっているということだと思いますね、わたしは。

◆ルンビニーにて

「三つのポアと無頓着と放棄」

（一九九一年六月三日）

◉肯定・無視・否定のポア

三つのポアがある。三つのポアとは何であろうか。第一は肯定であり、第二は無視である。第三は否定である。

では、第一の肯定とは何であろうか。これは、自分の心に浮き上がってくる、例えば、邪悪心や、あるいは嫉妬や、あるいは迷妄や、あるいは愛著といったようなものに対して、しっかりと法に基づき思索し、それを分析し、そして壊滅する。これが、最高のポアの法である。

では、第二のポアの法とは何であろうか。これは、浮いてきた邪悪心、あるい

は嫉妬や、あるいは愛著や、あるいは迷妄に対して、それを放棄し、そして自己のなすべきことに集中する。なすべきことに集中するがゆえに、徐々に自分自身の意識は、高い世界へ誘われ、放棄できなかった対象に対して、放棄できるようになる。これが、第二番目の中位のポアの方法である。

では、第三番目の最も劣ったポアとは何であろうかと。これは、対象を認識することすらできない。つまり、自分自身の心がその中に没入している場合、それをひたすら否定し続ける。否定し続けるがゆえに、その心は少しずつ少しずつ傷を癒すという形になる。そして、気が付くときには、その煩悩の生起、それと同時に否定の生起が生じる。つまり、傷と同時に、薬が生起すると。これが、第三番目の劣ったポアである。

もちろん、第一のポアを最高のポアといい、第二のポアを中位のポアといい、そして三番目のポアが最下位のポアであるといえる。

◉所有は苦、放棄は楽

君たちに、もう一つわたしはお話をしたいことがある。実は、経典の中に「マハー・ゴーヴィンダ経」というのがあって、これは実際サキャ神賢の前生の話だが、このサキャ神賢の前生において、サキャ神賢がマントリカ、つまりマントラ修行者であったという話が出ている。そして、彼は神聖天のアドバイスにより心を静める出家修行に入り、そして、神聖天へと多くの者を誘い、自分自身もその世界へと至ったということが記されている。

ここで、君たちにお話ししたいことは、わたしが述べていた、小乗、大乗、タントラ・ヴァジラヤーナの乗、そして無上最上の乗というものは、やはり、その順位に存在し、そして、その一つ一つを必ずクリアしていかなければならないんだということである。この部分をしっかり証智して、修行に励むようにしてほしい。

それから、もう一つ。君たちに無頓着と放棄の話をしたいと思う。一体、無頓着、あるいは放棄というのは、何ゆえに実践しなければならないのだろうか。無

頓着、放棄の実践の意味合いは、自分自身の状態をチェックし、そして本当に自分自身がその地点に到達しているのかどうかの確認が含まれている。

例えばここに、わたしは他心通があると言葉の上において言った人がいたとしよう。もし、その人が、他心通があれば本当に相手の心がわかるはずだし、あるいは、他心通がなければわからないはずである。

これと同じように、例えば、わたしは貪りがないと考えた人がいたとしよう。しかし、その人の前に食事が出され、その食事にがっつくと。あるいは、もっと食べたいと欲求すると。これはどうだろうか、君たち。この人は、貪りがないといえるだろうか。それとも、貪りがあるといえるだろうか。いかに綺麗な言葉を語ったとしても、この人は貪りがある。よって、逆に、その人を食のない状態に放り込む、あるいは食の取れない状態に放り込んだとき、その人の心がどうなるか。あるいは、その人の態度がどうなるか。それを検討すればよろしい。

そして、この放棄の修行というものは、実は、この欲六界の低位であればあるほど、粗雑な物質で構成されている。特に鉄のように、堅い物質で構成されてい

る。そして動物は、わたしたちと違い、もう一枚、皮、毛という皮を生じている。そしてわたしたちは、神々と違い、この肉で構成された身体を持っている。神々は、これよりもより微細な身体を持ち、そして欲望天界の神々は神聖天界の神々の微細な身体を見ることすらできない。

つまり、これらの段階において何が必要なのかというと、それは放棄である。もし放棄をしなければ、いくら修行したとしても神聖天へ到達することはできないし、当然、超越童子天、つまりアカニシタ天へ到達することもできない。

そして最終的に、その微細な身体すら放棄した段階でわたしたちは空無辺の境地に入り、そして識別無辺の境地に入り、その意識すら放棄した段階でわたしたちは無所有の境地に入る。そして、その無所有であるということ、その境地すら放棄した段階で、わたしたちは非認知非非認知の境地に入る。

その、認知しない認知している、これを放棄した段階でわたしたちは完全なる経験の滅尽に入る。そして、経験の滅尽の状態に入った段階で煩悩が完全に崩壊され、わたしたちはマハー・ボーディ・ニルヴァーナ、完全なる菩提のニルヴァー

ナ、完全なる菩提の煩悩破壊へと到達することができるわけである。
よって、君たちは証智しなければならない。所有は粗雑なものを生起させるということである。そして、不所有は微細なものを生起させるということである。そして生に対するとらわれは、微細な生命、少なくとも五千カルパの生命しか存在しないということである。
そして、微細な身体を放棄した段階で、わたしたちは、二万カルパ、四万カルパ、六万カルパの長きにわたり、生存を得ることができる。そして、その識別、意識すら放棄した段階で、わたしたちは、不変、完全なる自由・幸福・歓喜を得ることができるわけである。
所有は苦である。そして、放棄は楽である。放棄しなさい。いいね。

◆パトナにて――その一

「不所有の素晴らしさ」

（一九九一年六月四日）

◉修行者に対する訓戒

この人間の世界で、百五十歳まで生きることは、なかなか大変なことである。もし、この人間の世界で、百五十歳まで生きた者がいたとして、その者がこう考えたとしたら、君たちはどう考えるだろうか。

「わたしは、人間として百五十歳まで生きることができた。よって、わたしは満足である。なぜならば、最も長くこの人間の世界を経験できたからである」と。

もし、その経験が、人間の世界にとどまるものであるとするならば、当然、それは正しいといわなければならない。しかし、もし彼が不飲酒天を知り、あるい

はガンダッパを知り、あるいはナーガを知り、あるいは他の三十三天を知り、あるいは夜摩天を知り、あるいは他の天界を知っているならば、こう考えるであろう。

「わたしは、百五十歳まで生きることができた。しかし、それは、神々の寿命に置き換えるならば瞬間である」と。

では、ここでポイントになるのは一体何だろうか。それは、神々を証智するだけの、その人に功徳が存在しているかである。あるいは、神々の世界を認知するための功徳がその人に存在しているかである。

では、神々を認知するための功徳とは何であろうか。それは、出家修行者においては奉仕であり、そして戒律の遵守（じゅんしゅ）であり、忍辱（にんにく）である。在家修行者においては何が必要であろうか。それは、布施であり、奉仕であり、持戒であり、あるいは忍辱である。そして、しっかりとサマディに入り、神聖天、超越童子天までの形状界、あるいは空無辺から非認知非非認知に至る非形状界の認識を、しっかりサマディによってなすならば、その人の生き方は、おのずと変わってくるはずで

ある。

君たちが、戒律の意味合い、戒律の遵守、サマディの意味合い、サマディの完成、智慧の意味合い、智慧の達成、そして離解脱へと到達することができたならば、こう考えるはずである。

「わたしはすべてを知った。わたしは如実に知見した。よって、わたしは、この世の中の仕組みが、苦を根本としているものであり、それを超越するためには、真理の実践しかなく、そして、この世の価値観すべてが、全くわたしに利益をもたらさないものである。」

ということを認識できるはずである。

よって、君たちはしっかり戒を守りなさい。サマディを守りなさい。そして、智慧へと到達し、しっかりと離解脱の境地を認識しなさい。これが、わたしたちが与える、修行者に対する訓戒である。

◉所有を超越する

　では次に、形状界や、あるいは非形状界へ到達するためには何が必要だろうかと。これは、所有を完全に超越することが必要である。
　では、所有を超越するとはどういう意味合いだろうか。例えば、ここにベンツに乗っている者がいたとして、そのベンツが壊れたと。車がなくなったと。別にベンツに乗らなくても、ワークに支障がないと。彼はこう考えたと。ベンツが駄目なら、今度はクラウンだと。クラウンが駄目なら、今度はスカイラインだと。スカイラインが駄目なら、次はブルーバードだと。
　このような形で、車のランクをどんどんどんどん落としていったとしよう。車を所有するカルマがなくなって、彼は、次はじゃあバイクだと、バイクを同じように使ったとしよう。バイクを使うカルマがなくなって、次は自転車だと。で、彼はこう考えた。わたしは、以前はベンツに乗っていた。しかし、今は自転車にも乗ることができない。
　もう一人修行者がいて、初めはベンツに乗っていたと。ところが、これが、べ

ンツが壊れた段階で彼は考えたと。別に、車は乗る必要のものではないと。わたしは、今車に乗るワークをしているわけではないと。よって、わたしは歩こうと。そして、歩くことによって、第三の心臓は強まり、よりいっそう肉体は強化されるはずであると。この、車のない状態を、わたしは最高の喜びとしようと。

修行者である君たちはどう考えるだろうか。この前者と後者は、同じ現象を経験しているにかかわらず、前者は憂いの集積、心において憂いや、あるいは悲しみや、あるいは嫉妬の集積を当然味わうはずである。ところが後者の修行者は、五蘊において、まず形状-容姿が強くなり、そして感覚が強くなり、意志が強くなり、そして識別において喜びが集積されるはずである。

ということは、ベンツに乗っていようが、あるいは歩いていようが、その人が心においてどのように現象をとらえるかによって、すべての結果は違うはずである。

そして、わたしたちは死というものを境に、すべての環境から離れなければならない。例えば、愛する者がいたとしても、あるいは憎む相手がいたとしても、

あるいは愛するものがあったとしても、あるいは嫌悪する対象があったとしても、すべてから離れなければならない。

そして、愛著から離れることは、同時に苦しみ、嫌な蘊から離れることになる。そして、ここでいう離れるとは物理的な現象を指しているのではない。心の現象を指しているのである。よって、日ごろ、頭陀に徹しなさい。心を頭陀に集中しなさい。そして、所有しないことの訓練を始めなさい。

では、なぜ所有しないことの方が素晴らしいんだろう。先程述べたとおり、五蘊の形成は、当然所有しないことの方が素晴らしい。それだけではなくて、例えば車に執着している者が死んだとしよう。そうすると、次は車のあるところへ転生するだろう。例えば、嫌悪のあるものを残しながら死んだとしよう。その人は嫌悪の対象を追っかけて転生し、地獄へ落ちるだろう。あるいは、愛著しているものがいたとして、愛著の対象が正しくなければ、当然正しくない世界へ転生するだろう。このように、転生を誤るのである。

そして、この人生における失敗は、例えば今君たちが、最も、例えば若い者で

ウマー・パールヴァティー・アーチャリーの八歳と。八十歳まで生きたとしても、七十二年間のミスデシジョンを、積んでしまうと。ところが、もし輪廻転生に失敗するならば、何千カルパ、あるいは何億カルパ、短い場合でも、例えばいったん動物界に落ちたとしても、その動物界からはい上がることはできない。よって、何万年、何十万年と苦しまなければならない。

よって、頭陀に徹しなさい。記憶修習に徹しなさい。そして、不所有の素晴らしさを認知しなさい。いいね。

◆パトナにて——その二

「四つの記憶修習述」

（一九九一年六月四日）

わたしたちは、四つの記憶修習述を実践しなければならない。それはなぜであろうか。この四つの記憶修習述そのものは、わたしたちをこの現世から出離させ、そして解脱へと導くからである。では、何をもって解脱とするのか。それは、まずこの人間界の五感を超越した段階、これをもって第一の解脱と考えればよろしい。

そのためには、何の実践をなせばいいのだろうか。それが、四つの記憶修習述である。まず、この身体について、十分に観察し、そしてこの身体というものは、もともと苦の集積である。この肉体にとらわれることそのものが、わたしたちを

苦しめるだけである。そして、わたしたちがもっと別の身体、つまり変化身に心が移ったとき、憂いと悲しみ、苦しみが、調御できる。

次に、感覚について同じように記憶修習を行なう。感覚において記憶修習を行なうことによって、このわたしたちの五感のとらわれそのものが幻影であることに気づく。そして内側の、心の本性に実際はその感覚の源があり、そこではもっとピュアな、純粋な感覚を持っているんだということに気づく。しかも、それは無常ではない。

次は、心について検討を加える。この心というものは、絶えず変化するものだが、それはあくまでも表層の心であって、潜在の心というものはもっと変化しない。そしてそれだけじゃなくて、それよりもっと深い自己の本質というものは全く変化せず、それはわたしたち自身を絶対的自由や幸福や歓喜の状態へといざなってくれる。

そして、諸現象の法則、観念について検討する。この観念そのものはその観念に慣れれば一見楽だが、この観念に慣れることは死というものを境に大きなチェ

ンジをしなければならない。よって、ここでわたしたちは、しっかりとその観念の流れを理解し、それが自分自身でないことを悟ると。
その四つの記憶修習述を実践することによって、わたしたちは、変化身や普遍的な感覚、そして普遍的な心、一切束縛されない宇宙の原則、あるいは宇宙を超えた原則というものを身につけることができよう。これが、四つの記憶修習述である。
そして、この変化身の体験を徐々に高い世界へ至らせるためには、大乗の修行の基礎である二正勤二正断の実践に入る。まず、今なすことのできない善法に対して絶えず記憶修習し、そして実践できるよう努力する。次に、今なせる善行に対してひたすら努力をし続けると。そして、今まだ捨断できないカルマについてはひたすら記憶修習を行ない、そして、そのカルマが捨断できるように努めると。そして、今捨断できるカルマについては、あっさりと捨断してしまうと。
この二正勤二正断の実践によって、大乗の入口である、善の集積、そして悪業の断滅へと至ることができる。

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界→愛欲界

無間地獄→超期間激苦地獄

叫喚地獄→号叫激苦地獄

鉢特摩地獄→紅蓮華のような状態になる激苦地獄

阿修羅→不飲酒天

憤怒天→意識堕落天

戯忘天→戯れ堕落天

地居天→地上愛欲神天

四天王衆天→四大王天

持国天→堅固王国天

増長天→成長天

広目天→統治変化自在天空天

毘沙門天、多聞天→守庶民外傷天

夜叉→人食い鬼神

忉利天→三十三天

帝釈天→有能神

夜摩天→支配流転双生児天

閻魔王→支配流転双生児王

兜率天→除冷淡天

楽変化天、化楽天→創造満足天

他化自在天→為他神以神通創造欲望満足
従事天

悪魔→破滅天

色界→形状界

梵天→神聖天

梵衆天→神聖衆愛欲神天

梵輔天→神聖臣天

大梵天→大神聖天

浄天→美天

遍浄天→総美愛欲本質神天

広果天→偉大果報愛欲本質神天

浄居天→清潔居住天

無煩天→超空間愛欲神天

無熱天→超燃焼愛欲神天

善現天→善安楽愛欲神天

善見天→善現象愛欲神天

色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界

空無辺処→空間無辺境

識無辺処→識別無辺境

無所有処→無所有境

非想非非想処→非認知非非認知境

想受滅→認知経験滅尽

須弥山→完全無欠山

東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸

南贍部洲、閻浮提→南のバラリンゴの大陸

西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸

成劫→再生期
住劫→継続期
壊劫→還元期

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者
善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）

調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）
菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟
声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
沙弥→少年出家者
遊行者→托鉢修行者

バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷
四双八輩→四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々
預流→真理の流れに入ること
一来→（愛欲界に）一度だけ再生すること
不還→不還（変更なし）
阿羅漢→供養値魂
四預流支→四つの真理の流れに入る段階

四聖諦→四つの絶対的真理
苦聖諦→苦しみの絶対的真理
集聖諦→苦しみの生起の絶対的真理
滅聖諦→苦しみの滅尽の絶対的真理
道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の絶対的真理
四念処→四つの記憶修習述
四正断→二正断二正勤
断断→現在悪業断
律儀断→未来悪業断
修断→現在善業勤
随護断→未来善業勤

四如意足→四つの如意の基礎
欲如意足→決意如意の基礎
精進如意足→精進如意の基礎
心如意足→思念如意の基礎
観如意足→観慧如意の基礎

五根→五つの潜在性
信根→信の潜在性
精進根→精進の潜在性
念根→記憶修習の潜在性
定根→サマディの潜在性
慧根→智慧の潜在性

五力→五つの能力
信力→信の能力
精進力→精進の能力
念力→記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力→智慧の能力

七覚支→七つの覚醒段階
念覚支→記憶修習覚醒段階
択法覚支→検討覚醒段階
精進覚支→精進覚醒段階
喜覚支→喜覚醒段階
軽安覚支→静寂覚醒段階
定覚支→サマディ覚醒段階
捨覚支→無頓着覚醒段階

八正道→聖なる八段階の道
正見→正見解
正思惟→正思惟（変更なし）
正語→正語（変更なし）
正業→正行為
正命→正生活
正精進→正奮闘
正念→正記憶修習
正定→正サマディ

三苦→三つの苦しみ
苦苦→苦苦（変更なし）
行苦→悪い構成要素の苦しみ
壊苦→悪化の苦しみ

三受→三つの感覚
楽受→楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受→不苦不楽の感覚

四無量心→四無量心（変更なし）
慈→慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状-容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積

行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の興奮による障害
瞋恚蓋→害心による障害
惛眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉挙蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状・容姿
声→声（変更なし）
香→香り
味→味（変更なし）

触→接触

五下分結→五つの下位に結び付けるきずな
有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒誓のとらわれ
貪欲→愛欲の興奮
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結び付けるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

八解脱(はちげだつ)→八離解脱(はちりげだつ)
八勝処(はっしょうしょ)→八勝境(はっしょうきょう)
十遍処(じゅっぺんしょ)→十全境(じゅうぜんきょう)
十波羅蜜(じゅっぱらみつ)→十(じゅう)の徹底(てってい)
十二縁起(じゅうにえんぎ)の法(ほう)→十二(じゅうに)の条件生起(じょうけんせいき)の段階(だんかい)
無明(むみょう)→非神秘力(ひしんぴりょく)
行(ぎょう)→経験(けいけん)の構成(こうせい)
識(しき)→識別(しきべつ)
名色(みょうしき)→心(こころ)の要素(ようそ)-形状(けいじょう)-容姿(ようし)
六処(りくしょ)→六(むっ)つの感覚要素(かんかくようそ)と対象(たいしょう)
触(そく)→接触(せっしょく)
受(じゅ)→感覚(かんかく)
愛(あい)→渇愛(かつあい)
取(しゅ)→とらわれ

有(う)→生存(せいぞん)
生(せい)→出生(しゅっせい)
苦(く)→苦(くる)しみ
信(しん)→信(しん)（変更なし）
悦(えつ)→歓喜(かんき)
喜(き)→喜(き)（変更なし）
軽安(きょうあん)→静寂(せいじゃく)
楽(らく)→楽(らく)（変更なし）
三昧(さんまい)→サマディ
如実知見(にょじつちけん)→如実精通見解(にょじつせいつうけんかい)
遠離(おんり)→現世否定(げんせひてい)
離貪(りとん)→離愛著(りあいじゃく)
解脱(げだつ)→離解脱(りげだつ)

涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→減少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃→形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊
一種者→一種者（変更なし）
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者

正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱
殺生→殺生（変更なし）
偸盗→窃盗
邪淫→愛欲における邪悪な行為
妄語→虚言
綺語→軽薄語
悪口→悪口（変更なし）
両舌→中傷
貪→愛著
瞋→邪悪心
癡→迷妄

愁→不運な出来事
悲→悲嘆
苦→苦しみ
憂→激痛
悩→悩み

五趣→五つの方向
善趣→幸福に向かうこと
悪趣→悲痛に向かうこと

カルマ→要素の蓄積
法→法則
梵行→神聖行
布薩→戒誓行
波羅提木叉→約束維持解放

頭陀→断修行障礙
袈裟衣→赤っぽい黄色の衣
衆生→生命体
四大種→四大元素
本生経→輪廻転生談

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス

仏陀の智慧が光を放ち混迷の時代を照射する

INITIATION

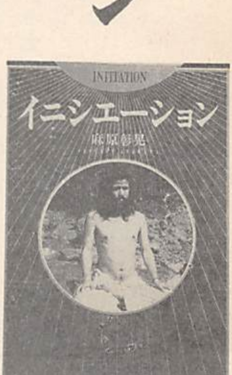
イニシエーション

麻原彰晃著

この名著はすべてを語っていた！

「解脱」「悟り」のプロセスを細やかに説き明かし、
最高の修行法を伝授する。
本来、選ばれた弟子にのみ明かされる秘儀——
ヨーガ・仏教の奥儀を極めた修行の正しさは、
誕生した三五〇名の解脱者が証明する。
さらに、自民党の大勝と大敗、円高の進行、
農作物輸入自由化など、
今日の世界と日本の動向を正確に予言している、
驚くべき記述の数々！

◎「解脱」「悟り」の真実／現代の仏陀麻原彰晃が最高の修行法を公開。
◎タントラ・イニシエーションの全貌／チベット密教・ゲールク派とオウムの秘儀を比較する。
◎確実に核戦争だ！／日本と世界の近未来を予言する。
◎総勢三十一名の体験談／「クンダリニーが覚醒する」「過去世が甦る」「悟りのプロセス」など、これが修行プロセスと霊的ステージの真実だ。



武田 健さん（東京都／学生）
「末法の時代は終わった」ということを確実に感じさせる本である。

松岡謙次さん（愛媛県／警備員）
読めば読むほど、「頑張ろう、やるぞ」と思わせるような素晴らしい本です。

山本 勇さん（石川県／会社員）
解脱するまでの心の状態が、多くの例を挙げてわかりやすく書いてある。

大森恵子さん（山口県／店員）
他の書では得られない絶対なる真理に触れることができた。

武田葉子さん（熊本県／主婦）
「人間として最高の、最終の目的は何か」ということがはっきり示されています。

本間智加子さん（東京都／経理事務）
宗教に対する偏見がいっぺんに吹き飛んでしまいました。

マハーヤーナ・スートラ

MAHAYANA SUTRA

麻原彰晃 著

解脱——それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!



解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ) 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 (本　社) 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325
(営業部) 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03(5370)1598

麻原彰晃の世界 シリーズ

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

PART-1



B6判　定価2500円

幸福に至る四つの実践

仏教の基本ともいえる「四預流支」。多彩な側面から縦横無尽に説いた画期的な説法群は、魂の解放を願う人にはもちろんのこと、幸福な人生を求めるすべての人に本当の生き方を指し示す。

PART-2



B6判　定価980円

尊師、麻原彰晃が斬る！

願望成就の秘訣、UFO&宇宙人、医学、幼児教育、音楽、食養、輪廻転生etc……。麻原彰晃尊師の魅力たっぷりの説法に、歌手、鹿島とも子さんとの対談も加わって、ますます充実。

PART-3



B6判　定価980円

真実！六道輪廻

永遠の真実〝六道輪廻〟。すなわち、わたしたちはこのサムサーラ（苦界）をさまよい、苦しみ続けているのだ。果たして、ここから抜け出すことはできるのか？ 臨死体験・大霊界・チャネリングなど、間違いだらけの死生観に終止符を打つ書。

絶賛発売中!!

PART-4



B6判　定価980円

宗教にだまされるな!

霊障、水子供養、先祖供養、守護霊……。この世にはびこる間違った観念を打ち破り、正しい道を説き示す麻原彰晃尊師。本当の幸福と心のやすらぎを得たいあなたに。

PART-6



B6判　定価980円

願望成就の秘法

安全で確実な願望成就の秘法とは? 仏教の教義にのっとった正しい願望成就法により、この世での願望は本人も気付かぬくらい自然とかなってしまう……。さらには、解脱・悟りにまで至れる方法を惜しげもなく公開。

PART-8



B6判　定価980円

仏教真理　六波羅蜜

大乗仏教における在家信徒の最も重要な修行法の一つ、六波羅蜜。この修行プロセスを着実に実践しさえすれば、在家でも必ず解脱へと至れる! 巻末には、高弟たちの体験談の特別付録付き。

PART-5



B6判　定価980円

絶対の真理

善業も悪業もなしたことが必ず返ってくる――幸福・不幸の根本原因であるカルマの法則を多くの実証例を交えて説く。

PART-7



B6判　定価800円

のみが語り得る八正
味合い。高い解脱・
道を、具体的に、現
に実践できる方法と
かす。巻末に「道に
れた経典（道相応）」
も掲載。



PART-10
五蘊無我（仮タイトル）
B6判　予価800円

近日発刊予定

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

えんじょい・はぴねす

Enjoy Happiness

月刊『えんじょい・はぴねす』



——主な内容——

◆ Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて——えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆ Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」　麻原彰晃尊師

◆ JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
——釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◆ Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆ **あなたもわたしも創造主**

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！



至福の未来をあなたの手に

オウム真理教

AUM SHINRIKYO

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい



……などなど、様々な願いで頭がいっぱいのあなた。日本でただ一人の最終解脱者・麻原彰晃尊師率いるオウム真理教は、完璧な教義に裏付けられた最高の修行法で、あなたの夢を早く確実に実現します。素晴らしい未来を見つけに、あなたも気軽にオウム真理教の門を叩いてみませんか？

※資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

麻原彰晃の世界 PART 9

資料請求券

◆各道場のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

麻原彰晃の世界 PART 9
「尊師、聖地インドを行く」
1991年12月28日　初版発行
定　価　750円（本体728円）
発行者　松本知子　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
〒154 東京都世田谷区世田谷2—8—17
電話　03（3439）6043　振替　東京2—109325

ISBN 4—87142—003—5　C0014　P750E

ISBN4-87142-003-5
C0014 P750E
定価 750 円(本体 728 円)

麻原彰晃の世界 PART9

尊師、聖地インドを行く

麻原彰晃

